

富士市埋蔵文化財調査報告 第81集

ま え の は ら い せ き ふ じ お か い ち こ ふ ん ぐ ん
前 の 原 遺 跡 ・ 富 士 岡 1 古 墳 群

集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書

2024 年

富士市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県富士市富士岡1614番地に所在する「^{しずおかけん ふじし ふじおか}前の原遺跡・^{まえのはらいせき}富士岡1古墳群」の発掘調査報告書である。
2. 集合住宅建設に伴う発掘調査を平成 24（2012）年2月 16 日から平成 24（2012）年3月 31日まで実施した。検出された遺構や出土遺物の整理事業は調査終了から令和6（2024）年8月 30 日まで実施した。報告書は令和6（2024）年9月 30 日に刊行した。
3. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

事業主体者	個人	
調査主体者	富士市教育委員会教育長	山田 幸男
調査担当者	富士市教育委員会文化振興課	佐藤 祐樹
発掘調査支援担当	株式会社 東日 文化財調査室(現 株式会社 珠流河国文化財調査研究所)	小金澤 保雄
	同	小金澤 彩可
発掘調査作業員	土佐谷 道雄・山本 勇・杉山 辰夫・小池 進・渡邊 敏雄	
報告書作成支援担当	株式会社東日 文化財調査室(現 株式会社 珠流河国文化財調査研究所)	小金澤 保雄
	同	小金澤 彩可
整理作業員	望月 豊・望月 洋子・眞野 祥子	
4. 写真撮影は現場写真撮影を小金澤保雄・小金澤彩可、遺物写真撮影を小金澤保雄・小金澤彩可・眞野祥子が行った。
5. 本書の執筆は佐藤祐樹・小金澤彩可・小金澤保雄が行い、それぞれの文責を文末に記した。全体の編集は小金澤彩可が担当した。
6. 本報告における出土品および記録図面・画像データ・写真などは富士市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝いたします。(順不同・敬称略) 大東建託株式会社

凡 例

1. 前の原遺跡・富士岡1古墳群の埋蔵文化財発掘調査における基準点・グリッドは以下のとおりである。

調査グリッド A1	平面直角座標	X座標	-91830.000000 m	Y座標	20770.000000 m
	緯度経度	北緯	35 度 10 分 19 秒	東経	138 度 43 分 40 秒
2. 挿図中に記載した断面基準線の数字は海拔高度である。単位はメートルとする。方位は真北を表す。
3. 遺物観察の色調は、新版『標準土色帳』（農林水産技術会議事務局監修 2002）を参考とした。
4. 遺物・遺構の方位・縮尺については各図中にスケール・方向を明示した。写真の縮尺は任意である。また挿図における凡例は各図中に示している。
5. 図版の引用については各図中に記した。
6. 各遺構の略称については文中に記した。

目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡概観.....	1
1 位置と地理的環境.....	1
2 歴史的環境と周辺の遺跡.....	3
3 前の原遺跡・富士岡1古墳群のこれまでの調査履歴.....	5
III 調査経過.....	6
1 発掘調査の経過.....	6
2 整理作業.....	6
IV 標準土層.....	6
V 発見された遺構と遺物.....	7
1 遺構.....	7
2 遺物.....	27
VI 自然科学分析編.....	48
蛍光X線による胎土分析.....	48
VII まとめ.....	56
胎土分類の比較による縄文土器.....	56
引用・参考文献.....	63
報告書抄録.....	73

挿図目次

図 1 前の原遺跡・富士岡1古墳群の位置と周辺の地形.....	2	図 12 6号住居跡 実測図.....	12
図 2 前の原遺跡・富士岡1古墳群と周辺の遺跡分布.....	3	図 13 7号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	13
図 3 前の原遺跡・富士岡1古墳群 今回の発掘調査位置と周 辺の発掘調査.....	5	図 14 8号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	14
図 4 標準土層.....	6	図 15 9号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	15
図 5 遺構全体図・グリッド配置図.....	7	図 16 10号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	16
図 6 花川戸第4号墳 周溝 実測図.....	8	図 17 11号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	17
図 7 1号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	9	図 18 12号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	17
図 8 2号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	9	図 19 13号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	17
図 9 3号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	10	図 20 14号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	18
図 10 4号住居跡 実測図.....	11	図 21 土坑 実測図.....	18
図 11 5号住居跡 実測・遺物出土状況図.....	12	図 22 1号配石遺構 実測・遺物出土状況図.....	19
		図 23 2号配石遺構 実測図.....	19

図 24	3号配石遺構 実測・遺物出土状況図	19	図 52	1号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 25	1・2・3号集石遺構 実測・遺物出土状況図	20	図 53	2号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 26	1号溝状遺構 実測図	21	図 54	3号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 27	2号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	22	図 55	2号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	37
図 28	3号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	23	図 56	3号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	37
図 29	4号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	24	図 57	4号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	38
図 30	5号溝状遺構 実測図	24	図 58	5号溝状遺構 出土遺物実測図	38
図 31	6号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	24	図 59	6号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	38
図 32	7号溝状遺構・10号土坑 実測・遺物出土状況図	25	図 60	7号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	39
図 33	8号溝状遺構 実測図	25	図 61	包含層 出土遺物拓影・実測図①	40
図 34	9号溝状遺構 実測図	25	図 62	包含層 出土遺物拓影・実測図②	41
図 35	ピット配置図	26	図 63	包含層 出土遺物拓影・実測図③	42
図 36	1号住居跡 出土遺物拓影・実測図	27	図 64	前の原遺跡出土遺物 胎土分類①	49
図 37	2号住居跡 出土遺物拓影・実測図	27	図 65	前の原遺跡出土遺物 胎土分類②	50
図 38	3号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 66	前の原遺跡出土遺物 胎土分類③	51
図 39	4号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 67	前の原遺跡出土遺物 胎土比較①	52
図 40	5号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 68	前の原遺跡出土遺物 胎土比較②	53
図 41	7号住居跡 出土遺物拓影・実測図	29	図 69	前の原遺跡出土遺物 胎土比較③	54
図 42	8号住居跡 出土遺物拓影・実測図	30	図 70	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 A群	57
図 43	9号住居跡 出土遺物拓影・実測図	31	図 71	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 B群	58
図 44	10号住居跡 出土遺物拓影・実測図①	32	図 72	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 C群	58
図 45	10号住居跡 出土遺物拓影・実測図②	33	図 73	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 D・E群	59
図 46	11号住居跡 出土遺物拓影・実測図	33	図 74	縄文時代中期の五領ヶ台式土器を中心とした年代と遺跡の分布	60
図 47	12号住居跡 出土遺物実測図	34	図 75	縄文時代中期の五領ヶ台式土器の西南関東地方の遺跡の分布	61
図 48	13号住居跡 出土遺物実測図	34	図 76	静岡県東部の縄文時代中期前半の東海系土器出土遺跡の分布	62
図 49	14号住居跡 出土遺物拓影・実測図	34			
図 50	1号配石遺構 出土遺物拓影・実測図	35			
図 51	3号配石遺構 出土遺物拓影・実測図	36			

表目次

表 1	前の原遺跡・富士岡1古墳群周辺の遺跡一覧	4	表 4	土器観察表	43
表 2	周辺の発掘調査履歴	5	表 5	石器観察表	47
表 3	ピット一覧表	26			

写真図版目次

写真図版 1	発掘調査前 南西から	6	写真図版 12	7号住居跡 検出状況 西から	66
写真図版 2	埋戻し終了 北西から	6	写真図版 13	8号住居跡 検出状況 南から	66
写真図版 3	花川戸第4号墳 周溝 検出状況 南西から	65	写真図版 14	10号住居跡 遺物出土状況 南から	66
写真図版 4	花川戸第4号墳 周溝 完掘 南西から	65	写真図版 15	11号住居跡 完掘 南東から	66
写真図版 5	花川戸第4号墳 周溝 完掘 北東から	65	写真図版 16	12号住居跡 検出状況 南東から	66
写真図版 6	1号住居跡 検出状況 北から	65	写真図版 17	13号住居跡 土層 南から	66
写真図版 7	2号住居跡 検出状況 西から	65	写真図版 18	14号住居跡 検出状況 北から	66
写真図版 8	3号住居跡 検出状況 西から	65	写真図版 19	3号溝状遺構 検出作業 北から	67
写真図版 9	4号住居跡 検出状況 南から	65	写真図版 20	4号溝状遺構 遺物出土状況 北から	67
写真図版 10	5号住居跡 検出状況 南東から	65	写真図版 21	8号溝状遺構 検出状況 東から	67
写真図版 11	6号住居跡 完掘 南から	66	写真図版 22	5号溝状遺構 完掘 北から	67

写真図版 23	標準土層 北から.....	67	写真図版 38	13 号住居跡 出土遺物	70
写真図版 24	調査区西側 南から.....	67	写真図版 39	14 号住居跡 出土遺物	70
写真図版 25	調査区東側 南から.....	67	写真図版 40	1号配石遺構 出土遺物	70
写真図版 26	調査区北東側 北東から.....	67	写真図版 41	3号配石遺構 出土遺物	70
写真図版 27	1号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 42	1号集石遺構 出土遺物	70
写真図版 28	2号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 43	2号集石遺構 出土遺物	71
写真図版 29	3号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 44	3号集石遺構 出土遺物	71
写真図版 30	4号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 45	2号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 31	5号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 46	3号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 32	7号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 47	4号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 33	8号住居跡 出土遺物.....	69	写真図版 48	5号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 34	9号住居跡 出土遺物.....	69	写真図版 49	6号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 35	10 号住居跡 出土遺物	69	写真図版 50	7号溝状遺構 出土遺物	72
写真図版 36	11 号住居跡 出土遺物	70	写真図版 51	包含層出土遺物①.....	72
写真図版 37	12 号住居跡 出土遺物	70	写真図版 52	包含層出土遺物②.....	73

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

合資会社 仁藤商店（以下、事業者）は、当該地において、集合住宅新築工事を計画した。富士市教育委員会文化振興課は、包蔵地に隣接地していることや包蔵地範囲が拡大する可能性を考え、試掘・確認調査を実施したい旨を回答した。

それに基づき、文化振興課職員による試掘・確認調査を平成 23 年 7 月 27 日～8 月 30 日に行い【第 12 地区第 1 次調査】、新たに古墳 1 基を発見し、「花川戸第 4 号墳」とした。

第 2 次調査では敷地内にトレンチ 6 本を新たに設定し、重機による表土除去後、人力による精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

計画建物は、北側と南側と 2 棟あり、南側については保護層 30cm が確保されるものの、北側の建物については計画通りであると保護層がはかれないことが明らかとなり、記録保存調査を実施することで合意した。

調査は、富士市教育委員会が調査主体者となり、支援業者として民間調査組織を使うことで実施することで協議を開始し、平成 24 年 1 月 10 日、富士市教育委員会・事業者・発掘調査支援業者（株式会社 東日）の三者で「平成 23 年度 富士岡 1 古墳群における文化財調査に関する協定書」締結した。協定書では、平成 24 年 3 月 31 日発掘作業を終了し、平成 25 年 3 月 31 日までに整理作業・報告書刊行を終了させることが決められた。

また、平成 24 年 1 月 19 日、事業者と株式会社東日の関連会社である株式会社珠流河国文化財調査研究所の間で、調査費用に関する契約がなされた。

（佐藤 祐樹）

II 遺跡概観

1 位置と地理的環境

前の原遺跡・富士岡 1 古墳群は、富士山南麓に所在する静岡県富士市富士岡の標高 20 ～ 40m 付近に位置する（図 1）。南へ 270m で東名高速道路、北へ 1,400m で新東名高速道路が、それぞれ東西に通っている。調査地点はすぐ東を流れる赤淵川の河岸段丘上に位置し、近年は、赤淵川沿いに富士溶岩と愛鷹山の間の谷あいを走る県道 76 号線が市域中部と連結し交通量が増しているが、基本的にはせせらぎと木々に囲まれた静かな地である。この地の地形・地質的特徴として、南側にかつての浮島沼が広がっていたこと、また富士山と愛鷹山の境の地であることが挙げられる。

1. 南側に広がっていたかつての浮島沼

南側にはかつての浮島沼であった平地が広がり、遺跡から現在の駿河湾までは 4km ほどの距離である。約 10,000 年前には現在の浮島の平地は海であったが、富士川から運ばれた土砂が駿河湾の湾岸流で西に広がり堆積し、次第に現在の海岸線辺りに浜堤を形成していった。当初はこの浜堤により汽水湖がつくられたが、縄文海進のピークを過ぎた縄文時代前期から中期の 5,400 ～ 4,000 年前頃、浜堤は完全に閉じ、やがて富士山や愛鷹山を流下する小河川により徐々に淡水湖へと変わっていった。小河川は土砂も運び、それにより湖は少しずつ北側が沖積地となり、また湖を浅くし湿原化していったが、それでもなお大正時代までは富士市の吉原地区東側から沼津市の西側まで続く、東西約 13km、南北約 2km の大きな湿原であった。現在のように干拓されたのは、昭和 18(1943) 年の昭和放水路の完成、また昭和 41(1966) 年の田子の浦港開港に伴う沼川排水工事の完成によるものである。以降、浮島の地は水田地・工業地となり、年々住宅地や商業施設も増えてきている。浮島沼の昔の面影は富士市の浮島ヶ原自然公園（富士市中里 2553-8）などで見ることができ、この公園はバードウォッチングの名所としても知られている。

2. 富士山と愛鷹山の境の地

遺跡のすぐ東を流れる赤淵川は、地質的に愛鷹山と富士山を隔てる川である。今から約 11,000 ～ 8,000 年前の間、何度かの噴火で新富士旧期の富士山から噴出した溶岩は愛鷹山に遮られ、現在の富士市と三島市の二方向へ流下し、現富士市域においては愛鷹山の西側、つまり当地が溶岩の東端となった。当地を形成しているのは 10,000 年前に噴出し流下した曾比奈溶岩 I である。

愛鷹山に端を発する赤淵川は愛鷹山麓を北東から南西へ流れ下り、標高 400 ～ 200m の間で千束川など小河川と合流しながら、やがて流れを南北方向に変え、新富士旧期の溶岩と愛鷹山の境を流下していく。赤淵川や千束川の水量は常時は少ないが、雨などで水量が多い時には幻の滝として知られる「赤淵川の七滝」が出現する。これらの滝は富士溶岩が作り出した景観でもある。



図1 前の原遺跡・富士岡1古墳群の位置と周辺の地形

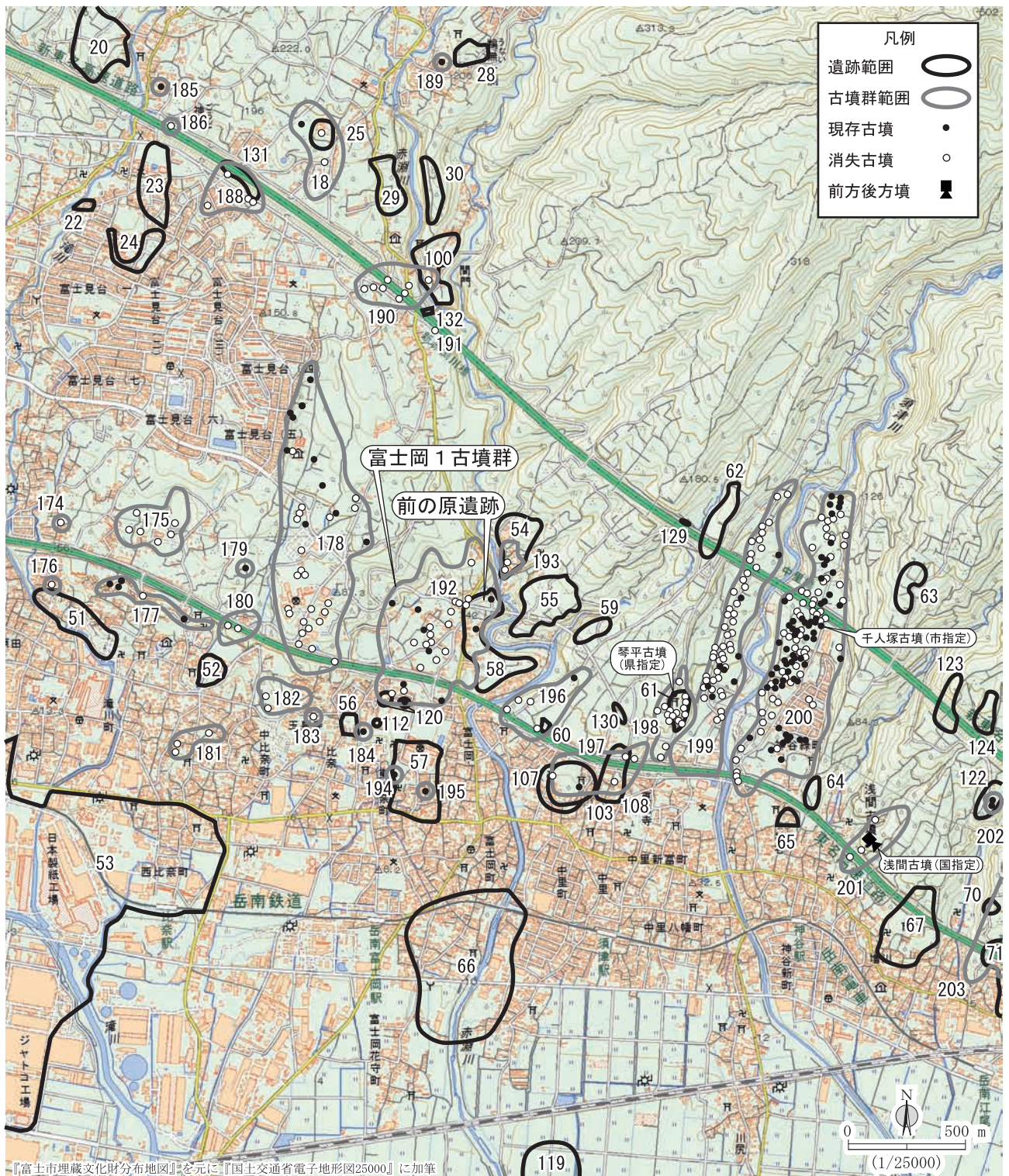


図2 前の原遺跡・富士岡1古墳群と周辺の遺跡分布

2 歴史的環境と周辺の遺跡

1. 縄文時代

富士市内の縄文時代の遺跡は、富士宮市から続く星山丘陵沿いの地域と、富士山南東麓から愛鷹山にかけての地域の2地域に集中する傾向がある。前の原遺跡は後者に位置し、近接地では花川戸遺跡(54)で早～中期、向山遺跡(55)で早期、中尾沢遺跡(59)で早期・前期～中期、分地遺跡(130)で中期、そして前の原遺跡(58)で前期～中期の遺物が出土している。富士市域で前期の遺跡数が少ないことを考えると、花川戸遺跡、中尾沢遺跡、前の原遺跡と、富士山と愛鷹山の境である赤淵川沿いで前期の遺跡が集中して存在することは注目される。

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	遺跡の時代
20	澤添遺跡	神戸	散布地	縄文古墳
22	三度蒔 A 遺跡	三ツ沢	散布地	縄文
23	寺下遺跡	神戸	散布地	縄文、奈良・平安
24	三度蒔 B 遺跡	三ツ沢	散布地	縄文、古墳
25	神戸石坂遺跡	神戸	散布地	縄文
28	鵜無ヶ淵遺跡	鵜無ヶ淵	散布地	縄文
29	亀窪遺跡	間門	散布地	旧石器～縄文
30	峰山遺跡	間門	散布地	旧石器～弥生
51	斎藤上遺跡	原田	散布地	縄文、古墳
52	赫夜姫遺跡	原田	散布地	縄文、古墳
53	沖田遺跡	今泉	その他の遺跡 その他の墓	弥生～古墳、奈良・平安
54	花川戸遺跡	比奈	散布地	縄文
55	向山遺跡	富士岡	集落跡	縄文、弥生～古墳
56	竹の鼻遺跡	比奈	散布地	縄文、古墳
57	祢宜ノ前遺跡	比奈	集落跡	古墳、奈良・平安
58	前の原遺跡	富士岡	散布地	縄文
59	中尾沢遺跡	富士岡	散布地	縄文、古墳
60	丸山遺跡	富士岡	散布地	古墳
61	大塚道東遺跡	中里	散布地	縄文
62	椎木平遺跡	富士岡	散布地	縄文
63	百間遺跡	中里	散布地	縄文
64	神谷遺跡	神谷	散布地	縄文
65	地蔵畑遺跡	神谷	散布地	奈良・平安
66	花守遺跡	富士岡	散布地	弥生～古墳、奈良
67	宮添遺跡	増川	集落跡	旧石器～平安
70	江尾遺跡	江尾	散布地	縄文
71	コーカン畑遺跡	江尾	散布地	縄文、古墳
100	夷城跡	間門	城館跡	中世
103	天神川城跡	中里	城館跡	中世
107	天念寺遺跡	中里	散布地	古墳～奈良・平安
112	医王寺経塚	比奈	その他の遺跡	平安
119	行僧遺跡	中里	散布地	弥生
120	下前原遺跡	比奈	集落跡	縄文、平安
122	平椎遺跡	増川	集落跡	弥生、古墳
123	天ヶ沢東遺跡	増川	散布地	縄文

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	遺跡の時代
124	古木戸 A 遺跡	増川	散布地	旧石器、縄文
129	富士岡中尾遺跡	富士岡	散布地	縄文
130	分地遺跡	中里	散布地	縄文
131	松坂遺跡	神戸	散布地	縄文
132	不動棚遺跡	間門	散布地	縄文 中世
174	滝川 1 古墳群	原田	古墳	古墳
175	滝川 2 古墳群	原田	古墳	古墳
176	滝川 3 古墳群	原田	古墳	古墳
177	滝川 4 古墳群	原田	古墳	古墳
178	比奈 1 古墳群	比奈	古墳	古墳
179	比奈 2 古墳群	原田	古墳	古墳
180	比奈 3 古墳群	比奈	古墳	古墳
181	比奈 4 古墳群	比奈	古墳	古墳
182	比奈 5 古墳群	比奈	古墳	古墳
183	比奈 6 古墳群	比奈	古墳	古墳
184	比奈 7 古墳群	比奈	古墳	古墳
185	神戸 1 古墳群	神戸	古墳	古墳
186	神戸 2 古墳群	神戸	古墳	古墳
188	神戸 4 古墳群	神戸	古墳	古墳
189	鵜無ヶ淵古墳群	鵜無ヶ淵	古墳	古墳
190	間門古墳群	間門	古墳	古墳
191	間門松沢第 1 号墳	間門	古墳	古墳
192	富士岡 1 古墳群	富士岡	古墳	古墳
193	富士岡 2 古墳群	富士岡	古墳	古墳
194	富士岡 3 古墳群	比奈	古墳	古墳
195	富士岡 4 古墳群	富士岡	古墳	古墳
196	中里 1 古墳群	中里	古墳	古墳
197	中里 2 古墳群	中里	古墳	古墳
198	中里 3 古墳群	中里	古墳	古墳
199	中里 4 古墳群	中里	古墳	古墳
200	神谷古墳群	神谷	古墳	古墳
201	増川古墳群	神谷	古墳	古墳
202	平椎古墳群	増川	古墳	古墳
203	船津 1 古墳群	江尾	古墳	古墳

※『富士市埋蔵文化財分布地図【富士市内における遺跡一覧】より作成』

表 1 前の原遺跡・富士岡 1 古墳群周辺の遺跡一覧

2. 古墳時代

富士市内の古墳時代の遺跡は、富士川の沖積地や浮島沼の湿地を生産地として弥生時代から発達した。富士岡1古墳群周辺では宮添遺跡(67)、神谷遺跡(64)、地蔵畑遺跡(65)、天念寺遺跡(107)、祢宜ノ前遺跡(57)が、標高 20 ～ 30m ほどの位置に存在する。これらの遺跡は南に広がる浮島沼湿地を生産域としていたと考えられる。これらの集落を背景に、富士山南東麓～愛鷹南西麓に、多くの古墳が作られた。

前期に築造された古墳として、増川古墳群(201)内には国指定史跡であり、全長 93m の市内最大の前方後方墳である浅間古墳がある。また比奈1古墳群(178)には全長 60m の前方後円墳である東坂古墳が存在した。中期初頭には中里3古墳群(198)内に所在する県指定史跡の琴平古墳などが築造された。

しかし古墳時代中期にあたる AD400 ～ 440 年頃、新富士山南側山体から大淵スコリアが噴出した。富士川河口断層帯の活動、浮島沼の水位上昇も同時期に起こったと推定され、浮島沼中央部の浜提上に所在した沼津市の雌鹿塚遺跡は、これらの変動により水没し放棄された可能性が指摘されている。このような自然環境の変化が当時の富士市域にも大きく影響したことは間違いなく、古墳時代中期の集落は激減する。後期になってようやくこの地域の人々の活動は再び活発化し、古墳も築造されていく。

これだけの自然災害ののち、6世紀後半になると、東駿河は全国的に見ても多く古墳が築造される地域となった。富士山南東麓から愛鷹南西麓にかけて、滝川 1 ～ 4 古墳群(174 ～ 177)、比奈1～7古墳群(178 ～ 184)、神戸1・2・4古墳群(185・186・188)、鵜無ヶ淵古墳群(189)、間門古墳群(190)、中里1～4古墳群(196 ～ 199)、増川古墳群(201)等の他、神谷古墳群(200)には市指定史跡の千人塚古墳がある。富士岡1～4古墳群(192 ～ 195)に含まれる富士岡1古墳群も、この時期に築造された古墳の集中地のひとつである。

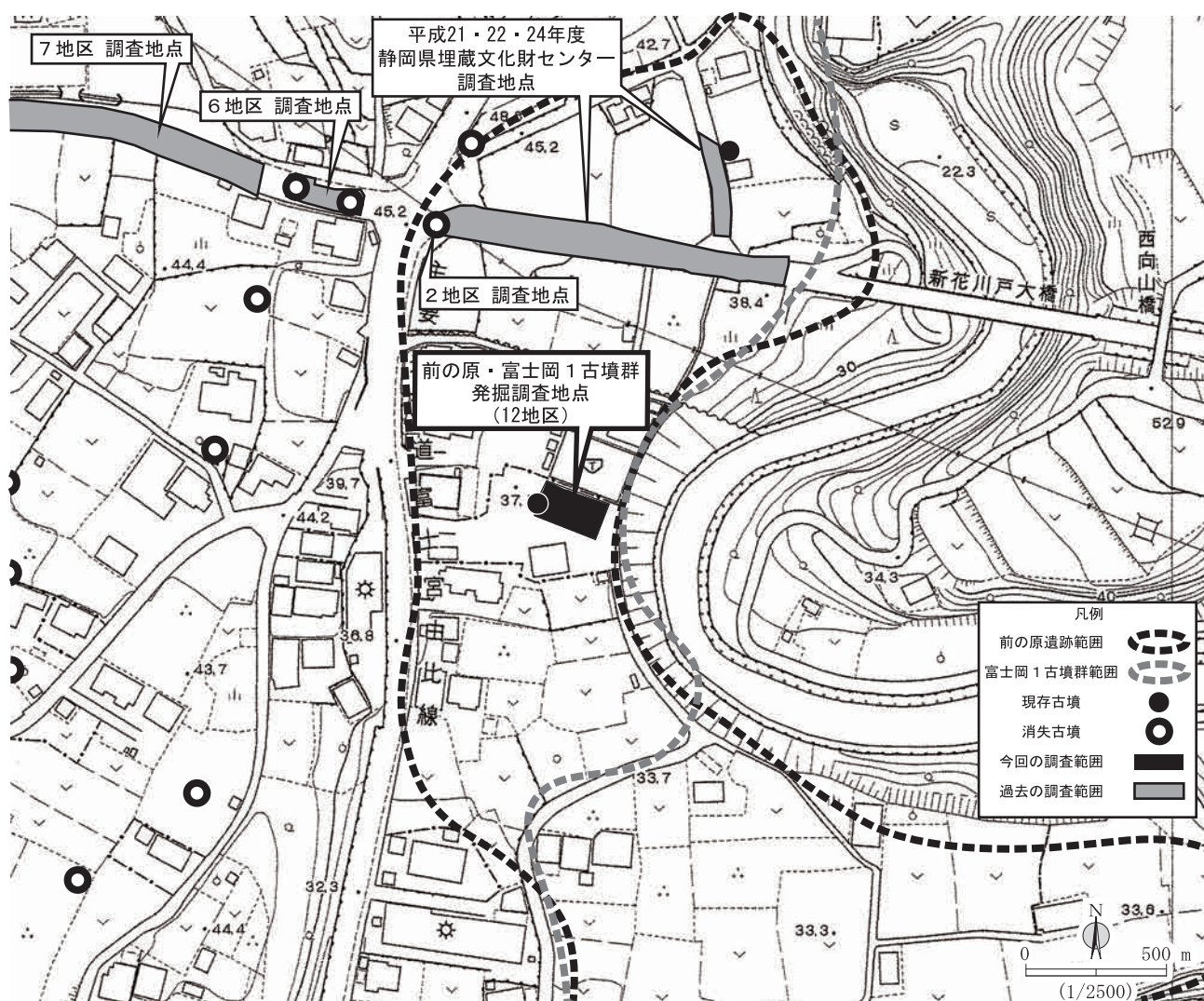


図3 前の原遺跡・富士岡1古墳群 今回の発掘調査位置と周辺の発掘調査

地区名	調査原因	調査面積 m ²	調査期間	報告書
2地区	道路改修工事による	20	平成6(1994)年7月4日～同年8月12日	富士市教委 1995『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集花川戸第1号墳』
6地区	農道整備事業による	650	平成14(2002)年9月3日～同年10月31日	富士市教委 2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』
7地区	農道整備事業による	115	平成15(2003)年10月15日～同年10月16日 平成16(2004)年2月19日～同年2月20日	富士市教委 2009『平成15・19年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
	農道整備事業による	6,975.8 327	平成21(2009)年8月～平成22(2010)年8月 平成24(2012)年6月～8月	静岡県埋蔵文化財センター 2013『富士岡1古墳群他』
12地区	集合住宅建設による	302.223	平成24(2012)年2月16日 ～同年3月31日	本書

表2 周辺の発掘調査履歴

3 前の原遺跡・富士岡1古墳群のこれまでの調査履歴

富士岡1古墳群では、これまでに12の地区で調査が行われてきた(図3・表2)。このうち、2地区では富士市教育委員会により平成6(1994)年に花川戸第1号墳の調査が行われた。6地区では平成14(2002)年に花川戸第2・3号墳の調査が行われた。平成21・22・24(2009・2010・2012)年には静岡県埋蔵文化財センターにより調査が行われ、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓5基、古墳時代後期の古墳周溝が3基検出された。また旧石器時代の尖頭器やナイフ形石器、縄文時代早期、前期～中期初頭の遺構遺物が出土した。

今回の調査では現地調査は富士岡1古墳群として調査したが、平成21・22・24年の埋蔵文化財センターの調査結果や今回の調査での縄文時代の遺構・遺物の検出・出土状況から、富士市教育委員会は富士岡1古墳群の南側に所在する縄文時代の遺跡である前の原遺跡の範囲を北に広げることを決定した。報告書では前の原遺跡・富士岡1古墳群として報告することとなった。

(小金澤 彩可)

Ⅲ 調査経過

1 発掘調査の経過

平成 24 年 2 月中旬に重機による表土掘削を行い、作業員による精査作業を開始した。2 月下旬から 3 月中旬にかけて花川戸第 4 号墳精査と縄文時代の遺構確認面検出・精査、包含層精査を行った。3 月下旬からは縄文時代の包含層精査、遺構検出・精査を行い、順次完掘、写真撮影、遺構記録保存を行い調査が終了した。調査面積は 302.223 m²であった。



写真図版 1 発掘調査前 南西から



写真図版 2 埋戻し終了 北西から

2 整理作業

整理作業は出土した遺物などを整理し、発掘調査の成果を報告書の形で公表することを主な目的として行った。

整理作業では、遺物整理・測量図整理・現場写真整理・報告書作成の作業を行った。遺物整理では、主に遺物の洗浄・注記・拓影・実測・写真撮影などの作業を行った。拓影・実測・写真撮影は、出土した遺物の中から選別したもののみを対象にした。遺物実測は NEXT ENGINE を用いたレーザー 3D 計測または Agisoft Metashape Standard を用いた 3D 写真画像計測を行い、拓影図は Agisoft Metashape Standard を用い 3D 画像をオルソ処理し作成した。報告書図版作成は Adobe Illustrator、Adobe Photoshop、編集作業は Adobe InDesign を用いた。遺物写真撮影はデジタルカメラ Canon EOS 5D を用いた。

報告書は、遺物整理・測量実測図面整理・現場写真整理の成果をもとに、文章の執筆・編集を行い作成した。

Ⅳ 標準土層

調査区の南壁を標準土層とした（図 4・5）。

表土層	近世～近代の耕作土。
第Ⅰ層	黒褐色土 締まりやや強く粘性強い。径 5 ～ 10mm 大のスコリア粒を多く含む。古墳周溝確認面。
第Ⅱ層	黒褐色土 締まり粘性共に強い。径 1 ～ 3mm 大のスコリア粒を含む。炭化物を少量含む。縄文時代の遺物を含む。
第Ⅲ層	黒褐色土 締まり粘性共に強い。径 1mm 大のスコリア粒を少量含む。縄文時代の包含層。
第Ⅳ層	暗黄褐色土 締まり粘性共に強い。径 1mm 大のスコリア粒を僅かに含む。縄文時代の遺構確認面。

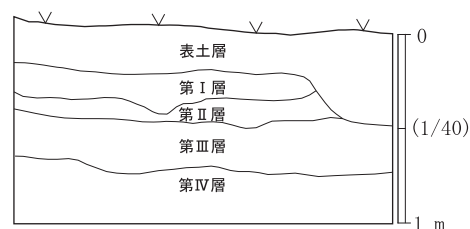


図 4 標準土層

(小金澤 彩可)

V 発見された遺構と遺物

1 遺構

今回の調査では、古墳周溝1基、住居跡14軒、土坑10基、配石遺構3基、集石遺構3基、溝状遺構9条、遺構に付属しないピット28基が検出された。遺構の時代は中世以降、古墳時代、縄文時代に分かれる。

調査区全体は近代～現代の建物により上部が削平されており、特に古墳の周溝は上部が大きく削平されていて下部のみ検出することができた。縄文時代の包含層や遺構確認面も上部が削平されていたが比較的残りが良く、遺物や遺構を検出することができた。

以下、遺構別に記述していく。

古墳周溝

事前の2回の確認調査で存在が確認された花川戸第4号墳の周溝である。調査区西側で検出された。

花川戸第4号墳周溝（SZ04-SD01、SZ04-SX01）（図6）

調査区西側のB4-B5-C4-C5グリッド、標高121.50mにて検出された。

古墳の周溝であるSZ04-SD01と、確認調査で「古墳造成土」と定義されたSZ04-SX01が並行して検出され、SZ04-SD01がSZ04-SX01を切る形で検出されている。また古墳崩落・攪乱時に堆積したとみられる土層がSZ04-SD01・SX01の上部から検出された。検出されたのは周溝の東側の一部で、西側は調査区域外に延びている。近世～近代の耕作や建物により上部を削平、また一部を攪乱されていた。遺構に付属するピットは9基検出された。

規模は現況で、SZ04-SD01が最大長8.18m、最大幅1.86m、深さ0.33m、主軸の方向はN-38°-Eを指向する。SZ04-SX01は最大長5.17m、最大幅1.61m、深さ0.14m、主軸の方向は不明である。

遺構に付属するピットが9基検出された（SZ04-Pit01～09）。SZ04-Pit05以外はSZ04-SD01東側に沿って検出された。各ピットの計測値は図6に示した。

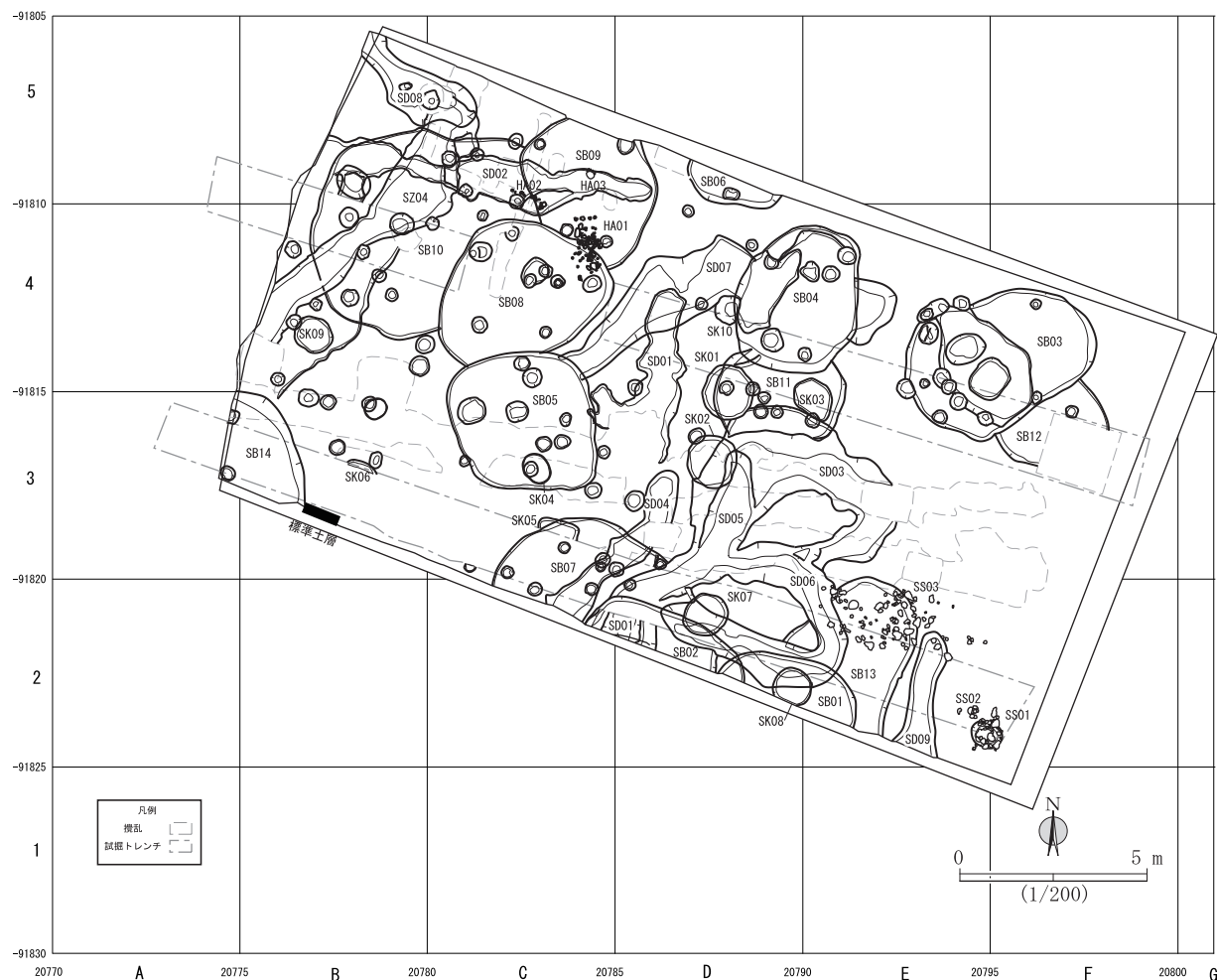


図5 遺構全体図・グリッド配置図

SZ04-SD01

- 1 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い。径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む。古墳崩落土・堆積土。
- 2 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い。径3～6mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝覆土。
- 3 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い。径2～5mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝覆土。
- 4 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや強い。径5～10mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝覆土。
- 5 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い。径1～4mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝覆土。

SZ04-SX01

- 6 黒褐色土 締まり粘性共にやや強い。径5～10mm大のスコリア粒を僅かに含む。古墳築造に伴う造成土。
- 7 黒褐色土 締まり強く粘性やや弱い。径3～8mm大・径20mmのスコリア粒を僅かに含む。墳丘盛土。

SZ04-Pit共通

- 8 黒褐色土 締まり強く粘性やや弱い。径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝内ビット覆土。
- 9 黒褐色土 締まり粘性共にやや強い。径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む。周溝内ビット覆土。

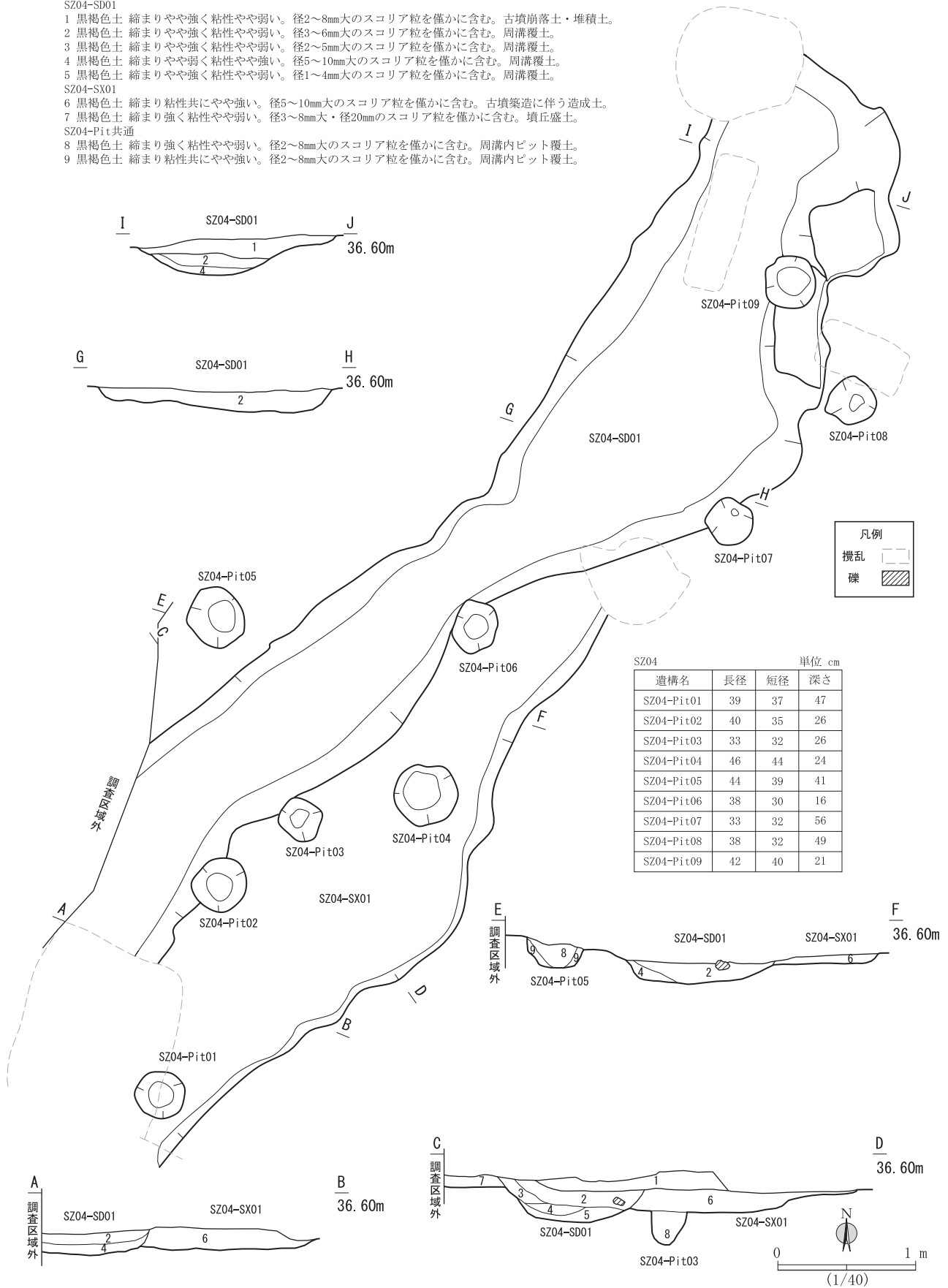
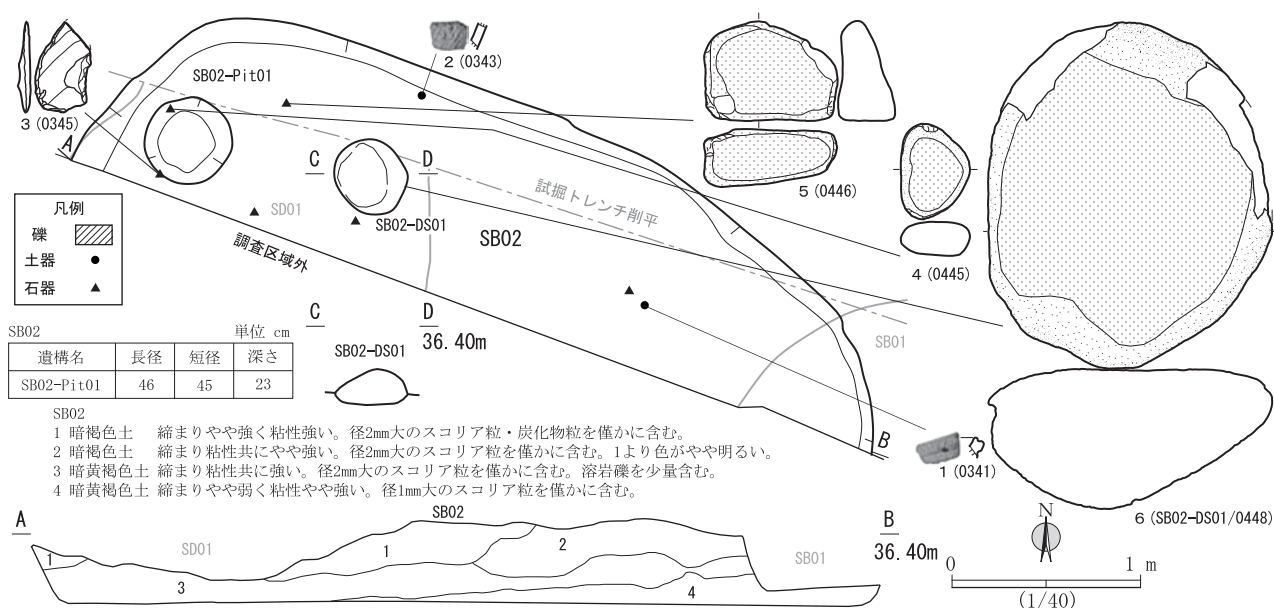
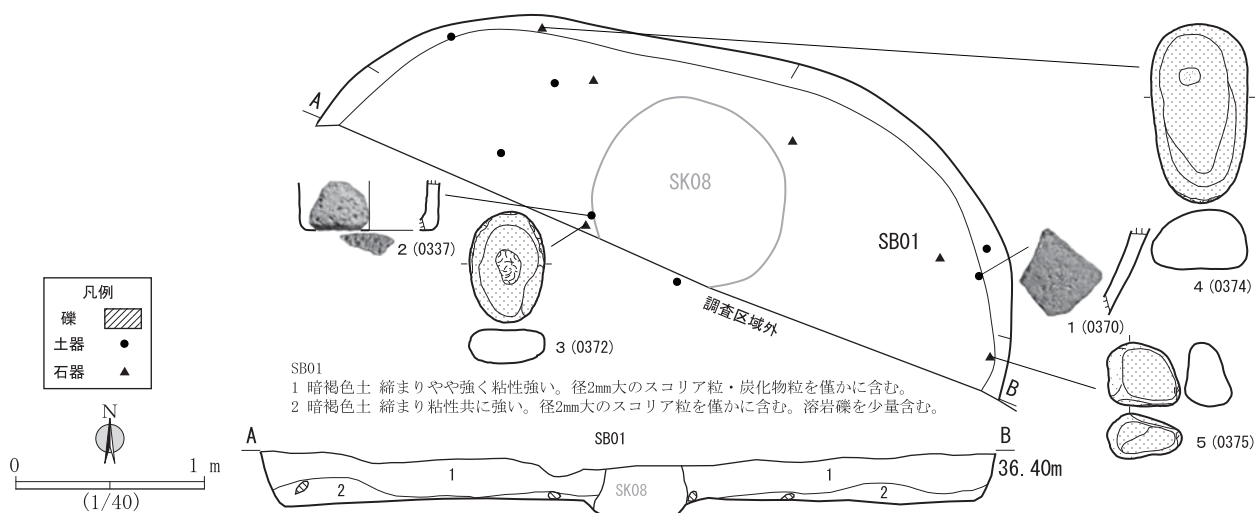


図6 花川戸第4号墳 周溝 実測図

遺物は、遺構の立地から縄文時代の土器・石器が覆土から出土したが、古墳時代の遺物は僅かな小破片のみ出土した。時代は遺構から判断して古墳時代後期である。



住居跡

住居跡は調査区全体で14軒検出された。時代はすべて縄文時代である。

1号住居跡 (SB01) (図7)

調査区南東側 D2-E2 グリッド、標高 36.40m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。8号土坑に切られている。遺構の西側で2号住居跡、北側で6号溝状遺構、東側で13号住居跡を切っている。平面形態は円～楕円形と推定され、規模は現況で南北 1.29m、東西 3.87m、深さ 0.28m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器は磨石・敲石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

2号住居跡 (SB02) (図8)

調査区南側中央の C2-D2 グリッド、標高 36.47m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。東側を1号住居跡、北側を7号土坑、西側を1号溝状遺構に切られている。北側で6号溝状遺構、西側で7号住居跡を切っている。遺構に付属するピットは現況で1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 1.10m、東西 4.50m、深さ 0.43m を測る。主軸の方向は不明である。

台石が1基検出された (SB02-DS01)。ピットは1基検出された (SB02-Pit01)。ピットの計測値は図8に示した。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器はスクレイパー、石皿、磨石・敲石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

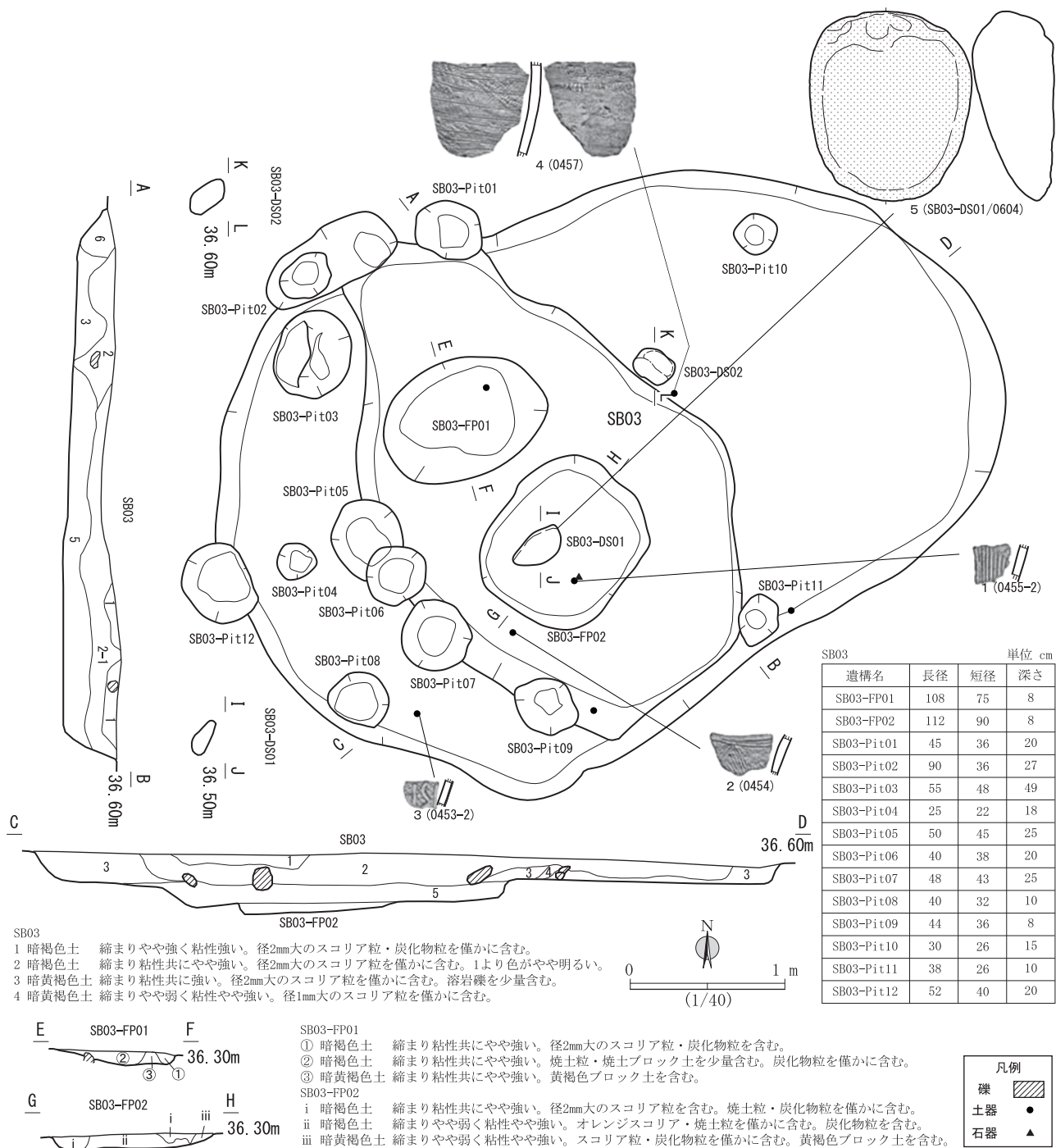


図9 3号住居跡 実測・遺物出土状況図

3号住居跡 (SB03) (図9)

調査区北東側の E3-E4-F3-F4 グリッド、標高 36.44m にて検出された。

遺構の南東側で 12 号住居跡を切っている。西側で 4 号住居跡・7 号溝状遺構、南西側で 11 号住居跡・3 号溝状遺構が検出された。遺構に付属する炉跡が 2 基、台石が 2 基、ピットは 12 基検出された。遺構から 30 ～ 60cm 大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形、規模は最大長 5.06m、最大幅 3.92m、深さ 0.37m、主軸の方向は N-65°-E を測る。

炉跡が 2 基検出された (SB03-FP01・02)。台石は 2 基検出された (SB03-DS01・02)。SB03-FP02 の上に、斜めに立てた状態で台石 (SB03-DS01) が出土した。ピットは 12 基検出された (SB03-Pit01 ～ 12)。各炉跡・ピットの計測値は図 9 に示した。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式縄文土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代前期後半である。

4号住居跡 (SB04) (図10)

調査区中央北よりの D4-E4 グリッド、標高 36.53m にて検出された。

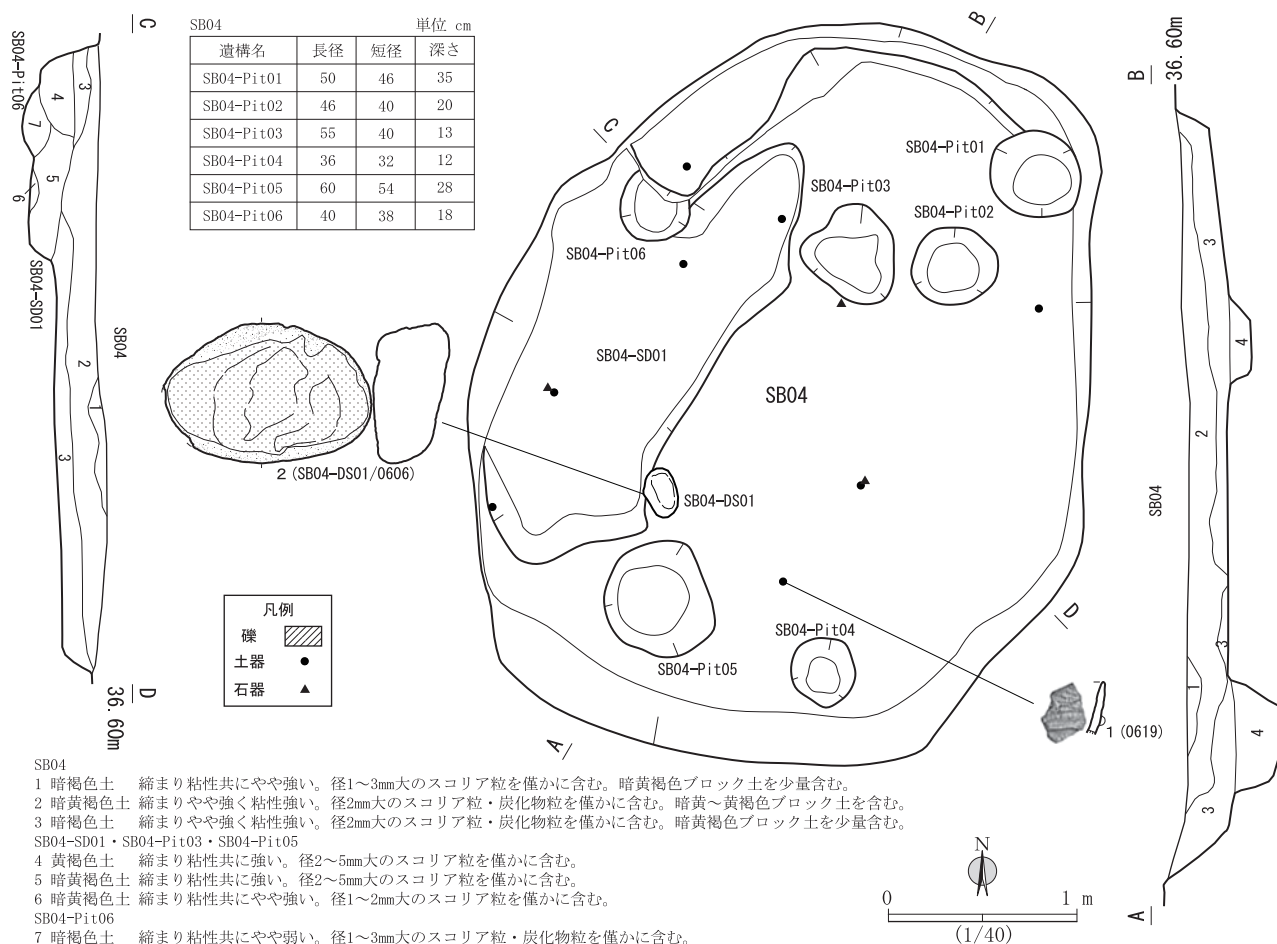


図 10 4号住居跡 実測図

遺構の中央で7号溝状遺構、南側で11号住居跡を切っている。北西側で6号住居跡が検出された。遺構内の西側で溝状の掘り込みが検出された(SB04-SD01)。遺構に付属するピットは6基、台石が1基検出された。遺構から30～60cm大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。

平面形態は楕円形、規模は最大長 4.00m、最大幅 3.33m、深さ 0.28m、主軸の方向は N-29°-E を計る。

遺構内西側で検出された SB04-SD01 は、最大長 2.61m、最大幅 1.27m、深さ 0.21m を測る。ピットは6基検出された(SB04-Pit01～06)。各ピットの計測値は図 10 に示した。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

5号住居跡 (SB05) (図 11)

調査区中央西よりの C3-C4 グリッド、標高 36.32m にて検出された。

遺構の上部は近現代の建物跡により削平されていた。北東側で7号溝状遺構、北西側で8号住居跡を切っている。東側で1号溝状遺構、南東側で7号住居跡が検出された。遺構に付属する土坑が2基、ピットは3基検出された。遺構内で石皿が3点検出された。遺構から30～60cm大の礫が検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は不整形、規模は南北 3.70m、東西 3.72m、深さ 0.14m、主軸の方向は不明である。

土坑は2基検出された(SB05-SK01・02)。ピットは3基検出された(SB05-Pit01～03)。各土坑・ピットの計測値は図 11 に示した。

遺物は縄文時代前期後半の外来系土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・敲石、台石、石皿が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

6号住居跡 (SB06) (図 12)

調査区北側中央の D4-D5 グリッド、標高 36.52m にて検出された。

遺構の北側は調査区域外に延びている。南西側で9号住居跡・2号溝状遺構、南側で7号溝状遺構、南東側で4号住居跡が検出された。遺構に付属するピットは1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 0.82m、東西 2.59m、深さ 0.46m を測る。主軸の方向は不明である。

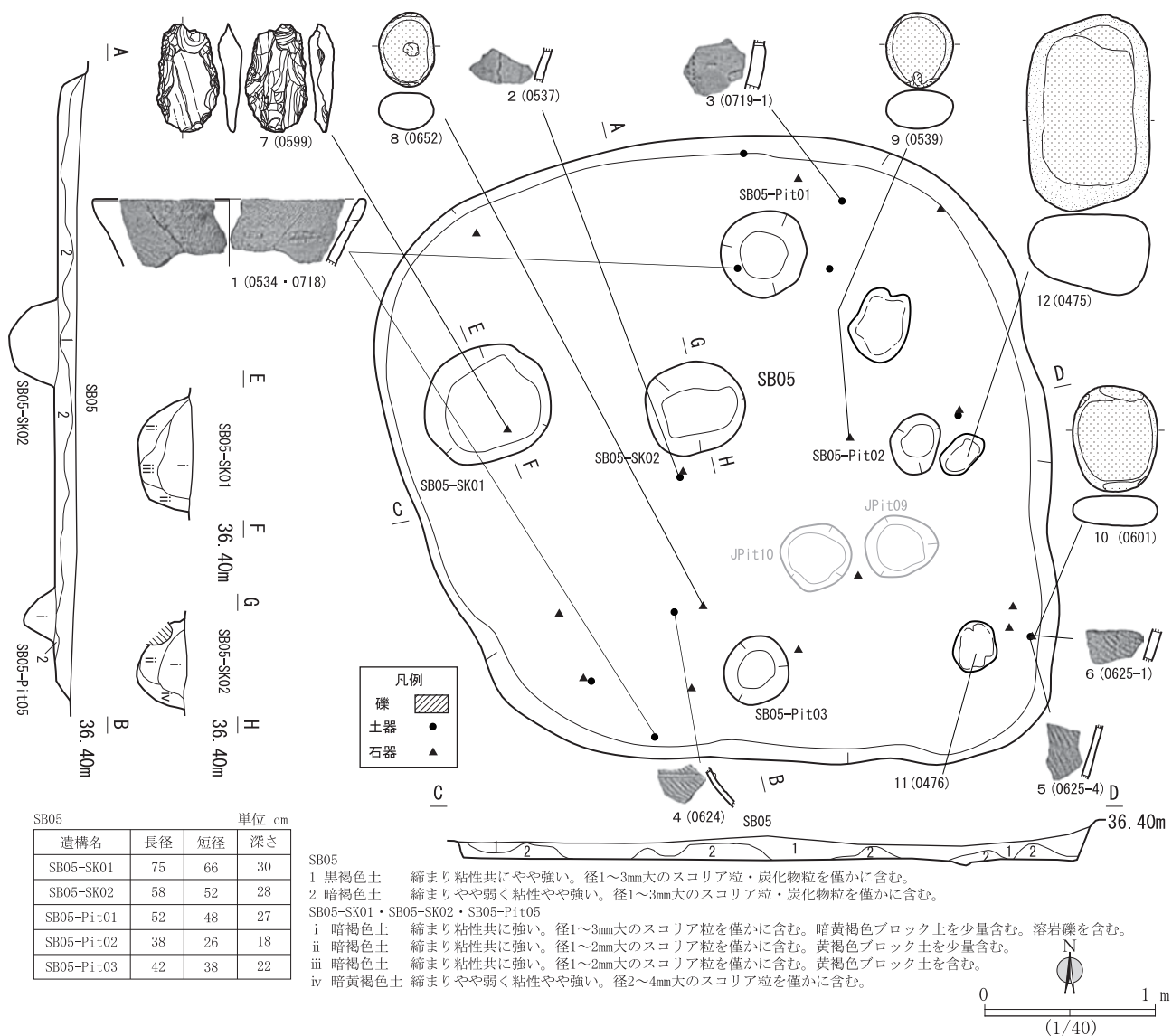


図 11 5号住居跡 実測・遺物出土状況図

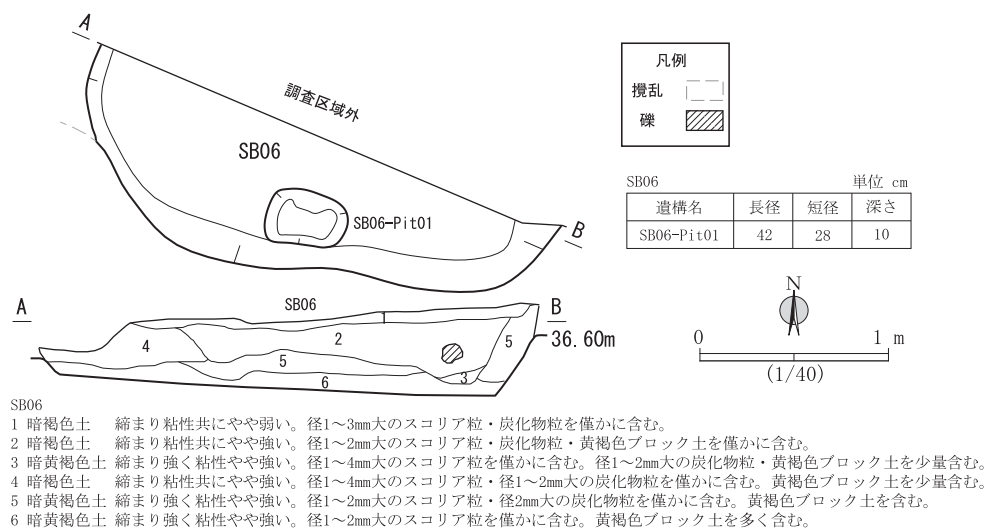


図 12 6号住居跡 実測図

ピットは1基検出された (SB06-Pit01)。ピットの計測値は図 12 に示した。

遺物は出土しなかった。

時期は遺構の検出状況や覆土から判断して縄文時代である。

7号住居跡 (SB07) (図 13)

調査区南側中央の C2-C3-D2-D3 グリッド、標高 36.29m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。中央を1・4・5号溝状遺構、東側を2号住居跡・6号溝状遺構に切られている。台

石が1基、ピットは9基検出された。遺構から 30 ~ 60cm 大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 2.67m、東西 6.37m、深さ 0.34m を測る。主軸の方向は不明である。

台石が1基検出された (SB07-DS01)。ピットは9基検出された (SB07-Pit01 ~ 09)。各ピットの計測値は図 13 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・敲石が出土した。

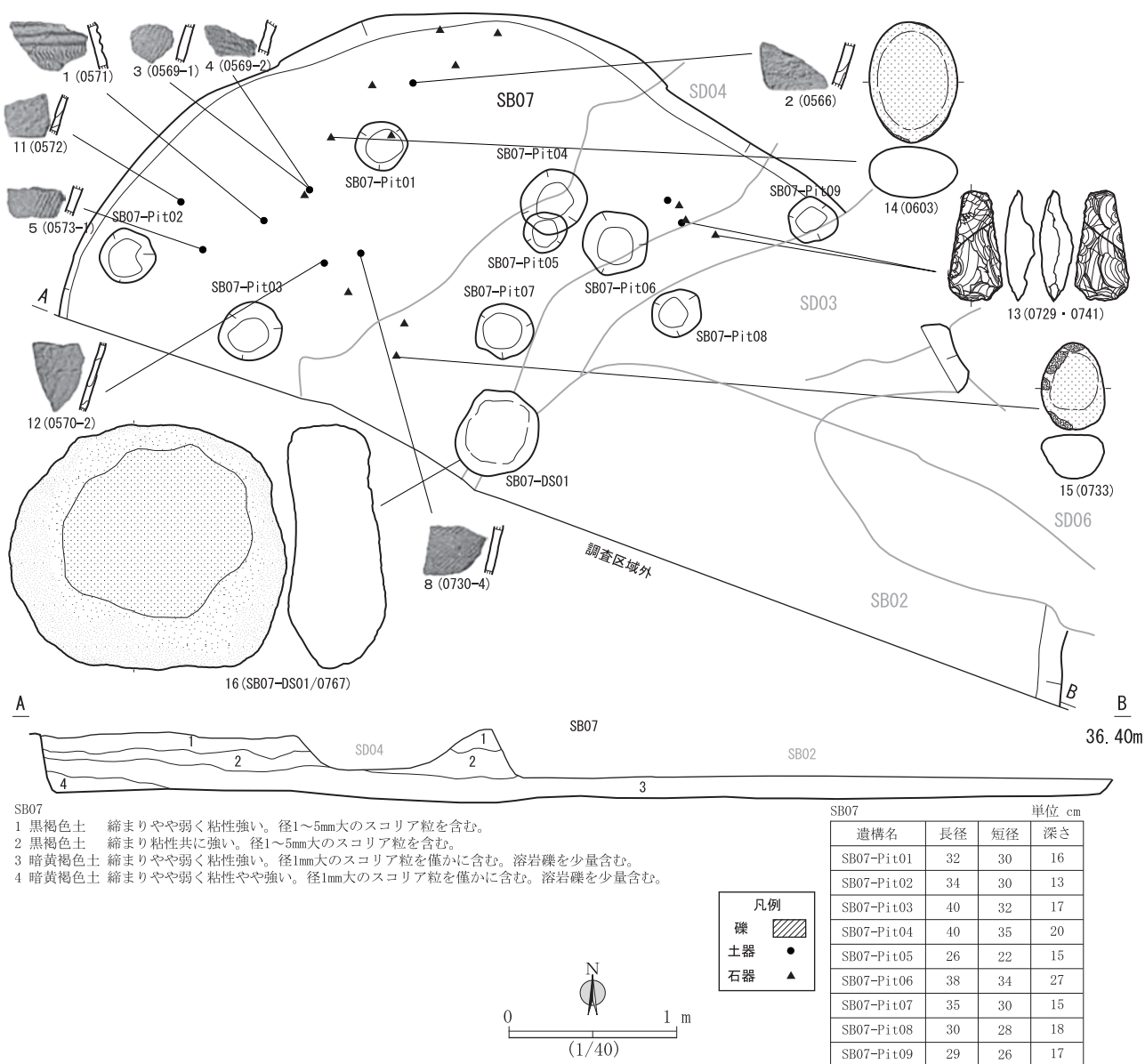


図 13 7号住居跡 実測・遺物出土状況図

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

8号住居跡 (SB08) (図 14)

調査区西側の C4 グリッド、標高 36.45m にて検出された。

遺構の西側で 10 号住居跡、北側で 9 号住居跡に切っている。南側で 5 号住居跡に切られている。直上で 1 号配石遺構、東側で 1・7 号溝状遺構が検出された。現況で遺構に付属する土坑が 1 基、ピットが 4 基検出された。遺構から 30 ～ 60cm 大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は不整形である。規模は現況で最大長 4.86m、最大幅 3.71m、深さ 0.20m を測る。主軸の方向は不明である。

土坑が 1 基検出された (SB08-SK01)。SB08-SK01 は直上で石皿が出土した。ピットは 4 基検出された (SB08-Pit01 ～ 04)。各炉跡・ピットの計測値は図 14 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・敲石、石皿が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

9号住居跡 (SB09) (図 15)

調査区北西よりの C4-C5-D4-D5 グリッド、標高 36.53m にて検出された。

北側は調査区域外に延びている。西側で 10 号住居跡に切っている。中央東西方向を 2 号溝状遺構、南側を 8 号住居跡に切られている。直上で 1 号配石遺構が検出された。現況で遺構に付属するピットが 4 基検出された。遺構から 30 ～ 60cm 大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 3.50m、東西 3.76m、

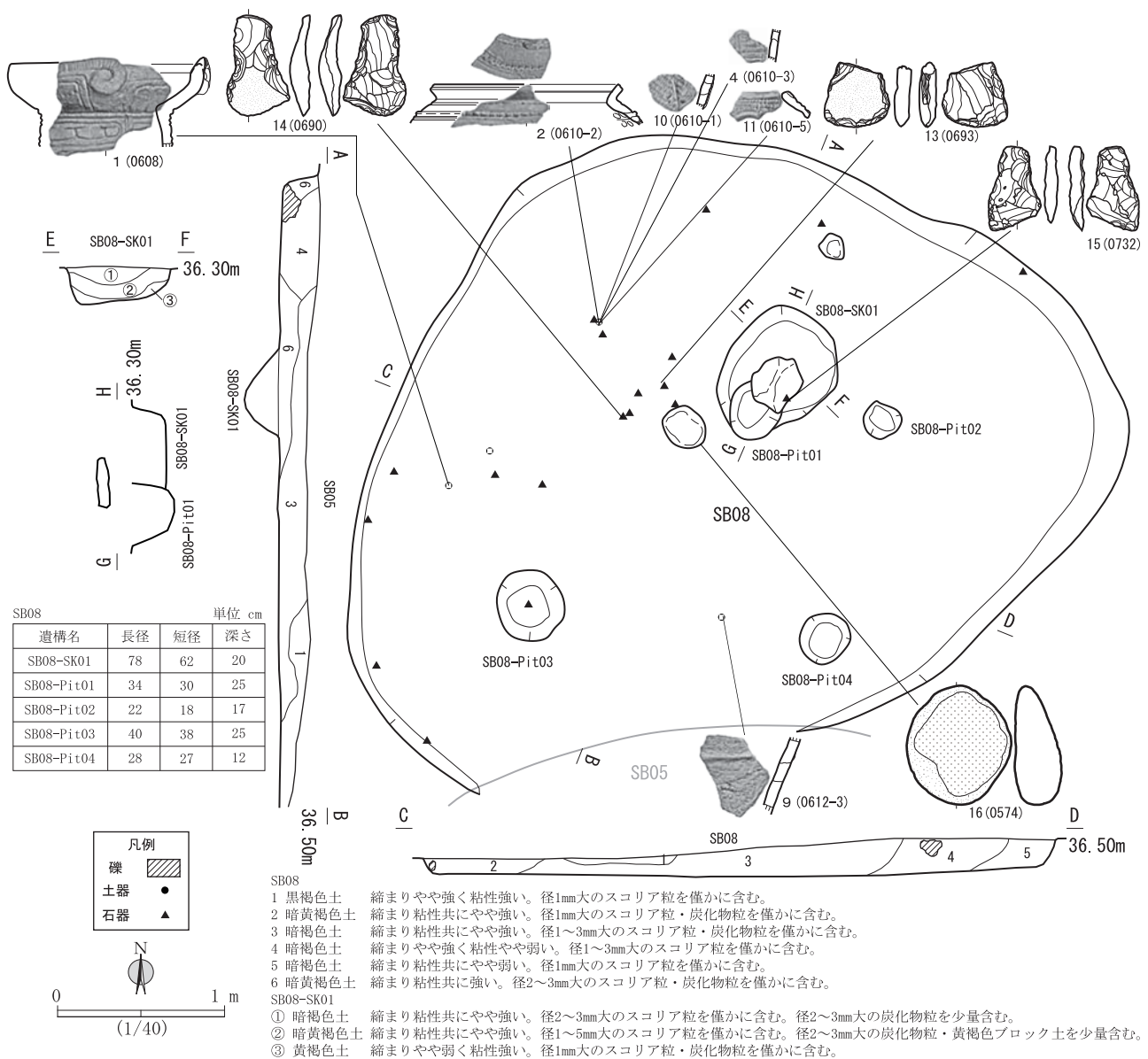


図 14 8号住居跡 実測・遺物出土状況図

深さ 0.06m、主軸の方向は不明である。

ピットは4基検出された (SB09-Pit01 ～ 04)。ピットの計測値は図 15 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、スタンプ形石器、磨・敲石が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

10号住居跡 (SB10) (図 16)

調査区西側の B4-B5-C4-C5 グリッド、標高 36.48m にて検出された。

北側を2号溝状遺構、西側上部を花川戸第4号墳周溝、東側で8・9号住居跡に切られている。現況で遺構に付属するピットが4基検出された。遺構の中央西側で配石状の磔・石器が検出された。遺構から 30 ～ 60cm 大の磔が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた磔と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 5.33m、東西 6.14m、深さ 0.20m、主軸の方向は不明である。

ピットは4基検出された (SB10-Pit01 ～ 04)。各ピットの計測値は図 16 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器はスクレイパー、石筥、打製石斧、磨・敲石、石皿が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

11号住居跡 (SB11) (図 17)

調査区中央東よりの D3-D4-E3-E4 グリッド、標高 36.58m にて検出された。

北側を4号住居跡、南側を3号溝状遺構に切られている。現況で遺構に付属するピットが6基検出された。平面形態は楕円形と

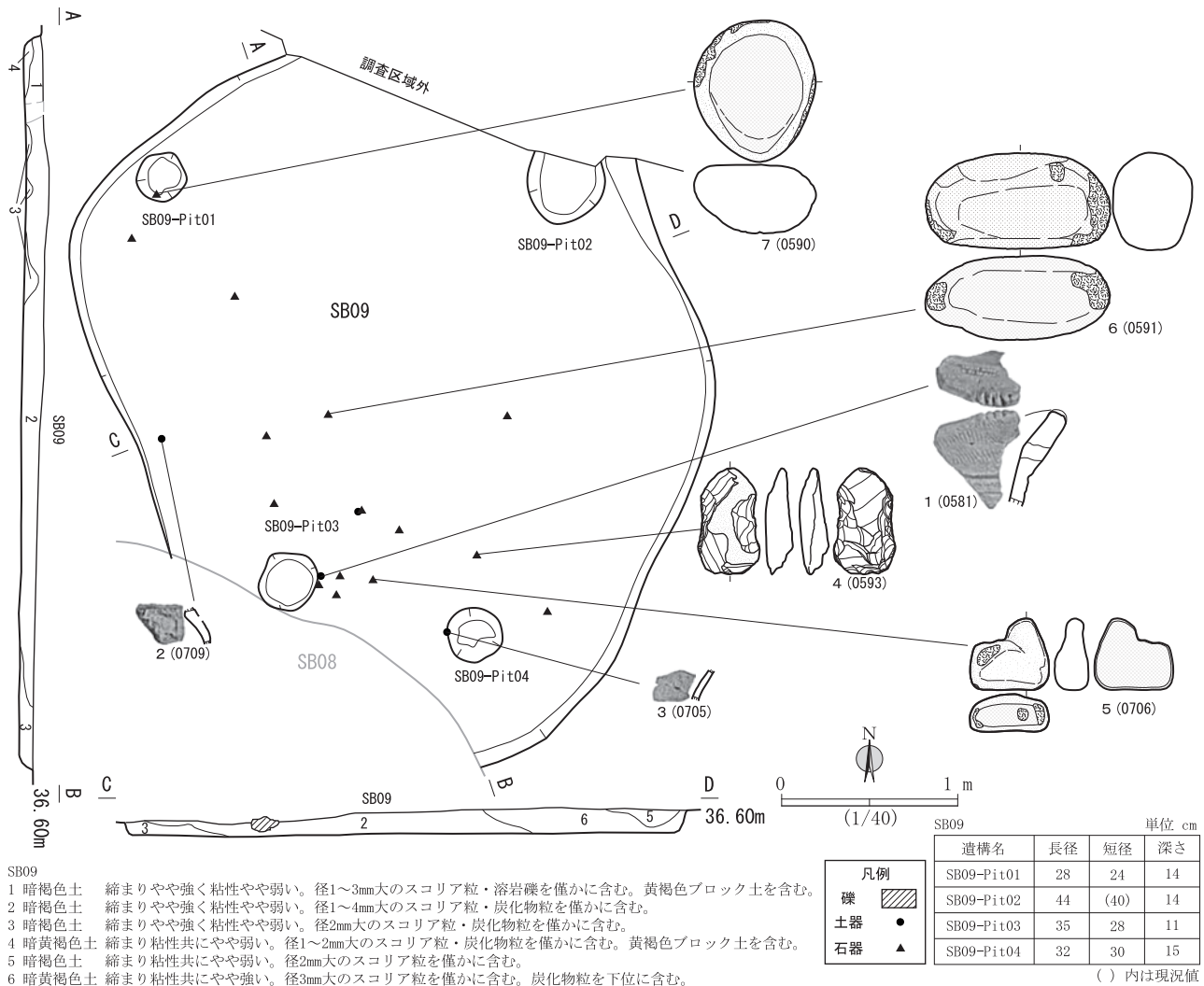


図 15 9号住居跡 実測・遺物出土状況図

推定される。規模は現況で南北 2.30m、東西 3.49m、深さ 0.26m を測る。主軸の方向は不明である。

ピットは6基検出された (SB11-Pit01 ~ 06)。各ピットの計測値は図 17 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

12号住居跡 (SB12) (図 18)

調査区北東の F3-F4 グリッド、標高 36.60m にて検出された。

遺構の南西側は試掘トレンチに削平されている。北西側を3号住居跡に切られている。現況で遺構に付属するピットが1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南西 - 北東 2.76m、北西 - 南東 1.60m、深さ 0.22m を測る。主軸の方向は不明である。

ピットは1基検出された (SB12-Pit01)。ピットの計測値は図 18 に示した。

遺物は縄文時代の石皿が出土した。

時期は切合や覆土から判断して縄文時代前期後半である。

13号住居跡 (SB13) (図 19)

調査区南東の D2-E2 グリッド、標高 36.58m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。西側を1号住居跡・6号溝状遺構に切られている。東側で9号溝状遺構が検出された。直上で3号集石遺構が検出された。平面形態は不明である。規模は現況で南北 3.90m、東西 3.21m、深さ 0.32m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代の石鏃、磨・敲石が出土した。

時期は検出面や覆土から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

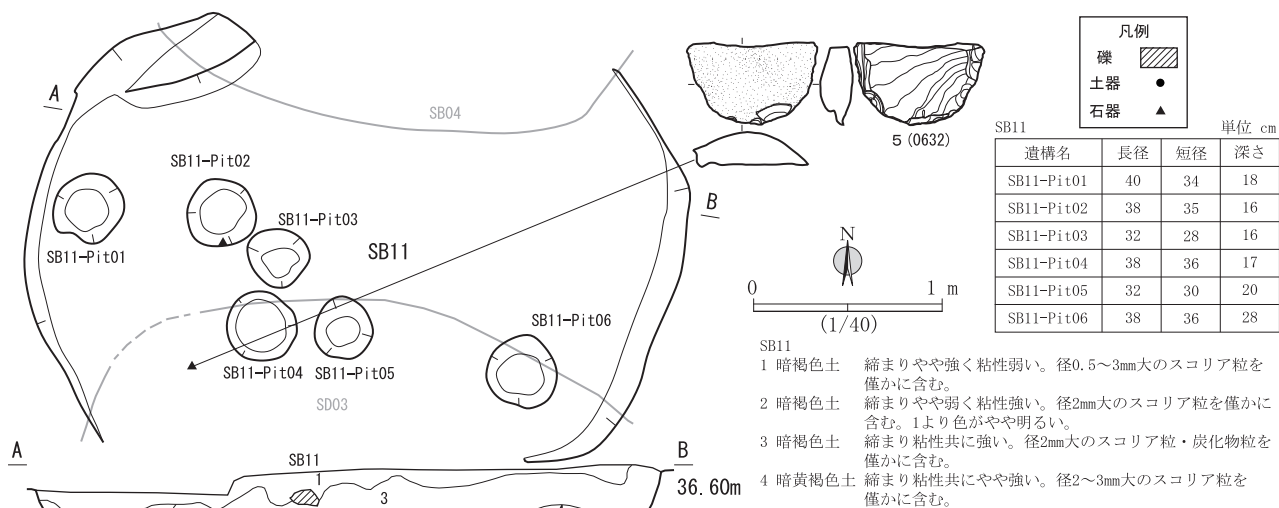


図 17 11号住居跡 実測・遺物出土状況図

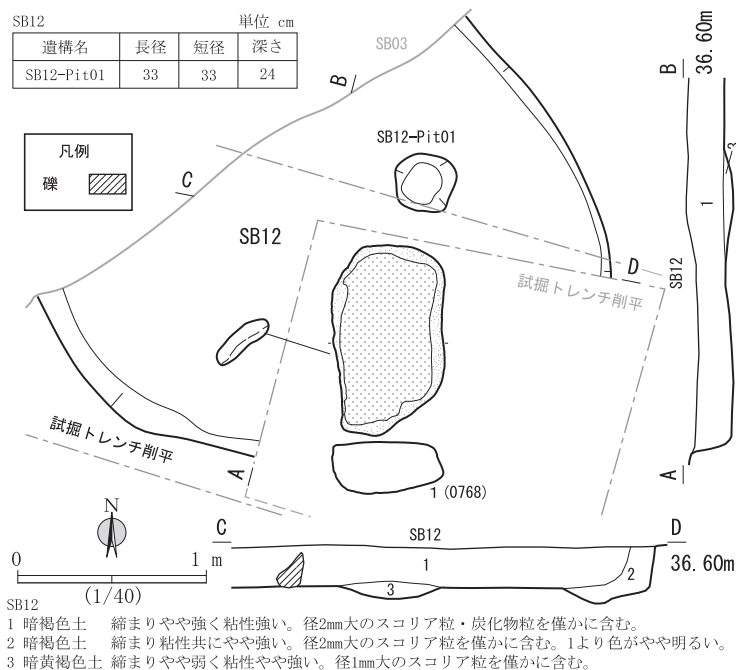


図 18 12号住居跡 実測・遺物出土状況図

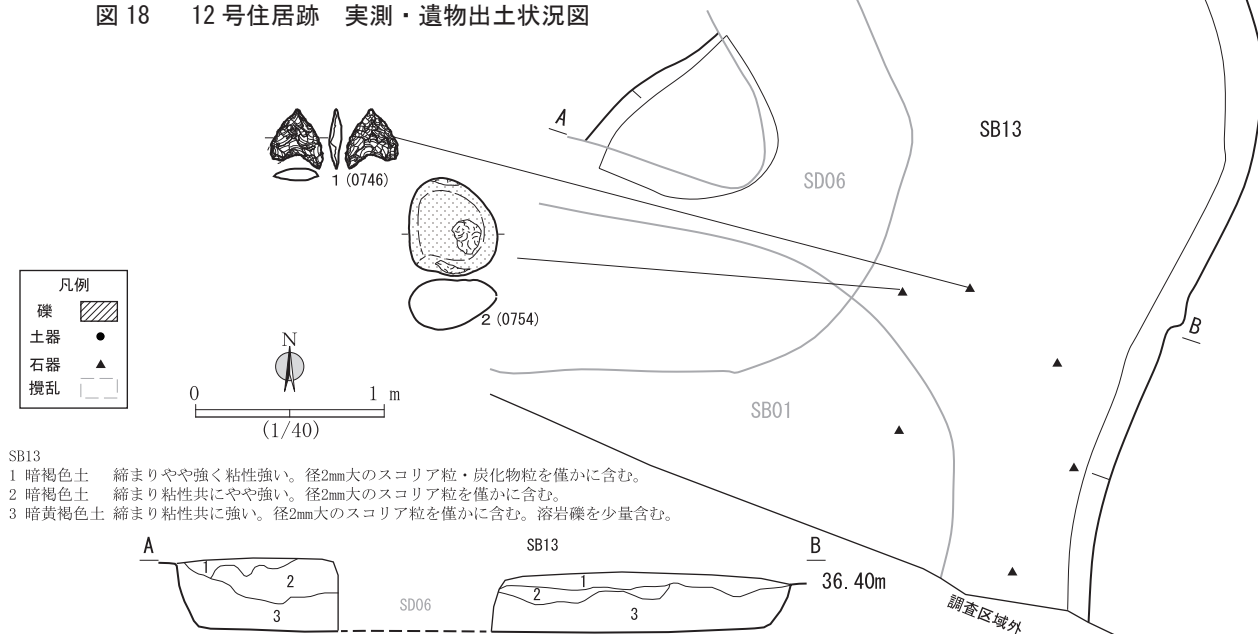


図 19 13号住居跡 実測・遺物出土状況図

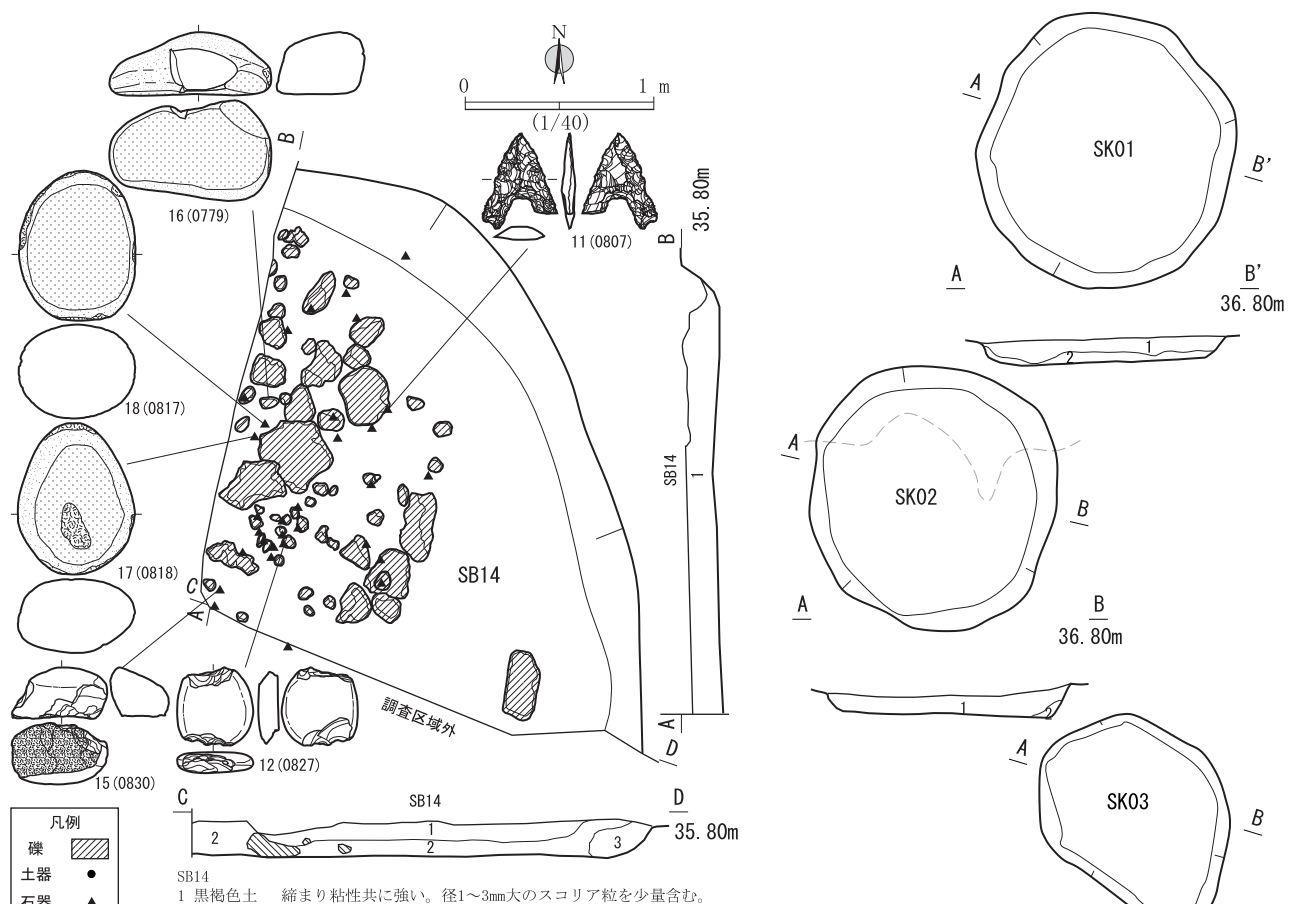


図 20 14号住居跡 実測・遺物出土状況図

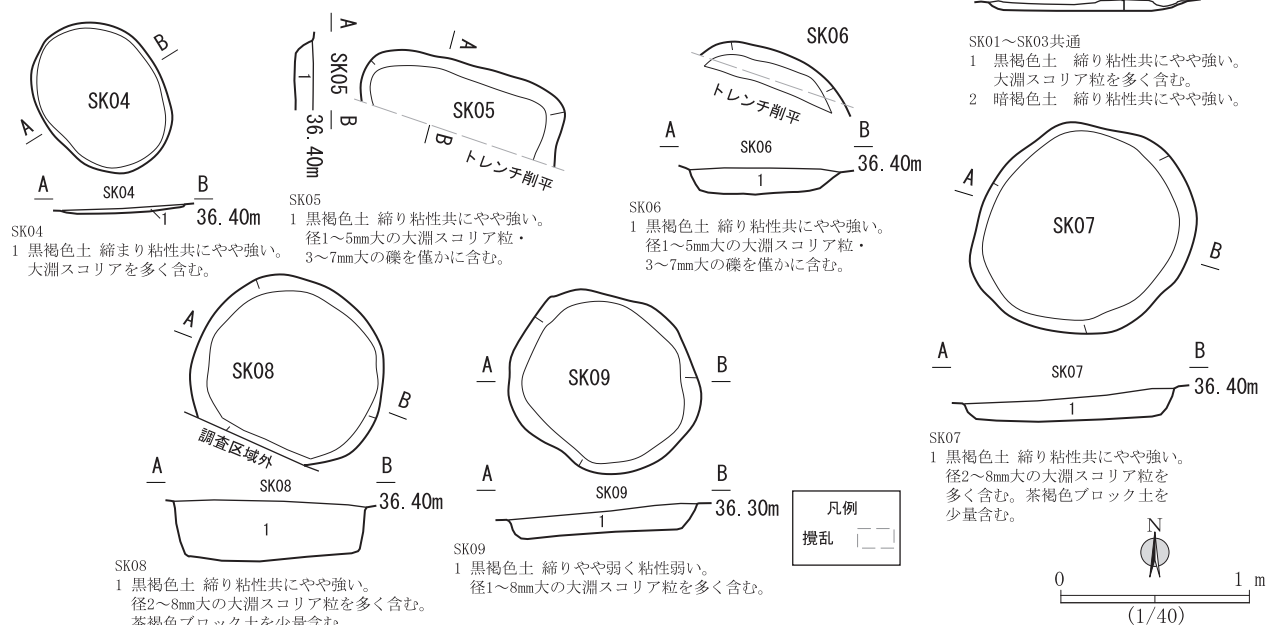


図 21 土坑 実測図

時期は覆土から判断して中世以降である。

3号土坑 (SK03) (図 21)

調査区中央東よりの D3-D4-E3-E4 グリッド、標高 36.60m にて検出された。

直下で 11 号住居跡、西側で 1 号土坑、南西側で 2 号土坑が検出された。平面形態は不整形で、規模は最大長 1.21m、最大幅 0.94m、深さ 0.05m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文土器の小破片が出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

4号土坑（SK04）（図 21）

調査区中央南西よりの C3 グリッド、標高 36.38m にて検出された。

直下で5号住居跡、南東側で5号土坑が検出された。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.84m、短軸 0.65m、深さ 0.04m を測る。主軸の方向は N-37°-W を指向する。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

5号土坑（SK05）（図 21）

調査区中央南よりの C3 グリッド、標高 36.31m にて検出された。

直下で7号住居跡、西側で6号土坑が検出された。遺構の南側は試掘トレンチにより削平されていた。平面形態は不明、規模は現況で最大長 1.09m、最大幅 0.38m、深さ 0.09m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

6号土坑（SK06）（図 21）

調査区南西の B3 グリッド、標高 36.28m にて検出された。

東側で5号土坑が検出された。遺構の南側は試掘トレンチにより削平されていた。平面形態は不明、規模は現況で最大長 0.85m、最大幅 0.19m、深さ 0.14m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

7号土坑（SK07）（図 21）

調査区中央南やや東よりの D2 グリッド、標高 36.31m にて検出された。

北側で2号土坑、南東で8号土坑が検出された。平面形態はほぼ円形で、規模は最大長 1.22m、最大幅 1.05m、深さ 0.15m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

8号土坑（SK08）（図 21）

調査区南東側の D2-E2 グリッド、標高 36.28m にて検出された。

遺構の南端は調査区域外に延びている。直下で1号住居跡が検出された。

平面形態はほぼ円形で、規模は現況で最大長 1.05m、最大幅 1.03m、深さ 0.32m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文土器の小破片、黒曜石の剥片などが出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

9号土坑（SK09）（図 21）

調査区西の B4 グリッド、標高 36.23m にて検出された。

遺構の直下で花川戸第4号墳周溝が検出された。平面形態は円形に近い不整形で、規模は最大長 1.01m、最大幅 0.92m、深さ 0.14m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

10号土坑（SK10）（図 32）

調査区中央北よりの D4 グリッド、標高 36.41m にて検出された。

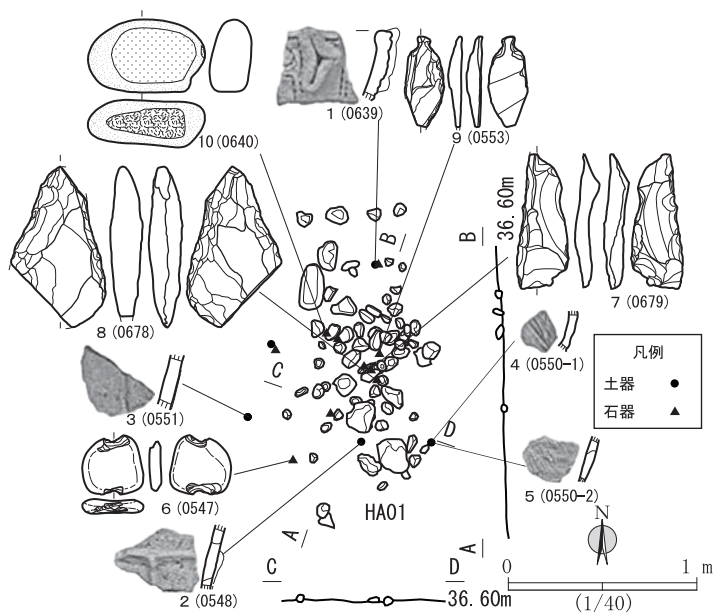


図 22 1号配石遺構 実測・遺物出土状況図

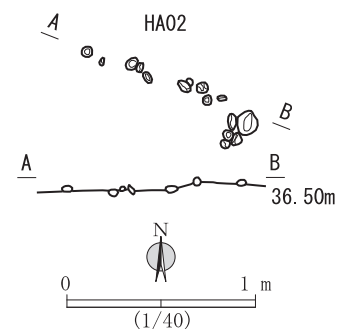


図 23 2号配石遺構 実測図

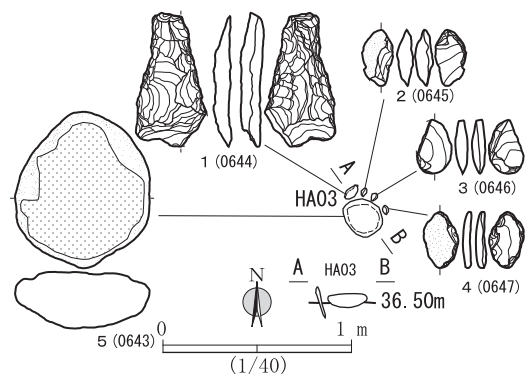


図 24 3号配石遺構 実測・遺物出土状況図

北側で7号溝状遺構を切っている。東側で4号住居跡に切られている。平面形態は円形と推定される。規模は現況で最大長 0.62m、最大幅 0.50m、深さ 0.22m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は切合や覆土から判断して縄文時代中期初頭である。

配石遺構

1号配石遺構（HA01）（図 22）

調査区中央北よりの C4 グリッド、標高 35.54m にて検出された。

直下で8・9号住居跡が検出された。北西側で2・3号配石遺構が検出された。平面形態は不整形な広がりを見せ、規模は長軸 1.66m、短軸 0.90m、主軸の方向は N-16°-W を測る。65 個の石で構成される。溶岩礫と丸みのある自然礫、石器などで構成される。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

2号配石遺構（HA02）（図 23）

調査区北西の C4-C5 グリッド、標高 36.47m にて検出された。

直上で2号溝状遺構、直下で9・10号住居跡、南側で8号住居跡、北東側で3号配石遺構、南東側で1号配石遺構が検出された。平面形態は直線的な広がりを見せ、規模は長軸 1.02m、短軸 0.26m、主軸の方向は N-69°-W を測る。15 個の石で構成される。主に丸みのある自然礫から構成されている。石器や土器が混在する。

遺物は縄文時代の土器小破片、石器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代である。

3号配石遺構（HA03）（図 23）

調査区北西の C4-C5 グリッド、標高 36.45m にて検出された。

直上で2号溝状遺構、直下で10号住居跡、南側で8号住居跡、南東側で1号配石遺構、南西で2号配石遺構が検出された。規模は長軸 0.28m、短軸 0.21m、主軸の方向は N-36°-W を測る。5 個の石器で構成される。石皿 (0643) を囲むように北～北東側にスクレイパー・石斧を計4個配置している。

遺物は石皿、打製石斧、スクレイパーが出土した。

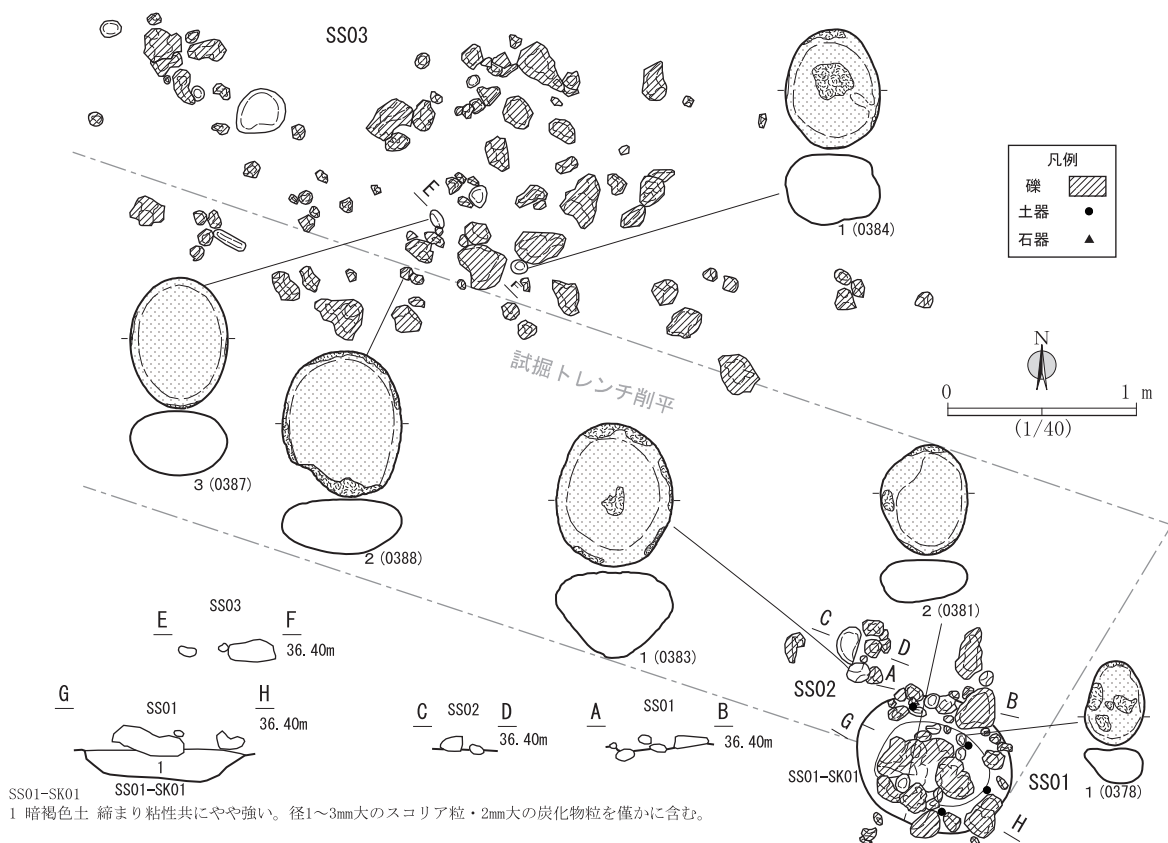


図 25 1・2・3号集石遺構 実測・遺物出土状況図

時期は出土した石器から判断して縄文時代である。

集石遺構

1号集石遺構 (SS01) (図 24)

調査区南東隅の E2-F2 グリッド、標高 36.20m にて検出された。

西側で 13 号住居跡、北西側で 2・3 号集石遺構が検出された。集石の下から土坑が検出された (SS01-SK01)。規模は集石部分で最大長 1.25m、最大幅 0.81m、土坑で最大長 0.85m、最大幅 0.69m、深さ 0.17m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器は磨・敲石が出土した。

時期は出土した層位や土器から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

2号集石遺構 (SS02) (図 24)

調査区南東隅の E2 グリッド、標高 36.16m にて検出された。

西側で 13 号住居跡、北西側で 3 号集石遺構、南東側で 1 号集石遺構が検出された。規模は最大長 0.34m、最大幅 0.29m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代の磨・敲石が出土した。

時期は出土した層位や遺物から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

3号集石遺構 (SS03) (図 24)

調査区南東隅の E2 グリッド、標高 36.30m にて検出された。

直下で 13 号住居跡、北西下で 6 号溝状遺構、南東で 9 号溝状遺構、1・2 号集石遺構、南西で 1 号住居跡が検出された。規模は集石部分で最大長 4.66m、最大幅 1.84m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代の磨・敲石、凹石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

溝状遺構

1号溝状遺構 (SD01) (図 26)

調査区中央の C2-C3-D2-D3-D4 グリッド、標高 36.48 ～ 36.55m にて検出された。

遺構は南下し、南側は調査区域外に延びている。検出部分の中央付近は攪乱を受けている。直下で 2 号住居跡を切っている。規模は現況で最大長 9.37m、幅 0.82 ～ 2.41m、深さ 0.28m を測る。主軸の方向は N-8°-E を指向する。

遺物は縄文土器の小破片が出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

2号溝状遺構 (SD02) (図 27)

調査区北西の B5-C4-C5-D5 グリッド、標高 36.47 ～ 36.60m にて検出された。

遺構は東から西へ向かって標高を下げている。遺構の西側は調査区域外に延びている。検出部分の中央付近は攪乱を受けている。遺構の中央西よりで花川戸第 4 号墳周溝 (SZ04-SD01) を切っている。規模は現況で最大長 8.91m、幅 0.49 ～ 1.42m、深さ 0.09m を測る。主軸の方向は N-84°-W を指向する。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、縄文時代の石器

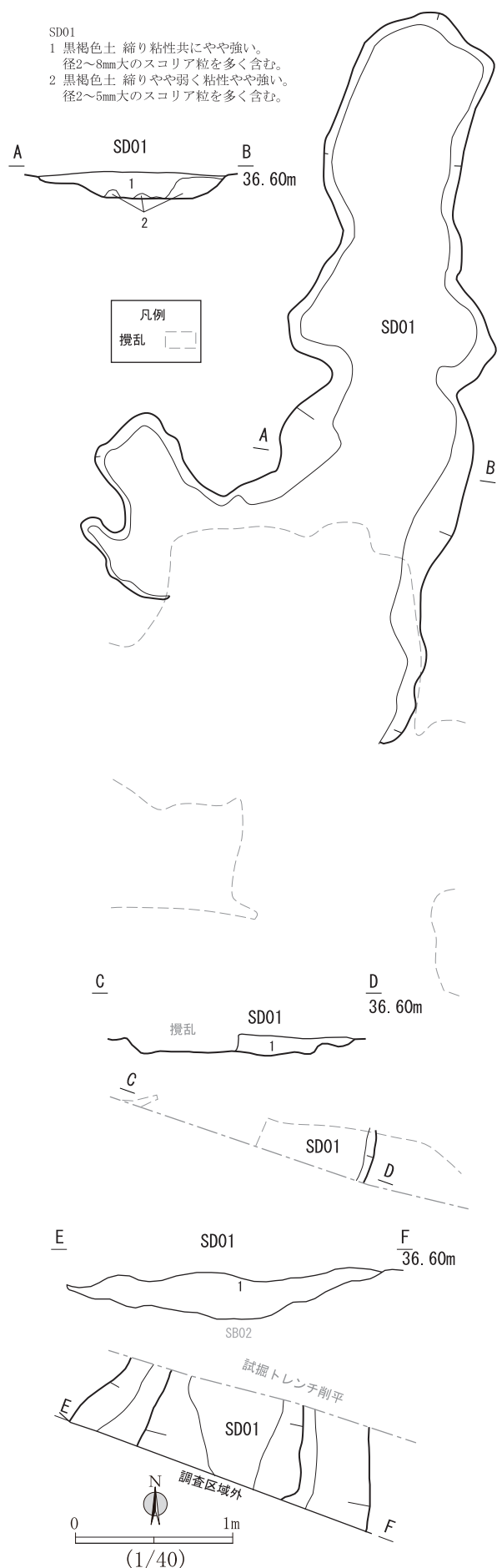


図 26 1号溝状遺構 実測図

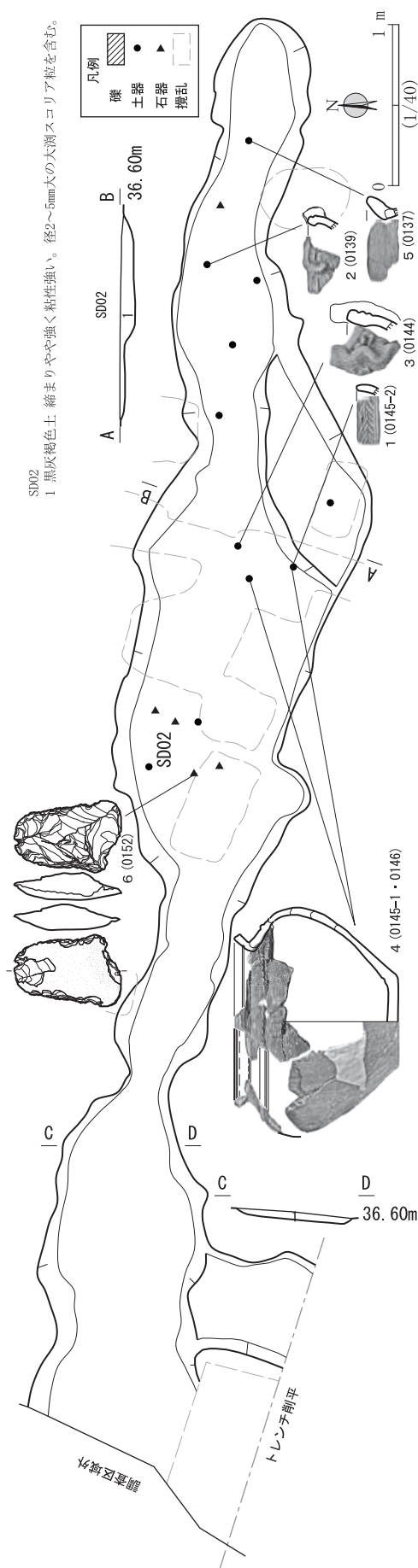


図 27 2号溝状遺構 実測・遺物出土状況図

が出土した。

時期は縄文土器が出土しているが、覆土や切合から判断して中世以降である。

3号溝状遺構 (SD03) (図 28)

調査区南東の D3-E3 グリッド、標高 36.36 ～ 36.50m にて検出された。

遺構は楕円を描くように一周し、南側で6号溝状遺構を切っている。遺構全体としては北側が浅く南側は深い。南東側で南西側で5号溝状遺構、南側で2号住居跡、北側で 11 号住居跡を切っている。検出部分の中央付近は浅い攪乱を受けており、北東側は深い攪乱を受けている。規模は現況で南北5.18m、東西7.67m、幅 0.90 ～ 2.49m、深さ 0.27 ～ 0.69m を測る。主軸の方向不明である。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・敲・凹石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

4号溝状遺構 (SD04) (図 29)

調査区中央南端の C2-C3-D3 グリッド、標高 36.23 ～ 36.29m にて検出された。

遺構は北から正南北に南下し、途中で南西方向に向きを変える。南西側で7号住居跡を切っている。正南北から南西方向へ向きを変える部分で攪乱を受けている。規模は現況で最大長 4.80m、幅 0.51 ～ 1.18m、深さ 0.11 ～ 0.21m を測る。主軸の方向は正南北～N-47°-Eを指向する。

遺物は縄文時代中期初頭の小型深鉢、石器は打製石斧が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

5号溝状遺構 (SD05) (図 30)

調査区中央南東よりの D3 グリッド、標高 36.49m にて検出された。

遺構の直上で3号溝状遺構に切られている。遺構からは 40 ～ 60 cm 大の礫が数点検出された。規模は現況で最大長 2.75m、幅 1.11m、深さ 0.72m を測る。主軸の方向は N-14°-E を指向する。

遺物は縄文時代の打製石斧が出土した。

時期は検出面や切合から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

6号溝状遺構 (SD06) (図 31)

調査区南東の D2-D3-E2-E3 グリッド、標高 36.36 ～ 36.50m にて検出された。

遺構は楕円を描いて一周するかのように湾曲し、北側で3号溝状遺構を切っている。南側で1・2号住居跡に切られている。東側で 13 号住居跡、西側で7号住居跡を切っている。底部の標高は北側が高く南側は低い。規模は現況で南北 3.88m、東西 4.93m、幅 0.73 ～ 1.41m、深さ 0.68m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は石匙、磨・敲石、凹石が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

7号溝状遺構 (SD07) (図 32)

調査区中央の C4-D4-E4 グリッド、標高 36.45m にて検出された。

遺構は東から西へ流れており、向きを変えて南西方向に下る。東よりで4号住居跡、南側を 10 号土坑、南西で5号住居跡に切られている。規模は現況で最大長 7.48m、幅 0.60 ～ 1.56m、深さ 0.21m を測る。主軸の方向は東西方向部分で N-71°-W、南西方向部分で N-52°-E を指向する。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は磨・敲石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代前期後半である。

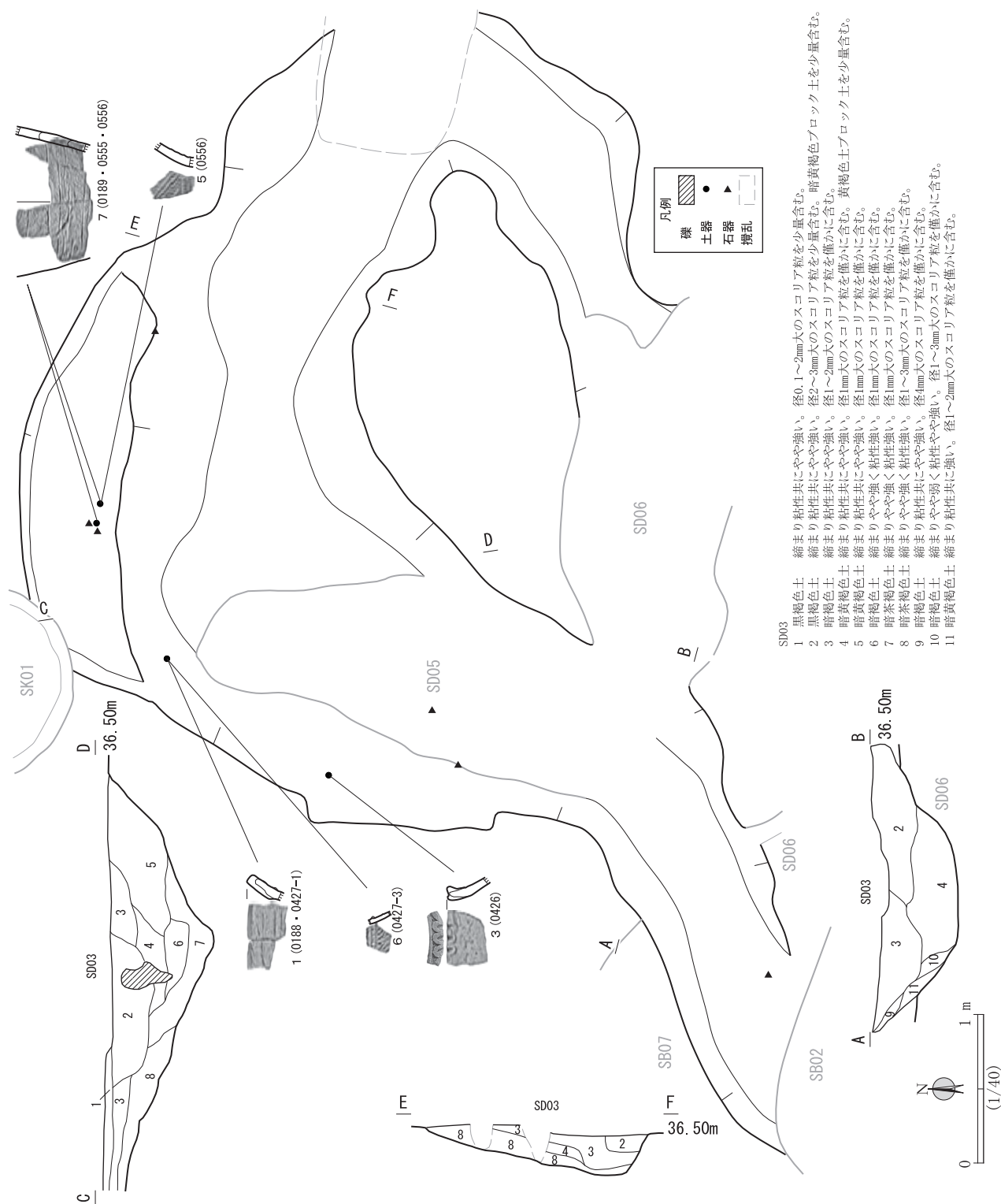


図 28 3号溝状遺構 実測・遺物出土状況図

8号溝状遺構 (SD08) (図 33)

調査区北西端の B5-C5 グリッド、標高 36.54m にて検出された。

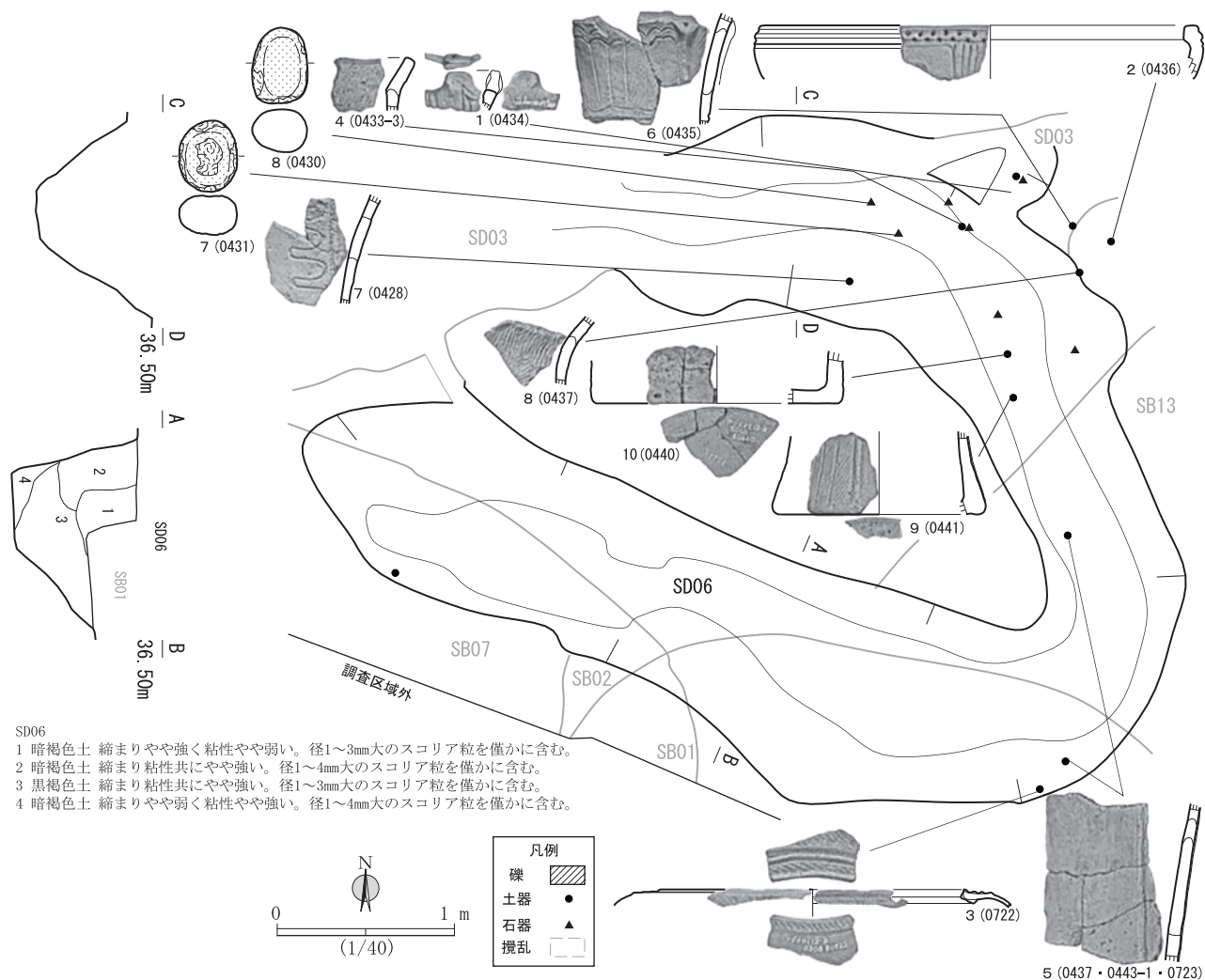
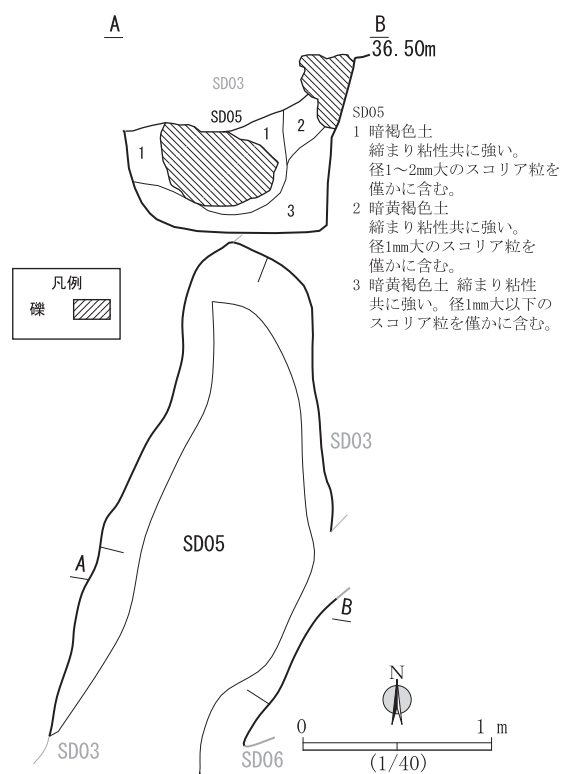
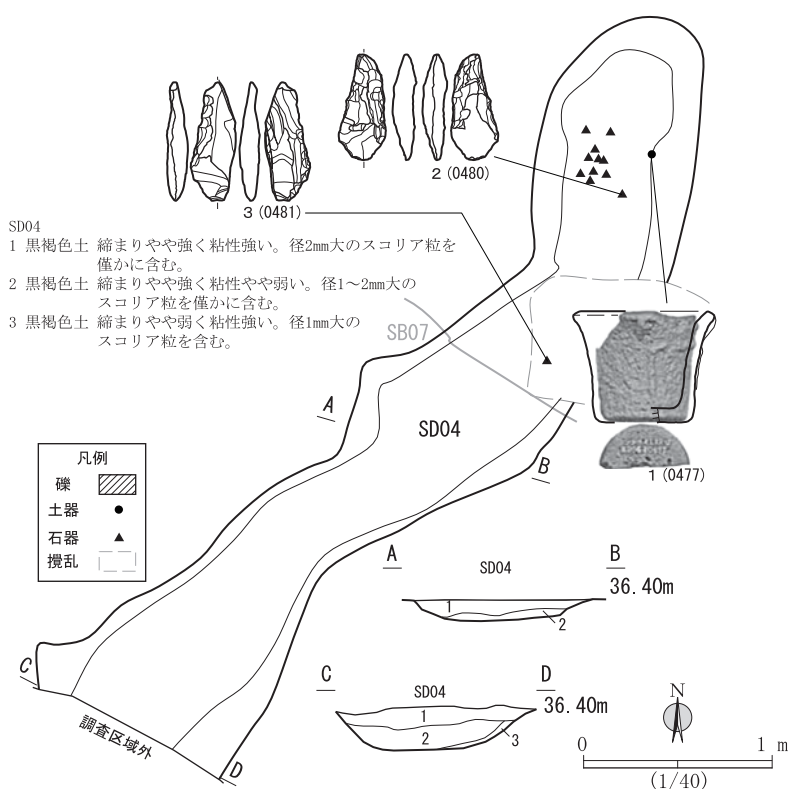
遺構の西側は調査区域外に延びている。東端は西側より深くなっている。北東側上部は近現代の建物跡による攪乱を受け、東側上部は花川戸第4号墳周溝に切られている。規模は現況で最大長 7.48m、幅 0.60 ～ 1.56m、深さ 0.21m を測る。主軸の方向は N-54° -W を指向する。

遺物は縄文時代の土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代である。

9号溝状遺構 (SD09) (図 34)

調査区南東の E2 グリッド、標高 36.54m にて検出された。



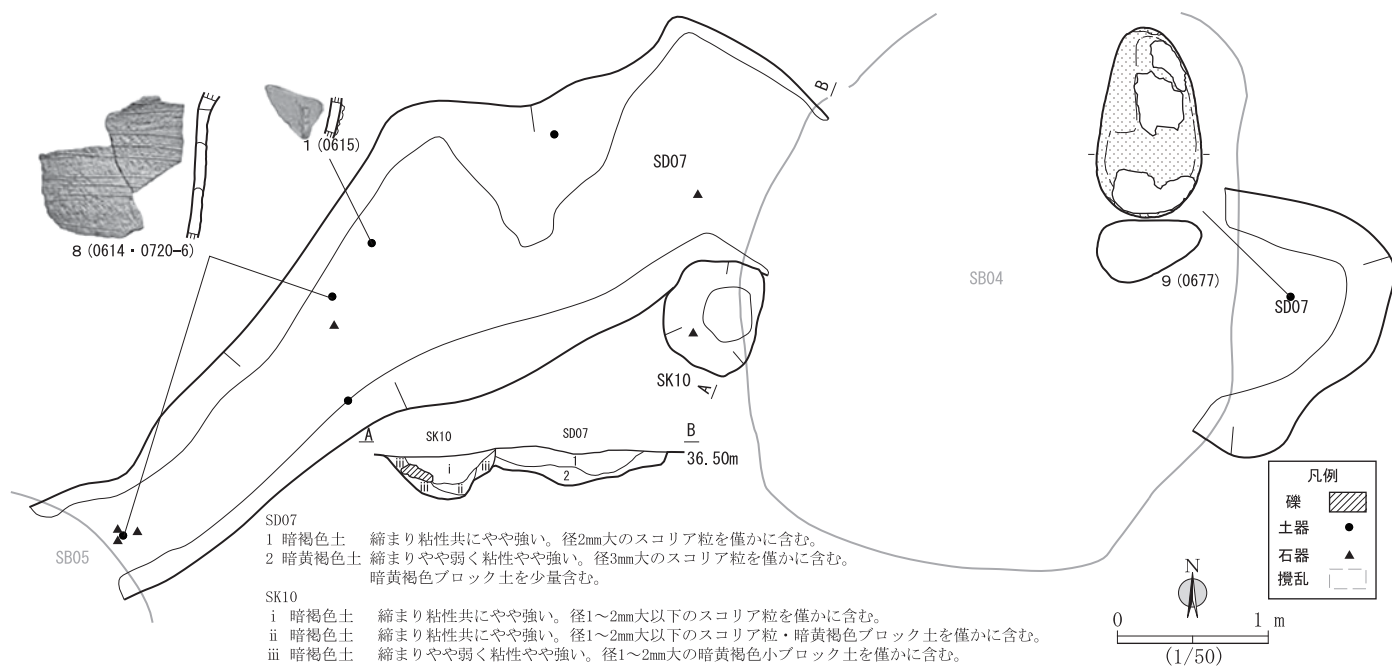
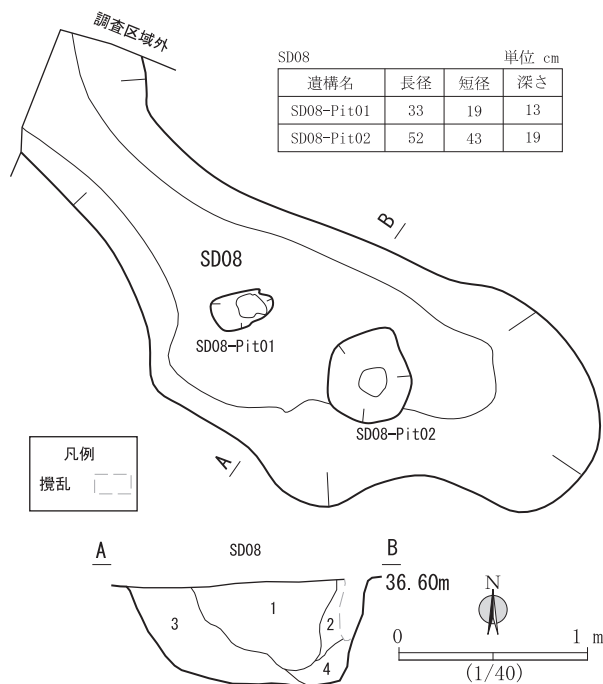
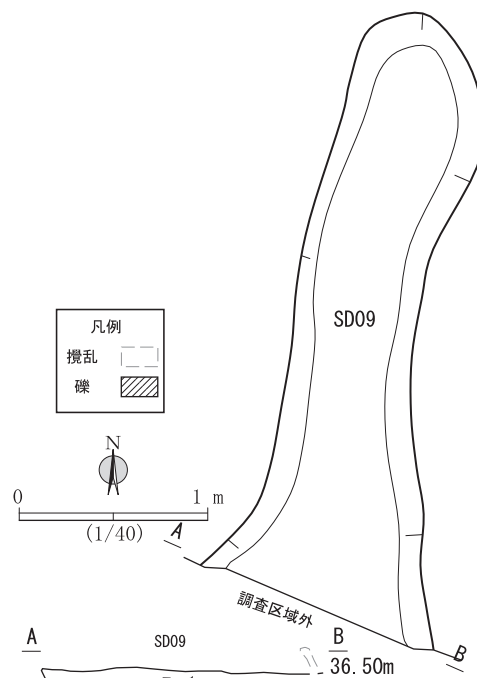


図 32 7号溝状遺構・10号土坑 実測・遺物出土状況図



SD08
1 黒褐色土 締りやや強く粘性強い。径1～3mm大のスコリア粒を少量含む。
2 黒灰褐色土 締り粘性共にやや強い。径1～4mm大のスコリア粒を少量含む。
3 黒灰褐色土 締りやや強く粘性やや弱い。径1～4mm大のスコリア粒を少量含む。

図 33 8号溝状遺構 実測図



SD09
1 暗褐色土 締まり粘性共にやや強い。径1～3mm大のスコリア粒を僅かに含む。
2 暗褐色土 締まりやや弱く粘性やや強い。径1～5mm大のスコリア粒・黄褐色ブロック土を僅かに含む。

図 34 9号溝状遺構 実測図

遺構の南側は調査区域外に延びている。流れは緩やかに南下する。遺構北側の直上で3号集石遺構、東側で13号住居跡、西側で1・2号集石遺構が検出された。規模は現況で最大長 3.16m、幅 0.65 ～ 1.27m、深さ 0.22m を測る。主軸の方向は N-11°-W を指向する。

遺物は縄文時代の土器・石器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代である。

遺構名	時代	標高 m	グリッド	平面形態	長径 cm	短径 cm	深さ cm
Pit01	古墳時代以降	36.26	B3	不整形	42	41	7
Pit02	古墳時代以降	36.28	B3	楕円形	44	30	10
Pit03	古墳時代以降	36.26	B3	楕円形	59	53	6
Pit04	古墳時代以降	36.27	C3	不明	29	(19)	4
Pit05	古墳時代以降	36.52	C5	楕円形	41	36	28
Pit06	古墳時代以降	36.37	A3	楕円形	38	35	20
Pit07	古墳時代以降	36.59	C4	不整形	50	42	18
JPit01	縄文時代	36.41	D4	不整形	32	32	19
JPit02	縄文時代	36.47	D4	楕円形	31	29	20
JPit03	縄文時代	36.43	C4	楕円形	36	34	24
JPit04	縄文時代	36.38	C4	不整形	38	35	37
JPit05	縄文時代	36.40	C4-C5	不整形	39	39	15
JPit06	縄文時代	36.41	C4	不整形	36	35	20
JPit07	縄文時代	36.32	C4	不整形	42	39	24

遺構名	時代	標高 m	グリッド	平面形態	長径 cm	短径 cm	深さ cm
JPit08	縄文時代	36.36	C4	不整形	61	52	34
JPit09	縄文時代	36.21	C3	不整形	43	36	27
JPit10	縄文時代	36.20	C3	不整形	42	41	27
JPit11	縄文時代	36.21	C3	不整形	30	28	27
JPit12	縄文時代	36.46	D4	円形	31	29	24
JPit13	縄文時代	36.51	A3	不明	36	24	32
JPit14	縄文時代	36.05	B3-B4	不整形	53	45	30
JPit15	縄文時代	36.05	B3	不整形	43	41	24
JPit16	縄文時代	36.08	B3	不整形	41	37	21
JPit17	縄文時代	36.20	B4-C4	円形	54	52	11
JPit18	縄文時代	36.22	B4-C4	楕円形	52	47	35
JPit19	縄文時代	36.25	B4	不整形	34	32	30
JPit20	縄文時代	36.26	B4	不整形	36	35	24
JPit21	縄文時代	36.25	B4	楕円形	54	50	33

() は現況値

表 3 ピット一覧表

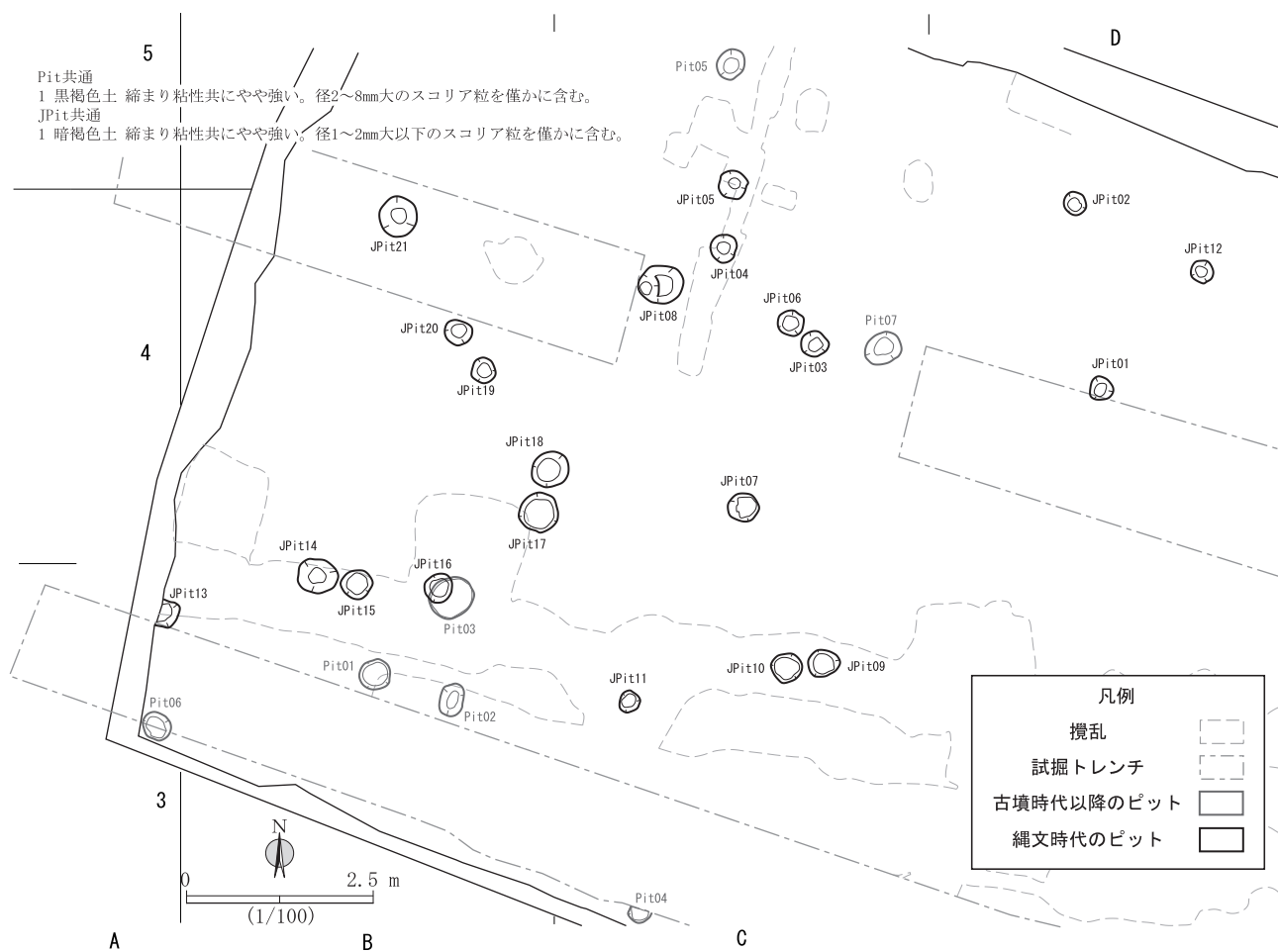


図 35 ピット配置図

ピット (図 35、表 3)

遺構に付属しないピットは古墳時代以降のピット7基 (Pit01 ~ 07) と縄文時代のピット 21 基 (JPit01 ~ 21) が検出された。これらは覆土で区別した。いずれも調査区西側で多く検出されている。各ピットの詳細・計測値は表 3 に示した。

(小金澤 彩可)

2 遺物

今回の調査では主に縄文時代前期後半～後期初頭の縄文土器が出土した。諸磯式土器、五領ヶ台式土器を中心に、外来系土器が混在する。また包含層から縄文時代早期の絡状体圧痕文土器の破片が出土し、図示した。石器は打製石斧、磨・敲石、凹石、石皿が多く出土し、石鏃や石匙、石錘は出土したが量は少ない。

以下、遺構別に記述していく。

住居跡

1号住居跡（図 36）

土器は2点の無文土器を図示した。1(0370)は胴部、2(0337)は底面に網代痕のある小型深鉢の底部である。

石器は3点を図示した。3(0372)は安山岩製の磨・敲・凹石、4(0374)は安山岩製の磨・敲石、5(0375)は磨・敲石で表面と底面に磨痕、側面に敲痕がみられる。

2号住居跡（図 37）

土器は2点を図示した。1(0341)は波状口縁部で、口唇部と外面口縁部に竹管状工具による横位の沈線を施す。2(0343)は表面に縄文を施す。

石器は4点を図示した。3(0345)はホルンフェルス製のスクレイパー、5(0446)は安山岩製の磨・敲石、6(SB02-DS02/0448)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

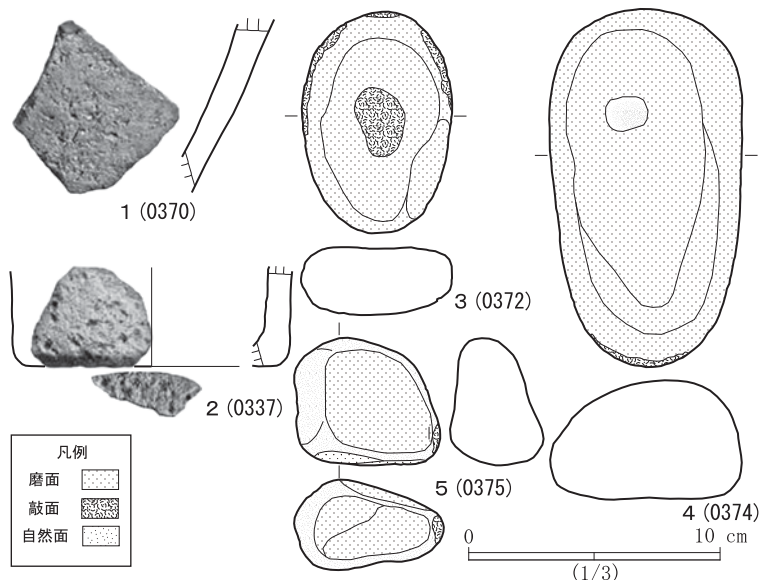


図 36 1号住居跡 出土遺物拓影・実測図

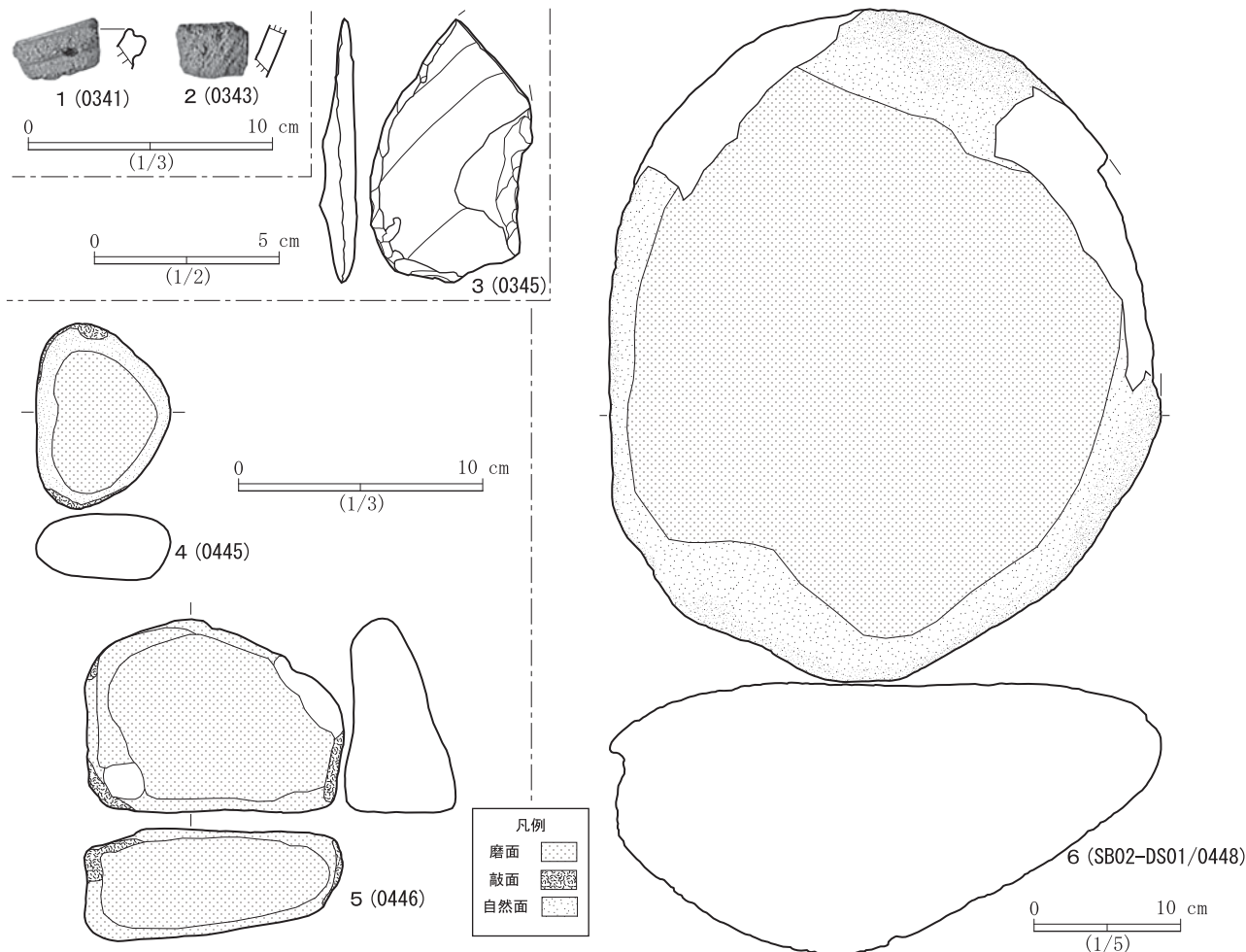


図 37 2号住居跡 出土遺物拓影・実測図

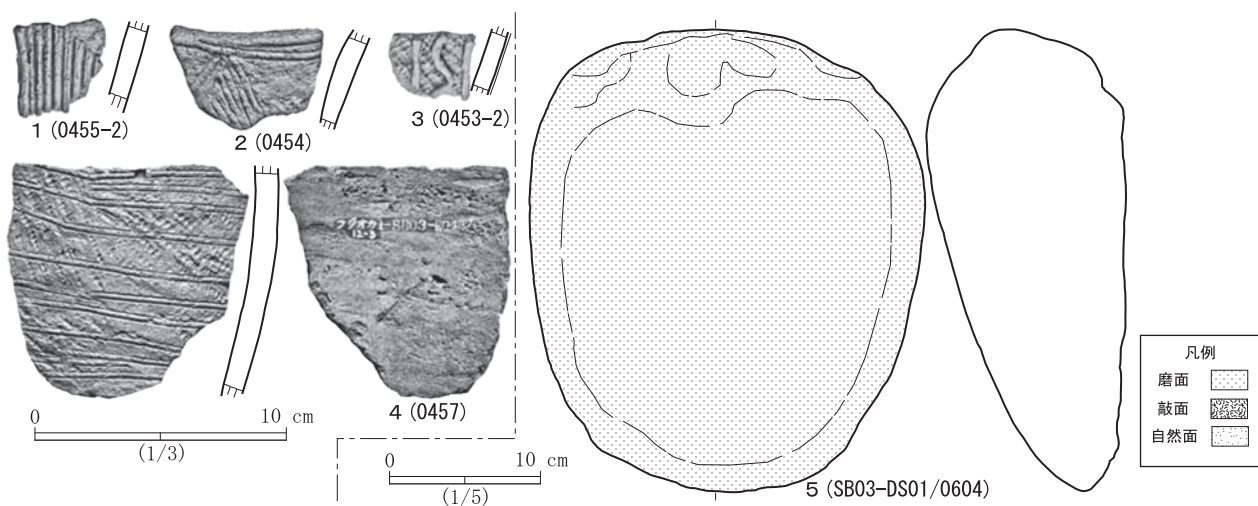


图 38 3号住居跡 出土遺物拓影・実測図

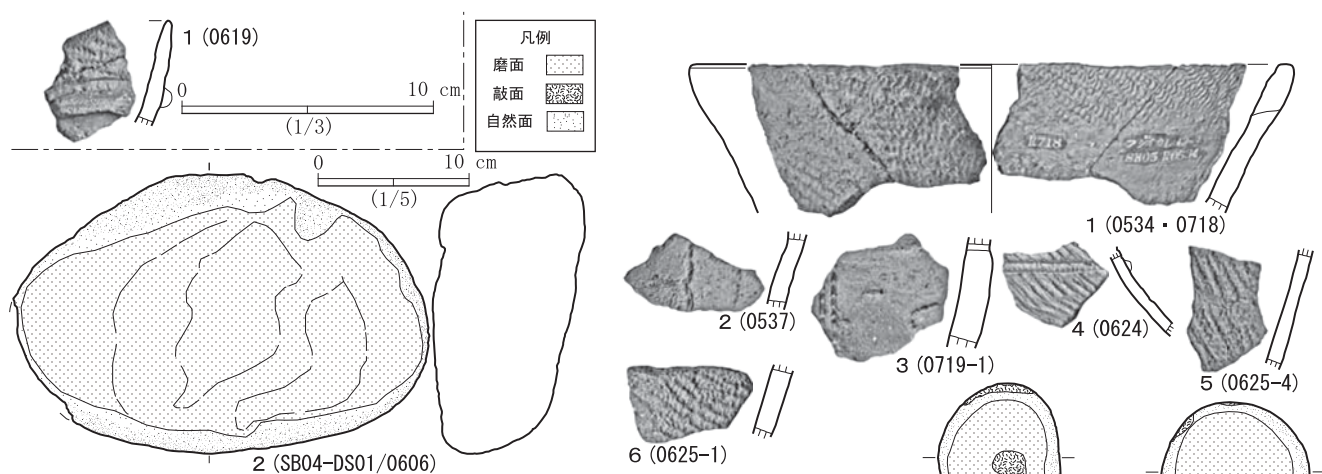


图 39 4号住居跡 出土遺物拓影・実測図

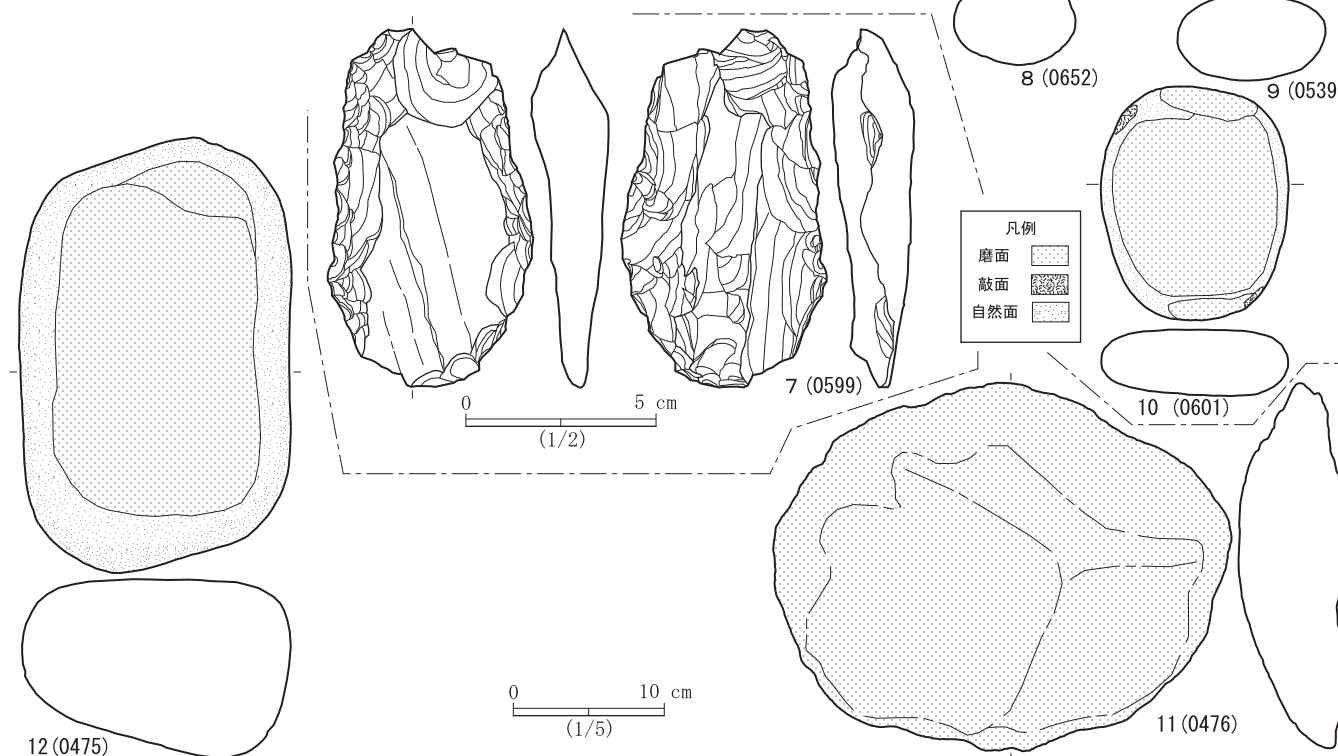


图 40 5号住居跡 出土遺物拓影・実測図

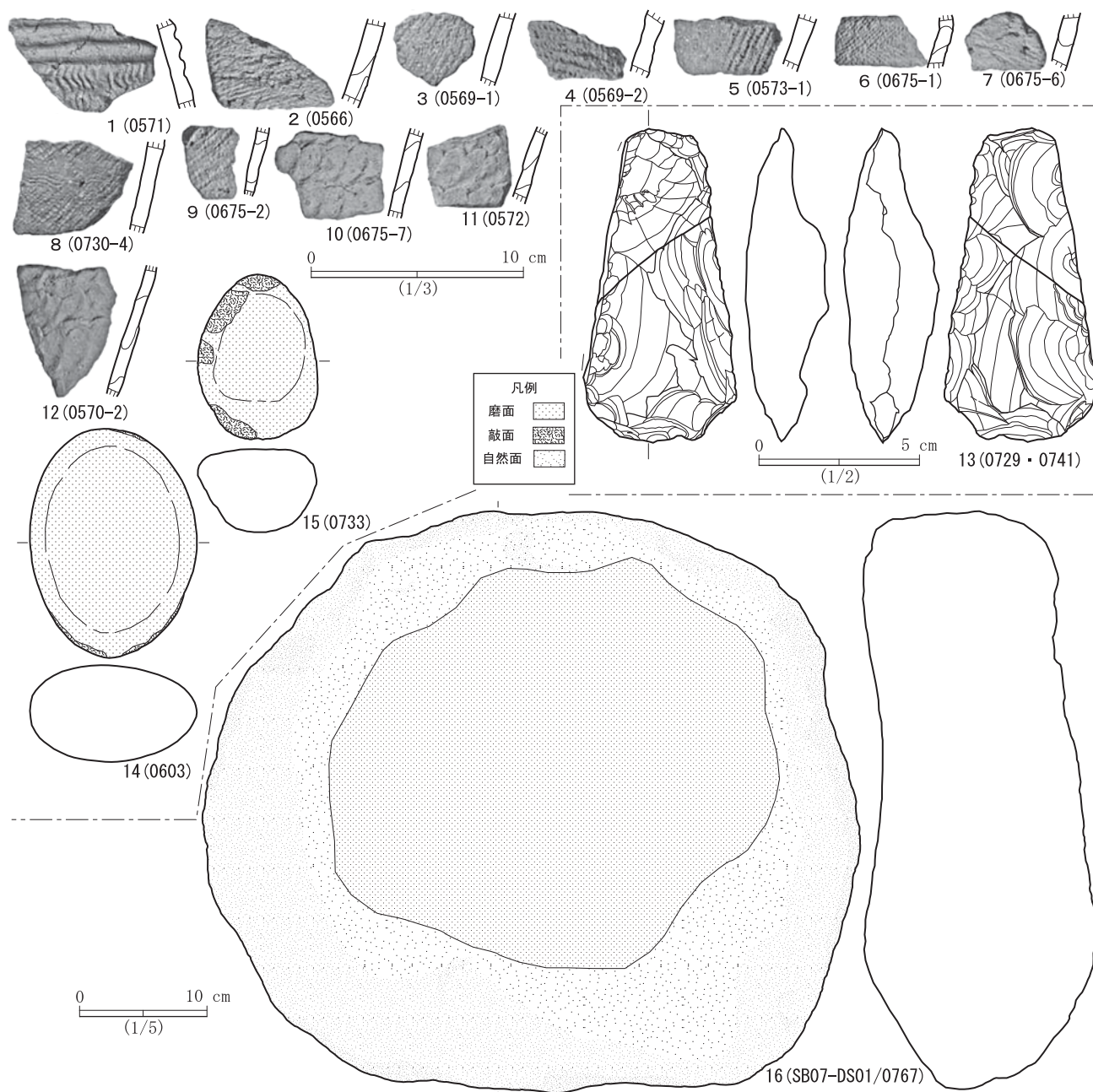


図 41 7号住居跡 出土遺物拓影・実測図

3号住居跡 (図 38)

土器は4点を図示した。2・4は諸磯式土器である。1(0455-2)・2(0454)は竹管状工具による沈線、3(0453-2)は縄文の地に細い縦位の紐状張付文、4(0457)は縄文の地に竹管状工具による不規則な横位の沈線を施す。

石器は1点を図示した。5(SB03-DS01/0604)は住居跡内で検出された泥岩製の台石である。

4号住居跡 (図 39)

土器は1点を図示した。1(0619)は外面波状口縁、口唇部ナデ・口縁部斜縄文・結節浮線文・上部に沈線をもつ横位の隆線文、内面口縁部に稜・ナデを施す。

石器は1点を図示した。2(SB04-DS01/0606)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

5号住居跡 (図 40)

土器は6点を図示した。2・3は五領ヶ台式土器、4・5は外来系土器である。1(0534・0718)は口縁部で口唇部面取り後斜縄文、外面斜縄文、内面口縁部から2.5cm幅で斜縄文・ナデを施す。2(0537)は縄文、3(0719-1)は竹管状工具による縦位の沈線が入る胴部、4(0624)は縄文に横位の結節浮線文、5(0625-4)・6(0625-1)は縄文が施される胴部である。

石器は6点を図示した。7(0599)は頁岩製の打製石斧、8(0652)は安山岩製の磨・敲石・凹石、9(0539)は安山岩製・10(0601)は泥岩製の磨・敲石、11(0476)は泥岩製・12(0475)は安山岩製の石皿である。

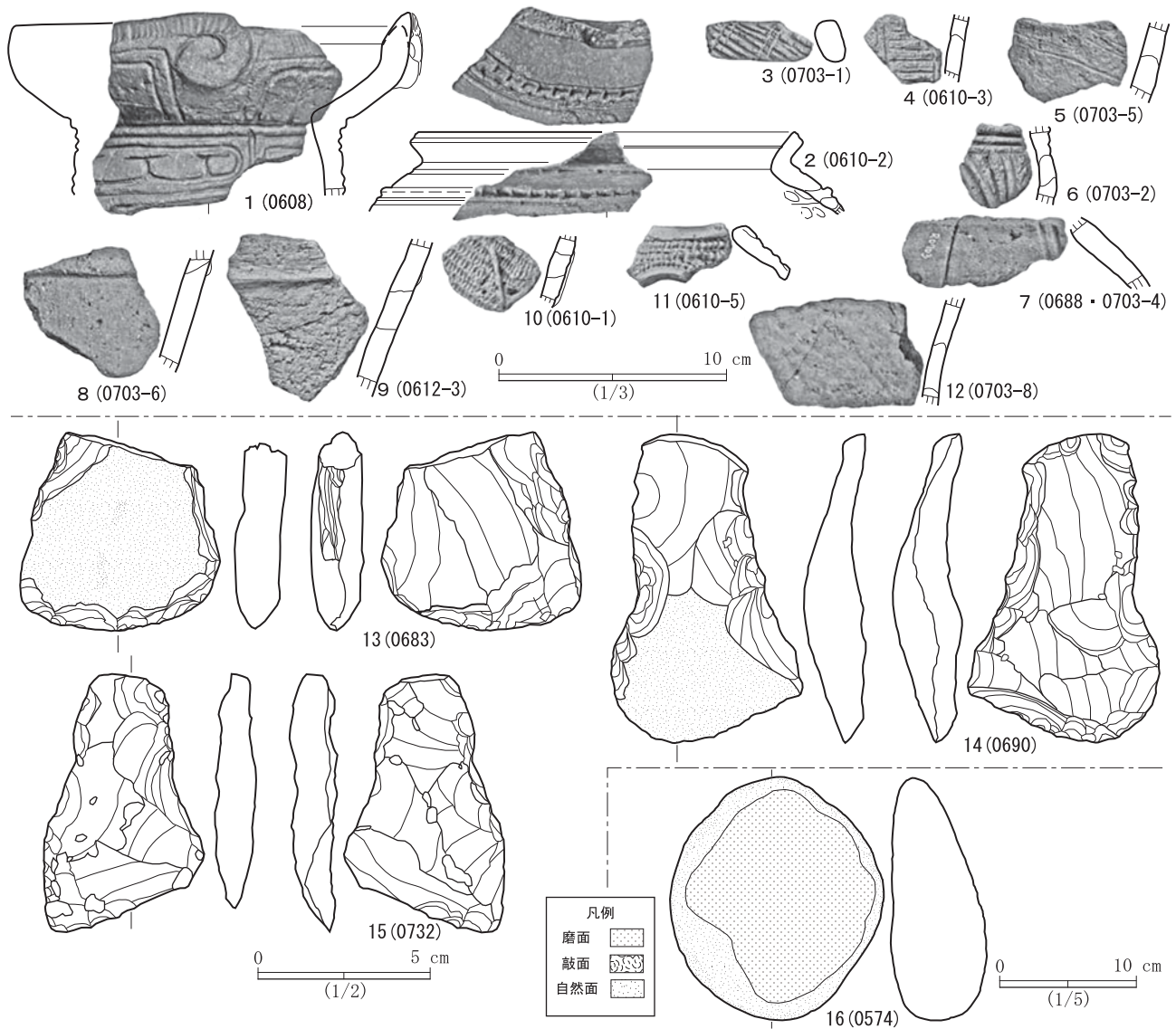


図 42 8号住居跡 出土遺物拓影・実測図

7号住居跡 (図 41)

土器は12点を図示した。10～12は五領ヶ台式土器である。1は竹管状工具による横位の沈線下に竹管状工具による連続押圧を施す。2(0566)・3(0569-1)・4(0569-2)・5(0573-1)・6(0675-1)・7(0675-6)・8(0730-4)・9(0675-2)は縄文、10(0675-7)・11(0572)・12(0570-2)は無文で輪積痕を表に残し裏はナデている。

石器は4点を図示した。13(0729・0741)はホルンフェルス製の打製石斧、14(0603)は輝石安山岩製・15(0733)は安山岩製の磨・敲石、16(SB07-DS01/0767)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

8号住居跡 (図 42)

土器は12点を図示した。1～4・6は五領ヶ台式土器、11は外来系土器である。1(0608)は口唇部竹管状工具によるD字文を付す隆線文の先を渦状に突起状に張付、口縁部竹管状工具による横位の沈線の下位に連続逆U字文、頸部に竹管状工具による横位の沈線、胴部竹管状工具による横位の楕円形沈線の中に棒状工具による▽型文を施す。2(0610-2)は口唇部横位の沈線、頸部竹管状工具による横位の押引文、肩部半截竹管状工具による横位の交互刺突文・押引文による区画沈線・押引文による曲線の沈線を施す。10(0610-1)・11(0610-5)は外来系土器の胴部である。

石器は4点を図示した。13(0683)は珪質頁岩製・14(0690)は泥岩製・15(0732)は泥岩製の打製石斧、16(0574)は安山岩製の石皿である。

9号住居跡 (図 43)

土器は3点を図示した。1(0581)は波状口縁部で、口唇部に棒状工具によるキザミを施す。

石器は3点を図示した。4(0593)は安山岩製の打製石斧、5(0706)は砂岩・6(0591)は安山岩製のスタンプ形石器である。

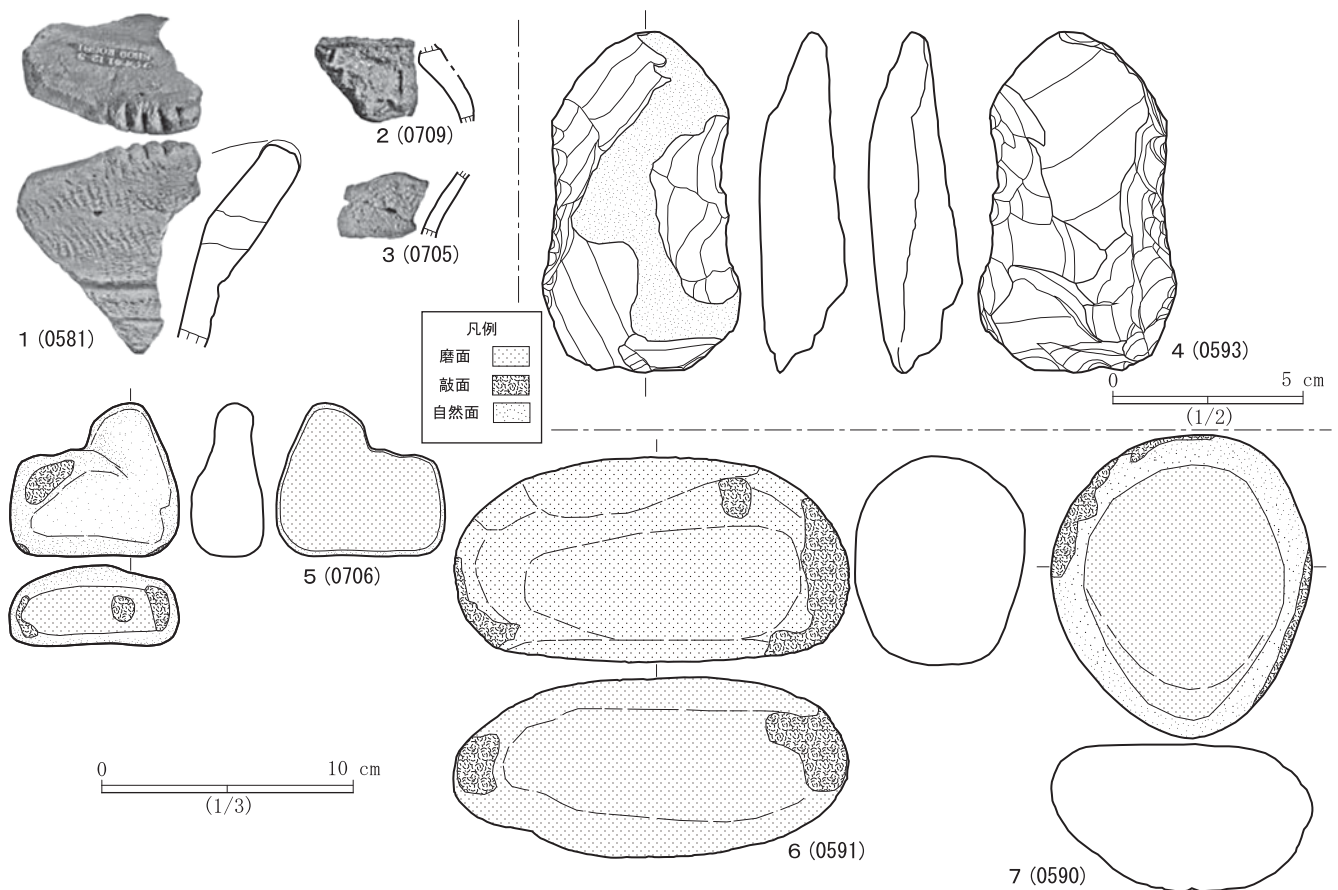


図 43 9号住居跡 出土遺物拓影・実測図

10号住居跡（図44・45）

土器は14点を図示した。1～5・8～10・12・13は五領ヶ台式土器、6・11は外来系土器である。1(0665)は波状口縁、口唇部面取り後ナデ・縦位の垂直－直角に曲がる隆帯に竹管状工具によるキザミ、外面口縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・口縁部文様帯を段で区画・胴部ナデを施す。2(0582)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・口縁部文様帯を段で区画・胴部ナデ・横位の浮線文を施す。3(0579-1)は口唇部面取り後ナデ・隅丸長方形の突起、外面口縁部に沿って竹管状工具による横位の沈線、逆三角形の陰刻頂点から縦位の沈線が伸びて形作る逆U字文を施す。4(0773-1)は口縁部に沿って竹管状工具による横位の押引文を3条施す。5(0852-3)は波状口縁部の頂部で、外面渦巻き状の粘土紐を張付・口唇部肥厚・竹管状工具による縦位の押引文、内面渦巻き状の粘土紐を張付・竹管状工具による縦位の押引文・稜を境にナデを施す。6(0657-5)は外面口縁部縦位のソーメン状張付文・口縁－頸部境に横位の結節浮線文・肩部格子状ソーメン状張付文に竹管状工具による横位の沈線3条・胴部竹管状工具による綾杉文を施す。8(0669-1)・9(0712-2)は五領ヶ台式土器の胴部、12(0668)・13(0663)は表面に縄文が施される深鉢の底部である。

石器は6点を図示した。15(0851-2)はホルンフェルスの剥片を利用したスクレイパー、16(0851-1)はホルンフェルス製の石篋、17(0671)はホルンフェルス製・18(0766)は泥岩製の打製石斧、19(0762)・20(0763)・21(0764)は安山岩製の磨・敲石、22(0756)は俎板形の泥岩製石皿である。

11号住居跡（図46）

土器は4点を図示した。1・2は五領ヶ台式土器である。1(0681-2)は口唇部面取り後ナデ・竹管状工具による縦位の沈線×5の両脇に渦巻き状の粘土紐を張付、外面口縁部横位の浮線文・縦位の棒状張付文・横位の浮線文直下に竹管状工具による横位の押引文・三角形の浮線文の内側に竹管状工具による横位の押引文を施す。2(0858-2)は竹管状工具による集合沈線を施す。3(0681-1)・4(0858-1)は縄文を施す。

石器は2点を図示した。5(0632)はホルンフェルスの剥片を利用した石斧、6(0681-3)は泥岩製の磨・敲石である。

12号住居跡（図47）

石器は1点を図示した。1(0768)は安山岩製の石皿で、一度割れた石皿を再利用している。

13号住居跡（図48）

石器は2点を図示した。1(0746)は黒曜石製の石鏃、2(0754)は安山岩製の磨・敲石である。

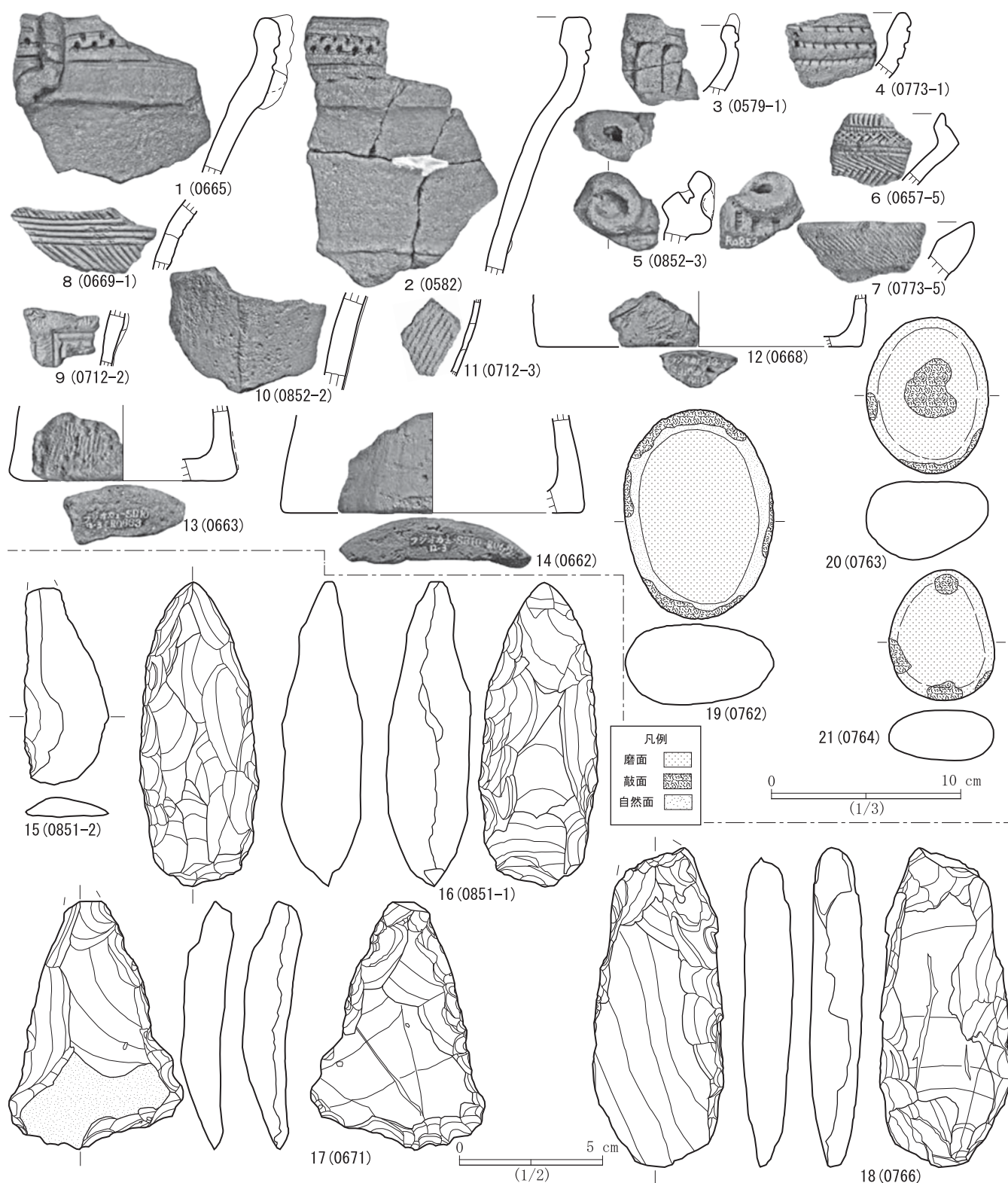


図 44 10 号住居跡 出土遺物拓影・実測図①

14 号住居跡 (図 49)

土器は 10 点を図示した。3・5～7・14 は諸磯式土器、1 は五領ヶ台式土器、2・8・9 は外来系土器である。1 (0846-11) は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・棒状工具による横位の沈線区画・棒状工具による縦位の沈線・棒状工具による二重円形文を施す。2 (0770-4) は波状口縁、口縁端部折返し内側に面取り後ナデ、外面横位の結節浮線文・稜に隆線文・横位の結節浮線文 2 条の間に斜縄文を施す。3 (0846-5)・4 (0846-2) は竹管状工具による集合沈線、5 (0770-8) は縦位 C 字文、6 (0846-3) は縄文の地文に横位の結節浮線文を施す。7 (0846-12)・8 (0846-7)・9 (0846-6) は縄文を施す。10 (0770-1) は縄文の地に縦位の C 字文が施される深鉢の底部である。

石器は 8 点を図示した。11 (0807) は黒曜石製の石鏃、12 (0827) は泥岩製の石錘、13 (0853-1) 安山岩製・14 (0853-2) はチャート

製のスクレイパー、15(0830)は安山岩製のスタンプ形石器、16(0779)は安山岩製の、17(0818)・18(0817)は泥岩製の磨・敲石である。

配石遺構

1号配石遺構（図 50）

土器は5点を図示した。1は五領ヶ台式土器である。1(0639)は口唇部面取り後ナデ、外面三角形の粘土紐による張付文・竹管状工具による押引文・ナデを施す。2(0548)・3(0551)は隆線文、4(0550-1)は竹管状工具による集合沈線、5(0550-2)は縄文を施す。

石器は5点を図示した。6(0547)は安山岩製の石錘、7(0679)はホルンフェルス製のスクレイパー、8(0678)は安山岩製の打製石斧、9(0553)はホルンフェルス製の石匙、10(0640)は安山岩製のスタンプ形石器である。

3号配石遺構（図 51）

石器は5点を図示した。1(0644)は安山岩製の打製石斧、2(0645)・3(0646)・4(0647)は安山岩製のスクレイパー、5(0643)は泥岩製の石皿である。5の周囲に1～4を配置した状態で検出された。

集石遺構

1号集石遺構（図 52）

石器は2点を図示した。1(0378)は泥岩製の磨・敲・凹石、2(0381)は安山岩製の磨・敲石である。

2号集石遺構（図 53）

石器は1点を図示した。1(0383)は安山岩製の磨・敲・凹石である。

3号集石遺構（図 54）

石器は3点を図示した。1(0384)は泥岩製の磨・敲・凹石、2(0388)は安山岩製の磨・敲石であるが、割れた後に割れ口をスタンプ形石器のように使用している。3(0387)は砂岩製の磨・敲石である。

溝状遺構

2号溝状遺構（図 55）

土器は5点を図示した。1～4は五領ヶ台式土器である。1(0145-2)は口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による綾杉条の集合沈線・竹管状工具による横位の浮線2条を施す。2(0139)は口唇部面取り後ナデ・渦巻き状隆線文を張付、外面口縁部竹管状工具による横位の沈線・棒状工具による逆U字文を施す。3(0144)は波状口縁、口唇部面取り後ナデ・頂部に円柱形の張付、外面口縁部頂部を中心に波状口縁に沿って交互刺突文・頂部より垂下曲線状の隆線文を施す。4(0145-1・0146)は頸部は鋭く屈曲、口唇部面取り後竹管状工具による横位の押引文、外面口縁部ナデ・頸部竹管状工具による横位の押引文に4単位の2連続U字文・胴部ナデ・交互刺突文・竹管状工具による横位の押引文・胴部ナデ・棒状工具による縦位の平行沈線・底部付近ヘラケズリ後ナデを施す。5(0137)は無文の口縁部である。

石器は1点を図示した。6(0152)は頁岩製の打製石斧である。

3号溝状遺構（図 56）

土器は8点を図示した。7は諸磯式土器、1・2は五領ヶ台式土器、6は外来系土器である。1(0188・0427-1)・2(0188-5)は口縁部で沈線・隆線文などを施す。3(0426)は口縁部で口唇部面取り後ナデ・棒状工具による沈線で逆U字文を陽刻、外面ケズリ

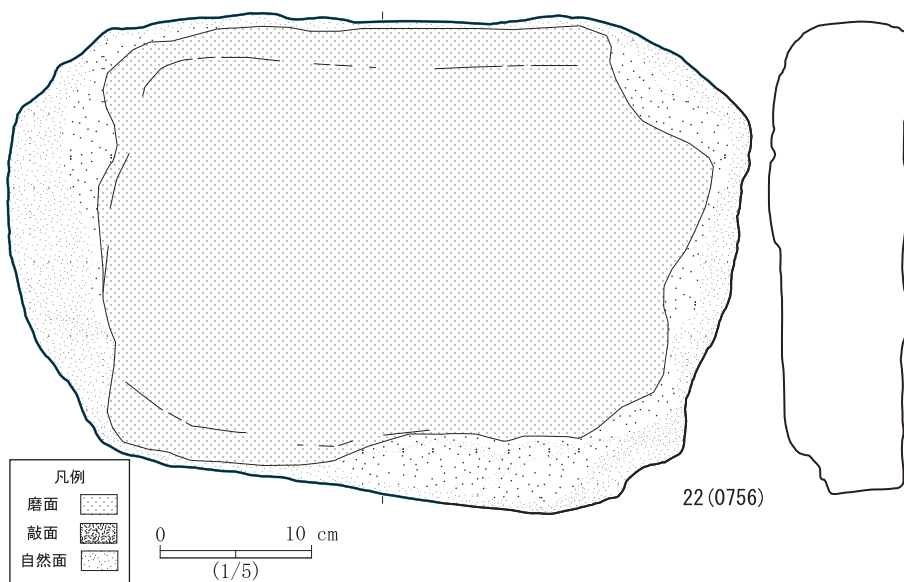


図 45 10号住居跡 出土遺物拓影・実測図②

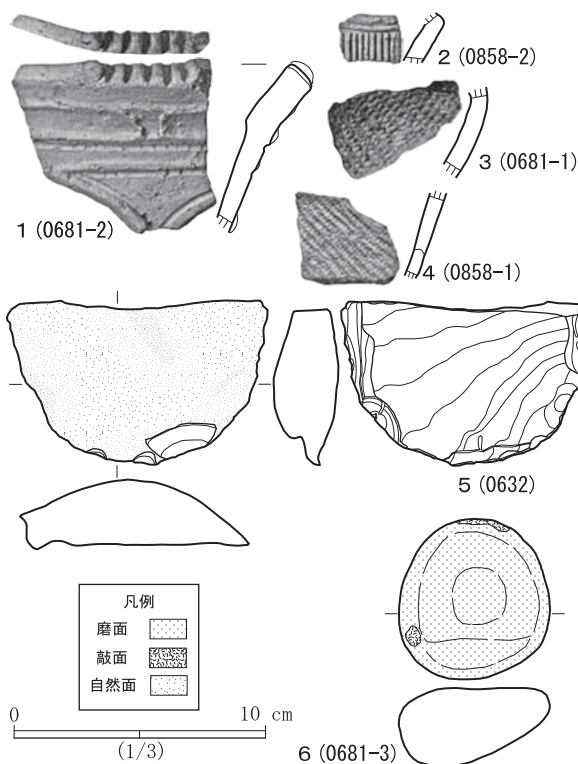


図 46 11号住居跡 出土遺物拓影・実測図

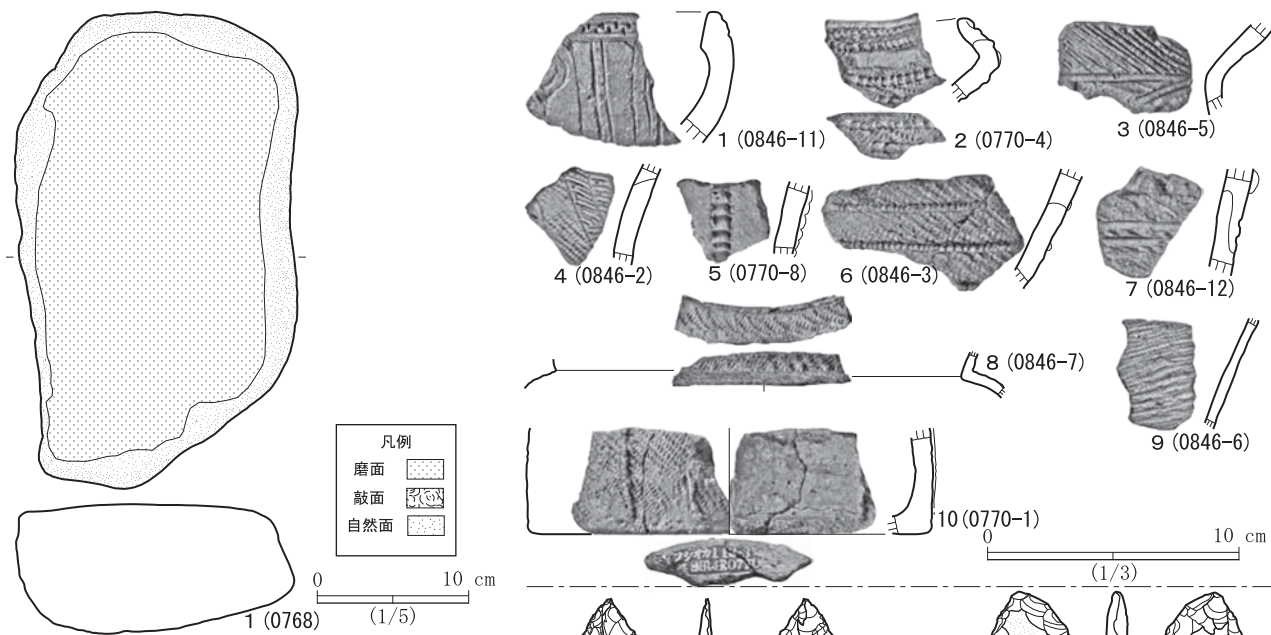


図 47 12 号住居跡 出土遺物実測図

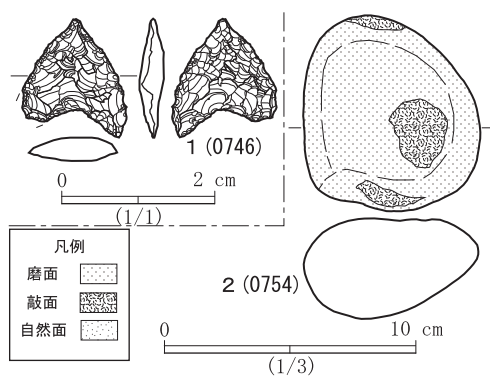


図 48 13 号住居跡 出土遺物実測図

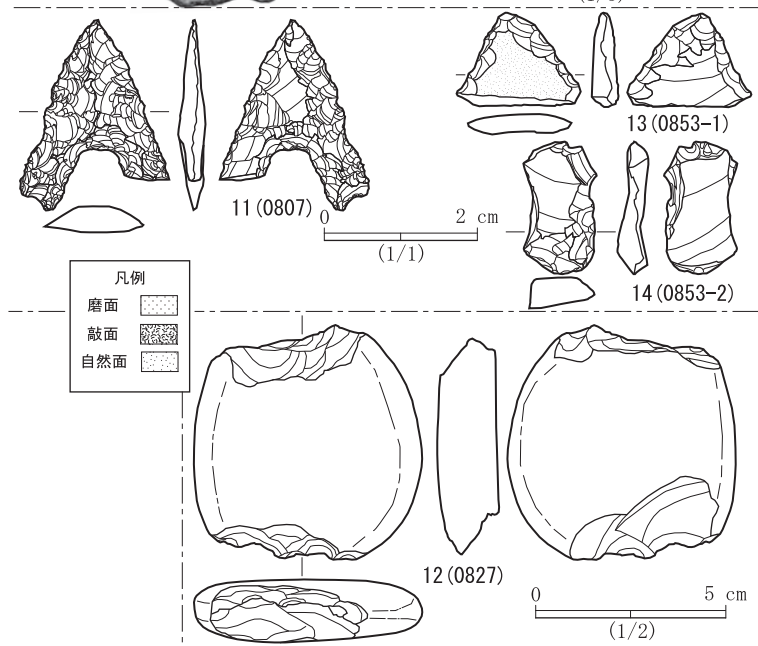


図 49 14 号住居跡 出土遺物拓影・実測図

後ナデを施す。4(0189-3・0638-1)は胴部で頸部は屈曲、外面頸部～胴部に渦巻状の隆線文・竹管状工具による横位の沈線文・胴部縦位の隆線文・竹管状工具による曲線の沈線を施す。5(0556)は竹管状工具による集合沈線、6(0427-3)は縄文の地に結節浮線文、7(0189・0555・0556)は縄文の地に竹管状工具による不規則な横位の沈線、8(0189-2・0638)は結節縄文を施す。

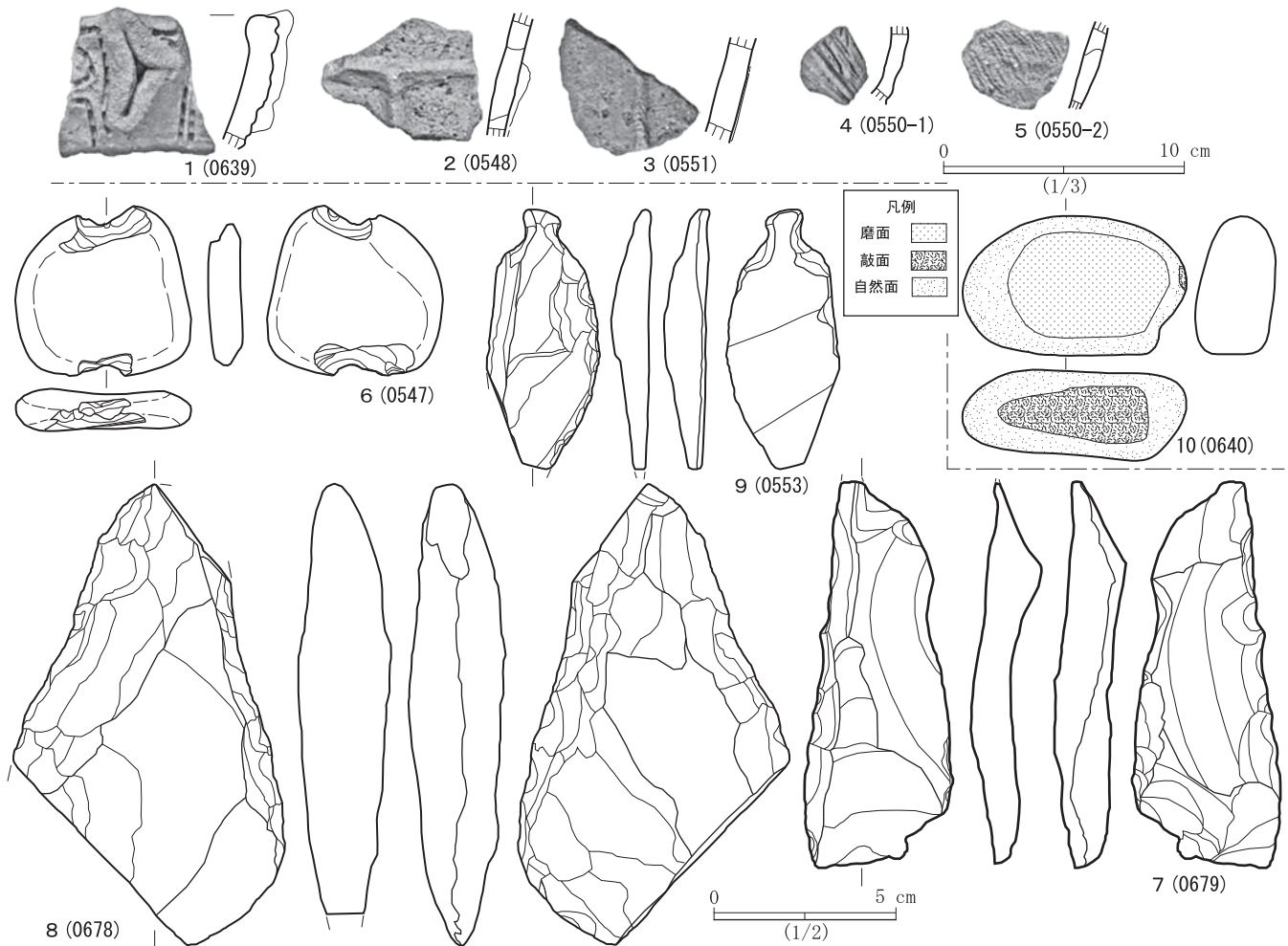


図 50 1号配石遺構 出土遺物拓影・実測図

石器は2点を図示した。10(0188-3)は安山岩製の石斧で基部を欠損している。11(0190)は安山岩製の磨・敲・凹石である。

4号溝状遺構 (図 57)

土器は1点を図示した。1(0477)は小型深鉢の口縁～底部で、口唇部面取り後ナデ・縦位の短い隆線文、外面横位の隆線文・縦位の隆線文・ケズリ後ナデ、底部ナデを施す。

石器は2点を図示した。2(0480)・3(0481)はホルンフェルス製の打製石斧である。

5号溝状遺構 (図 58)

石器は1点を図示した。6(0750)はホルンフェルス製のスクレイパーで、剥片を利用している。

6号溝状遺構 (図 59)

土器は9点を図示した。1・2・6・7・9は五領ヶ台式土器である。1(0434)は口縁～突起部で口唇部面取り後ナデ・表裏面に渦巻き状の突起、外面口縁部棒状工具による縦位の沈線を施す。2(0436)は口縁部で口唇部面取り後ナデ、外面交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線内をナデ・竹管状工具による縦位の沈線を施す。3(0722)は口縁部で、口唇部結節浮線文、外面斜縄文・横位の結節浮線文×2、内面口縁部結節浮線文・口縁部肥厚し斜縄文・稜・胴部ナデを施す。4(0433-3)は無文の口縁部である。5(0437・0443-1・0723)は深鉢の胴部で縦位の隆線文を施す。6(0435)は深鉢の胴部で、外面頸部に竹管状工具による横位の沈線・胴部二重の逆U字文・地文は斜縄文・その下部を竹管状工具による横位の沈線で区画・上端が短いY字を呈する縦位の隆線文を施す。7(0428)は深鉢の胴部で、外面竹管状工具による縦位の押引文・竹管状工具による垂下曲線状の押引文を施す。8(0437)は縄文を施す。9(0441)は深鉢の底部で、外面竹管状工具による縦位の沈線・地文は斜縄文・縦位の隆線文、底面ナデを施す。

石器は5点を図示した。10(0676-2)は黒曜石製の石匙である。11(0431)は安山岩製の磨・敲・凹石、12(0439)・13(0726)・14(0430)は安山岩製の磨・敲石である。

7号溝状遺構 (図 60)

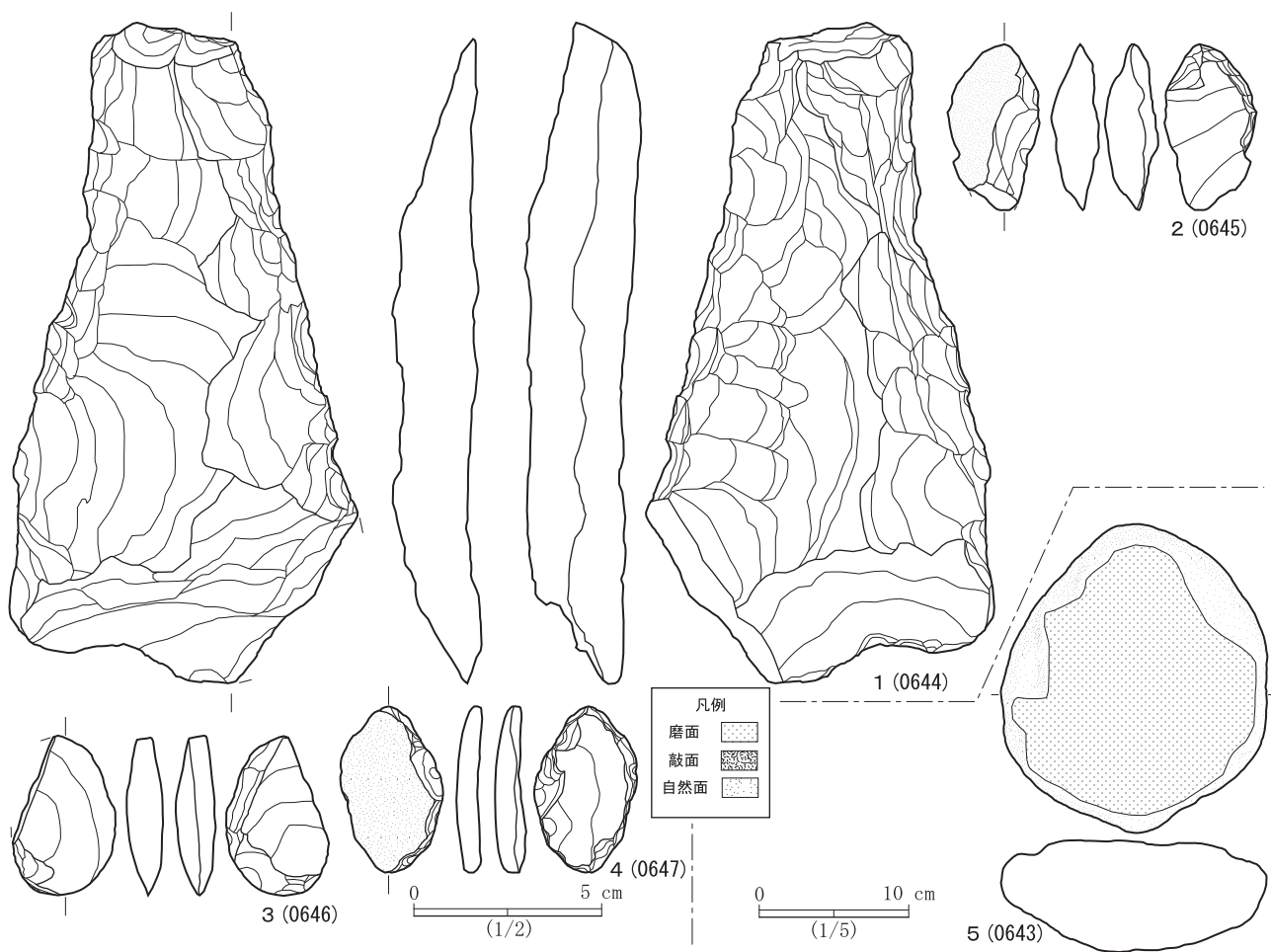


图 51 3号配石遺構 出土遺物拓影・実測図

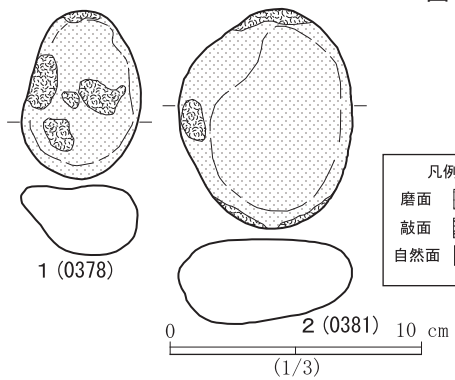


图 52 1号集石遺構 出土遺物実測図

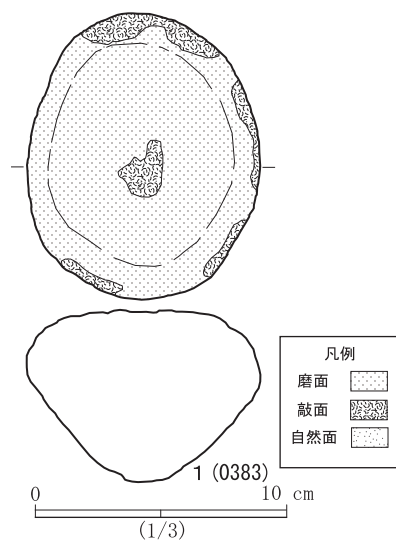


图 53 2号集石遺構 出土遺物実測図

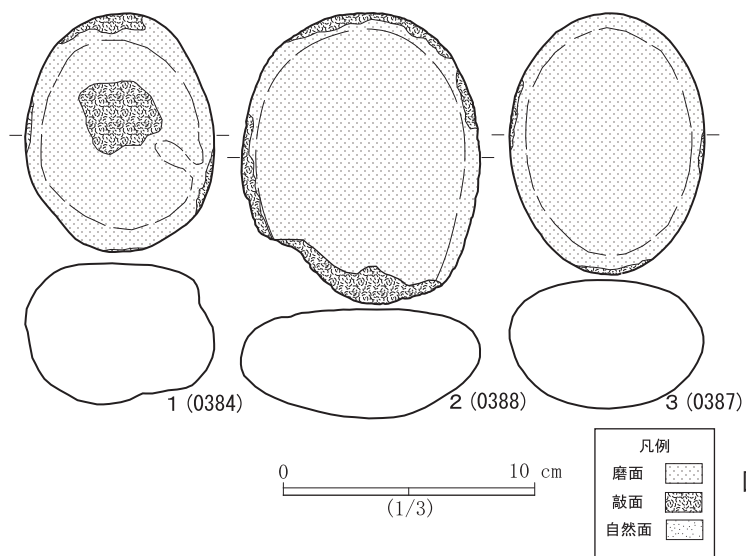


图 54 3号集石遺構 出土遺物実測図

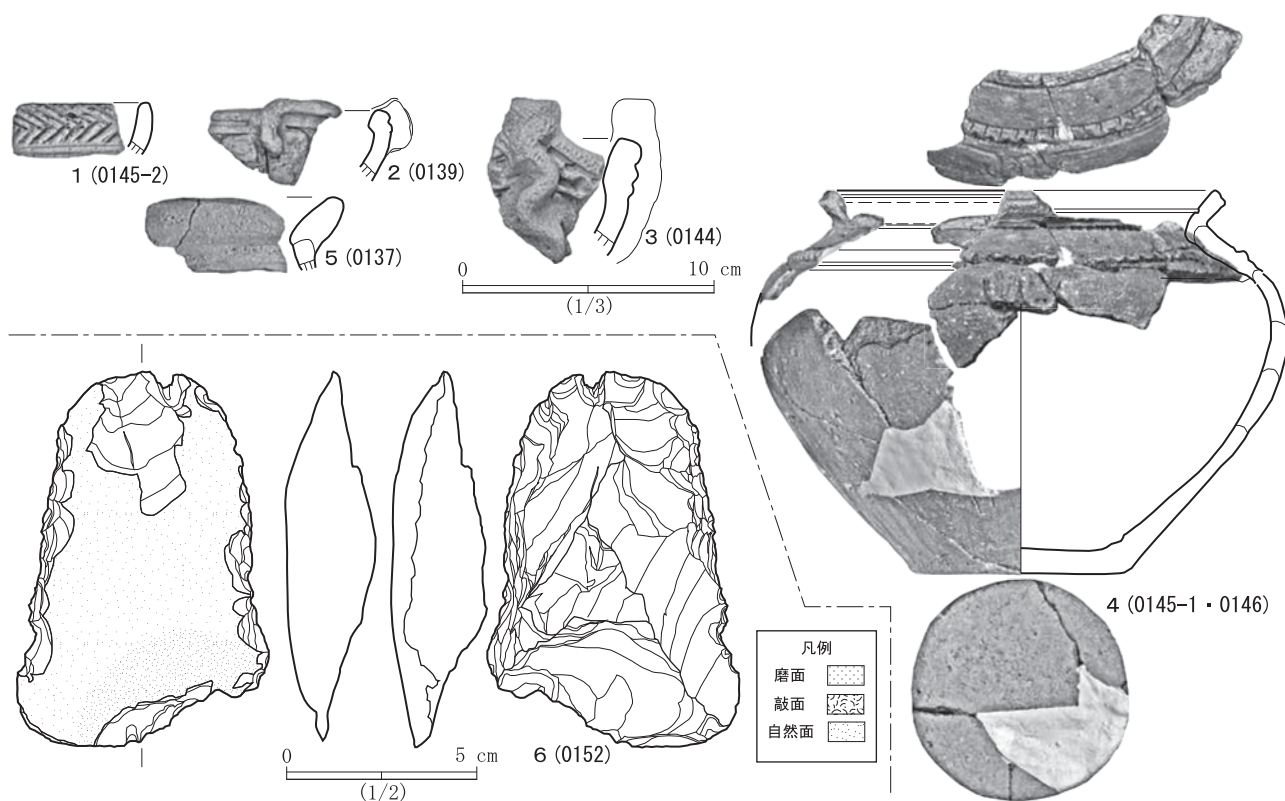


図 55 2号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

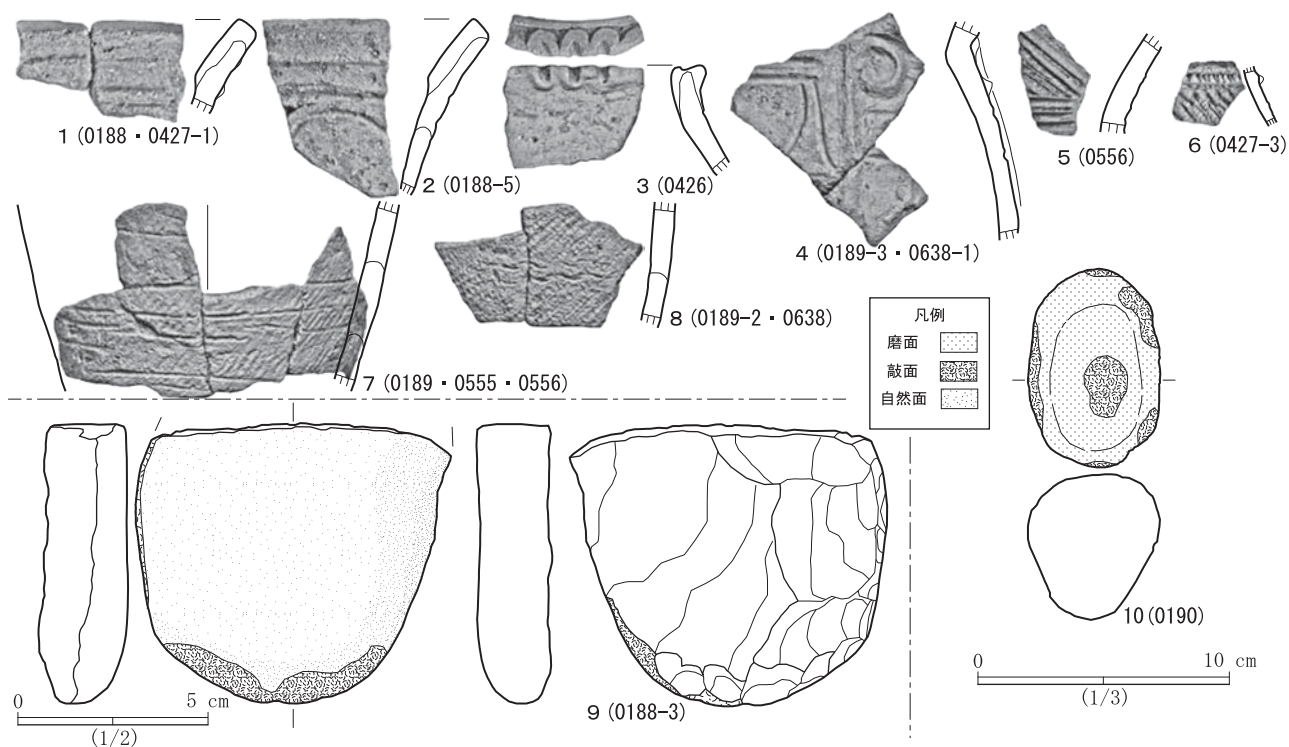


図 56 3号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

土器は8点を図示した。8は諸磯式土器、7は五領ヶ台式土器、である。1(0615)はキザミを施した縦位の隆線文、2(0720-1)は縦位の隆線文、3(0720-4)・4(0720-7)は縦位の隆線文・竹管状工具による縦位の沈線・縄文を施す。5(0720-2)は竹管状工具による集合沈線を施す。6(0720-3)・7(0720-5)は縄文の地に竹管状工具による沈線文が入る。8(0614・0720-6)は縄文の地に半截竹管状工具による不規則な横位の沈線を施す。

石器は1点を図示した。9(0677)は安山岩製の磨・敲石である。

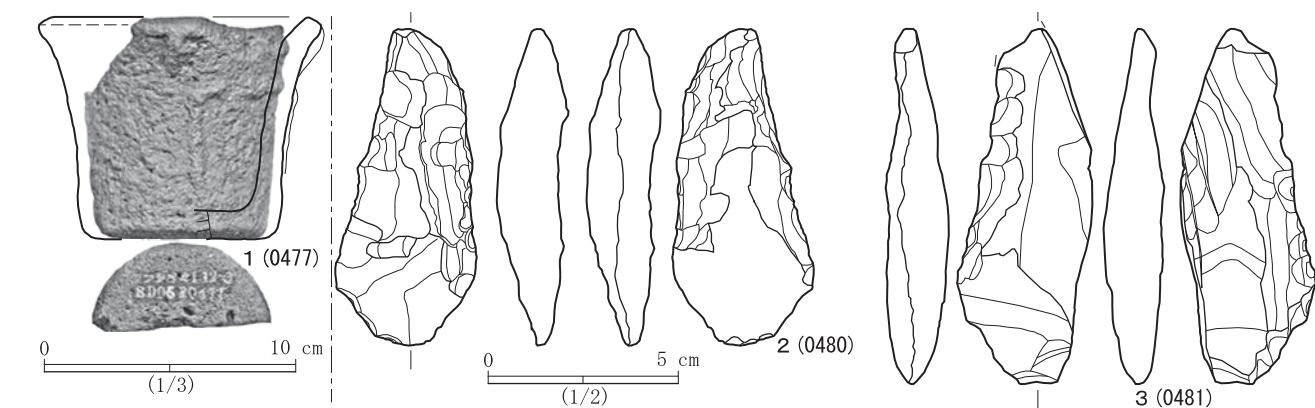


图 57 4号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

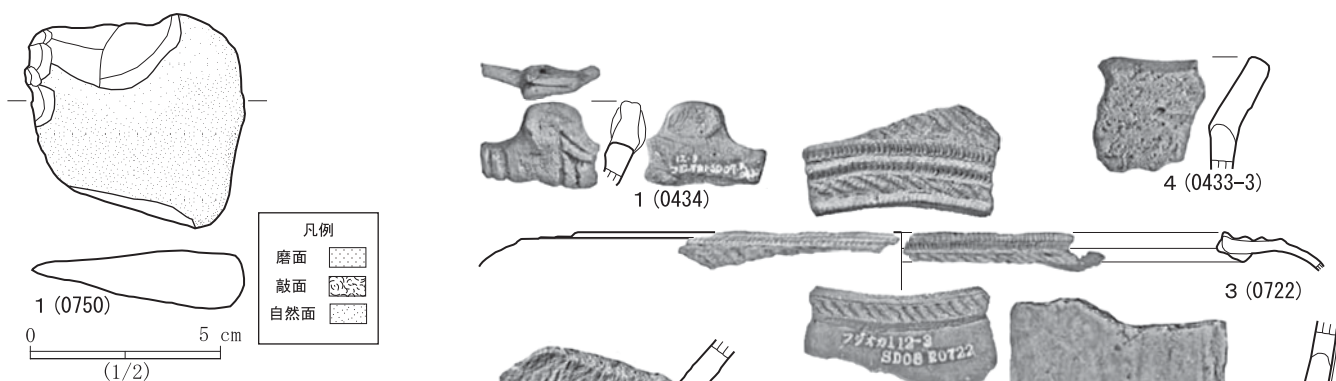


图 58 5号溝状遺構 出土遺物
実測図

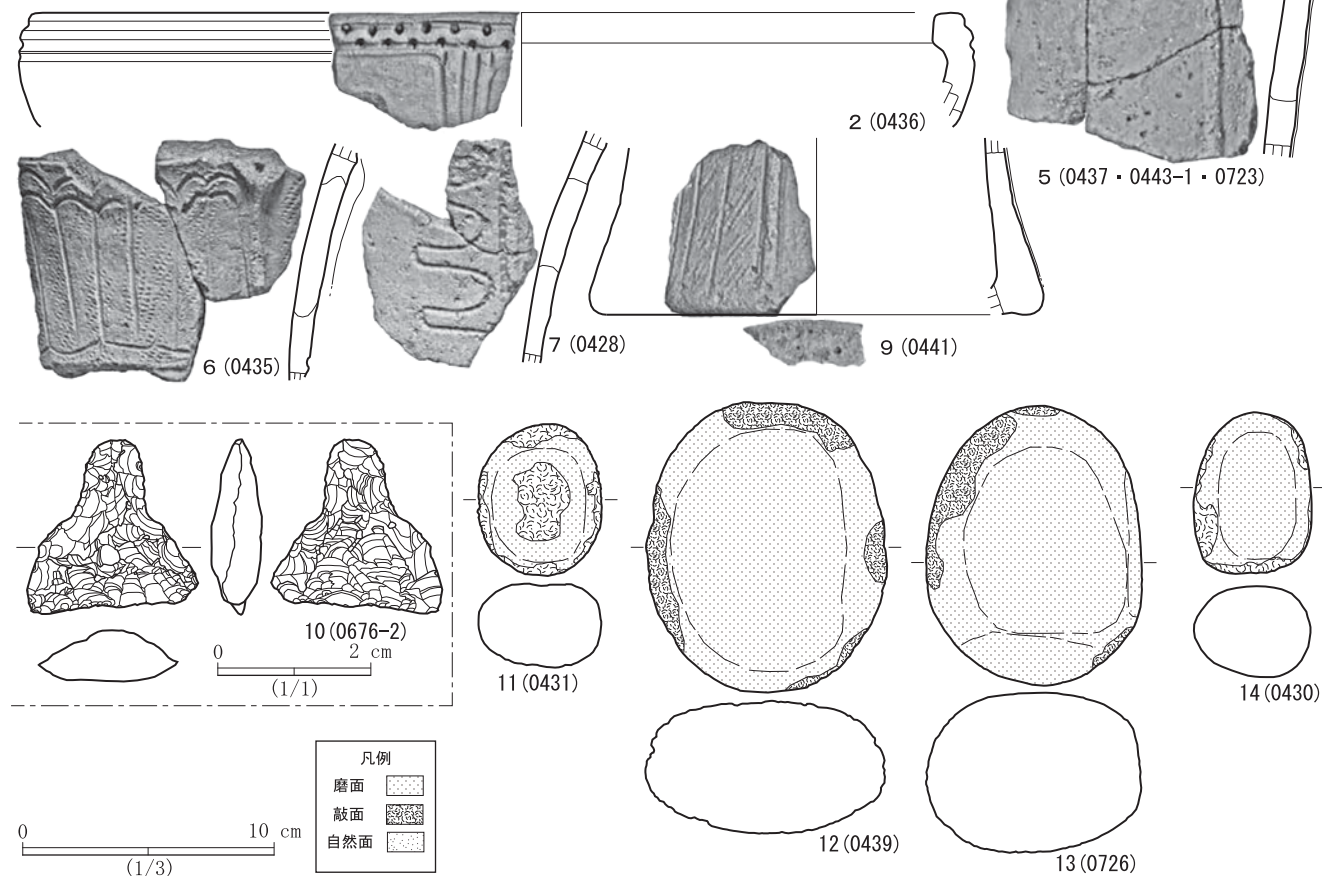


图 59 6号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

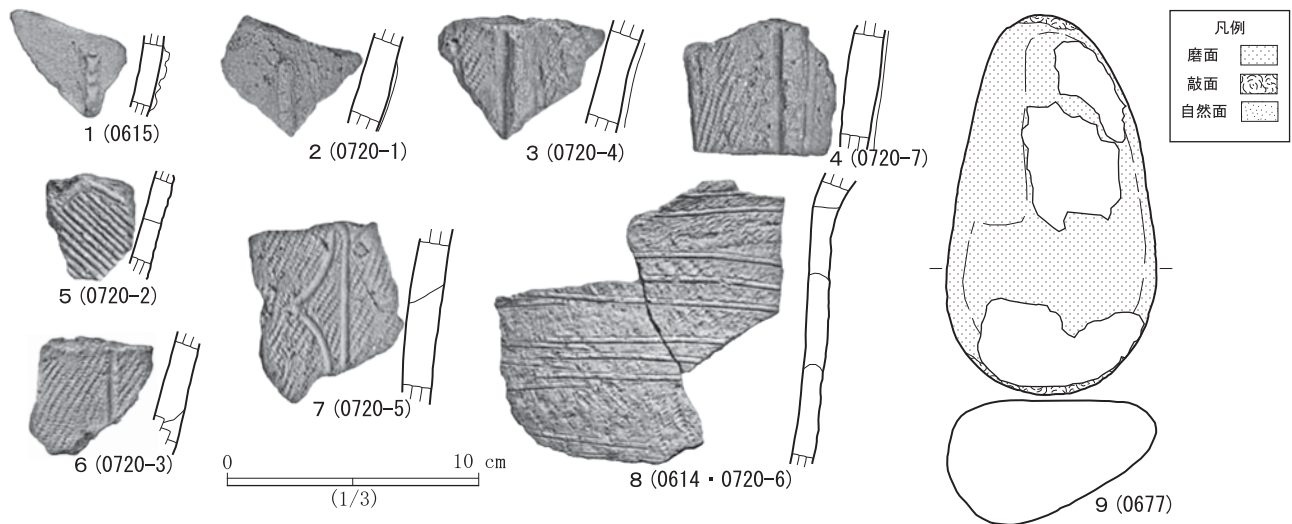


図 60 7号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

包含層

土器（図 61・62）

58 点を図示した。1は絡状体、2～9は諸磯式土器、10～34は五領ヶ台式土器、35～37は隆線文、38・39は沈線文、40～43は縄文の口縁部、44～47は無文の口縁部・底部、48～56は外来系土器、57は土製円盤である。

1(444-4)は表面に絡状体圧痕文を施す。

2(0291)は口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による綾杉状の集合沈線・横位の集合沈線・円形張付文を施す。3(0785)・4(0294・0296)は外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・斜縄文、6(0498)は頸部に竹管状工具による粗い平行沈線を施す。5(0293)・7(0349)は外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・粗いナデ、8(0231)は外面隆線文を竹管状工具による押引文で囲む区画文・ナデを施す。9(0103)は外面斜縄文・縦位の結節浮線文を施す。

10(0466)は波状口縁の頂部、突起の張付痕、口唇部丸めてナデ・竹管状工具によるC字文、外面口縁に沿い竹管状工具による区画内に三角形の刺突と縦位の細かい集合沈線で充填・突起の張付痕下部に三角形の連続刺突・口縁文様帯区画に竹管状工具による横位の沈線と並行するC字文を施す。11(0065)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部逆三角形の張付文・斜縄文・竹管状工具による横位の沈線・竹管状工具による渦巻状・長方形の沈線・地文は縄文を施す。12(0473)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部斜縄文・屈曲部に曲線の隆線文・胴部竹管状工具による横位の沈線×3・竹管状工具による三叉状の沈線中央部に三角形の刺突・地文は斜縄文を施す。13(0050・0223・0224)・14(0169)・15(0269)は口縁に沿って交互刺突文を施す。16(0307)は口縁に沿って竹管状工具による連続刺突を施す。17(0176)は口縁に沿って連続キザミを施す。18(0056・0227・0230・0234)は口唇部に交互刺突文が入り上部に逆三角形の陰刻が入る把手が付く。19(0078)・20(0080)は竹管状工具による沈線、21(0116)・22(0325)・23(0444-1)は半截竹管状工具による集合沈線、24(0785)は棒状工具による沈線を施す。25(0081)は外面棒状工具による円形文を竹管状工具による三叉の押引で区画・竹管状工具による長方形の押引文を施す。26(0196)は縄文の地に逆三角形の陰刻・頂点から棒状工具による沈線による逆U字文、27(0183)・28(0203)・29(0211)・30(0444-2)・31(0501)・32(0287)は縄文の地文に竹管状工具による沈線で逆U字文またはU字文を施す。33(0333)は突起部で頂部二重の逆三角形、外面に竹管状工具による曲線の押引文を施す。34(0465-2)は張付文でフジツボ形、端部に竹管状工具による横位の沈線、外面極細の竹管状工具による集合沈線・三角形の刺突、内面指頭痕を施す。

35(0529-2)・36(0233)は横位の隆線文、37(0504-2)は曲線の隆線文を施す。38(0095)は竹管状工具による集合沈線、39(0108)は竹管状工具による曲線の集合沈線にケズリ後ナデを施す。40(0204)・41(0228)は口縁部に縄文・頸部に半截竹管状工具による横位の沈線を施す。42(0292)・43(0350)はくの字に内曲する口縁部で縄文を施す。45(0237)は無文の口縁部でケズリ後ナデ、46(0056)は穿孔が施される。

48(0298)は口唇部に縄目と竹管状工具によるキザミ、外面縄文の地に緩い曲線の山形状隆線にC字文を施す。49(0522)・50(0106)は口縁に沿って横位の棒状張付文を施す。51(0331)・52(0507)・53(0502)・54(0444-3)はC字文を施す。55(0222)・56(0260)は半截竹管状工具による集合沈線を施す。

57(0318)は無文の土製円盤である。

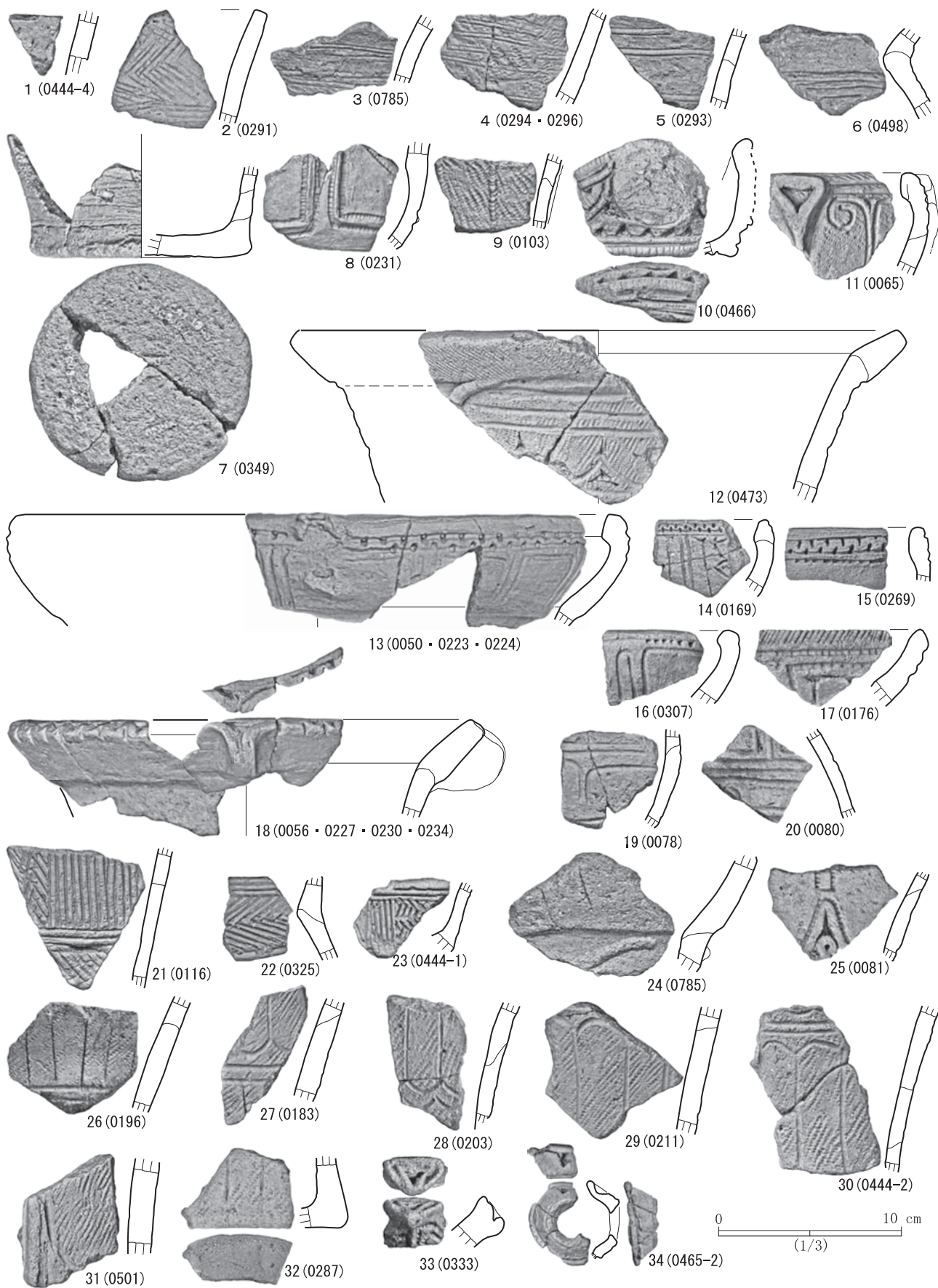


图 61 包含層 出土遺物拓影・実測図①

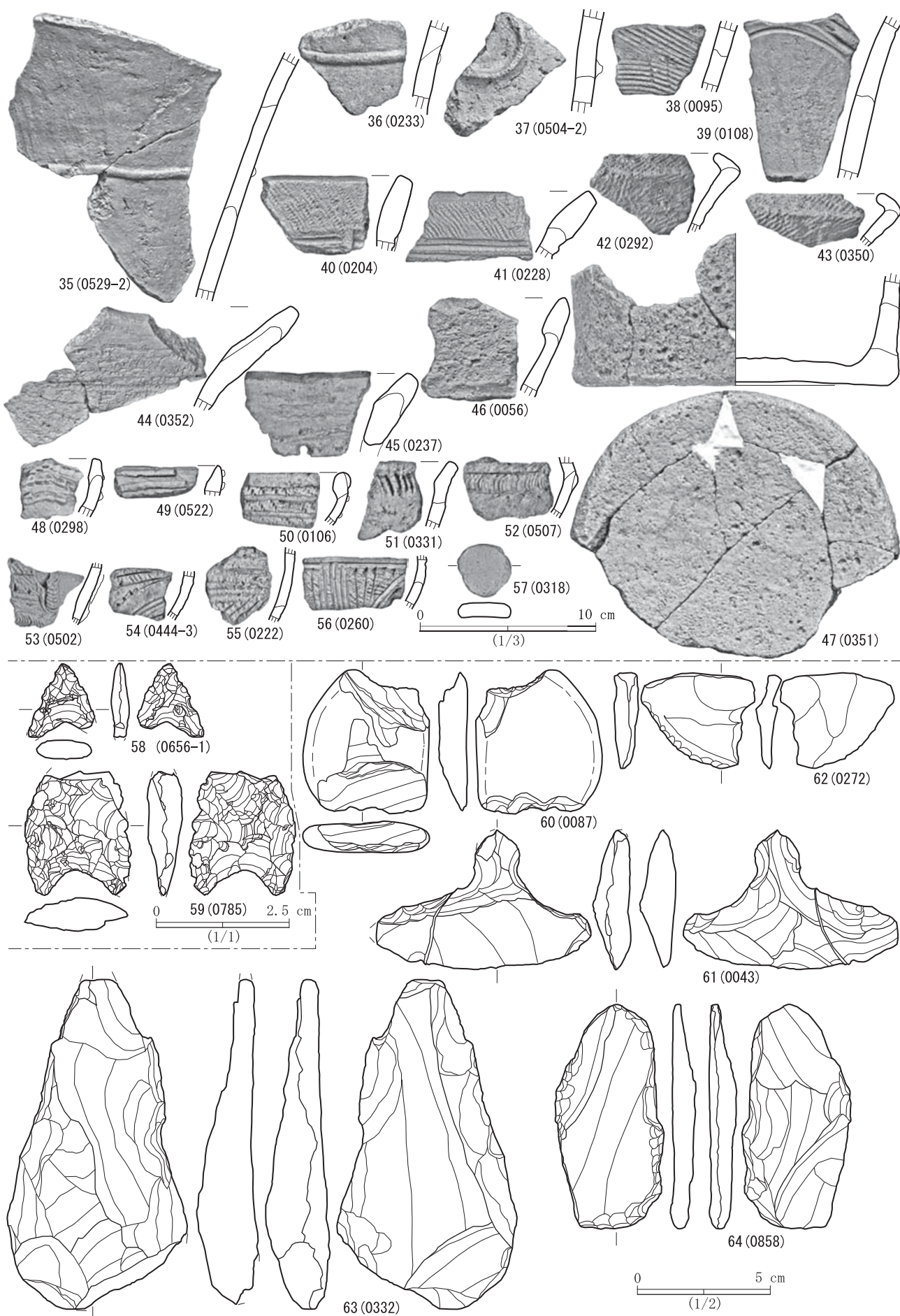


图 62 包含層 出土遺物拓影・実測図②

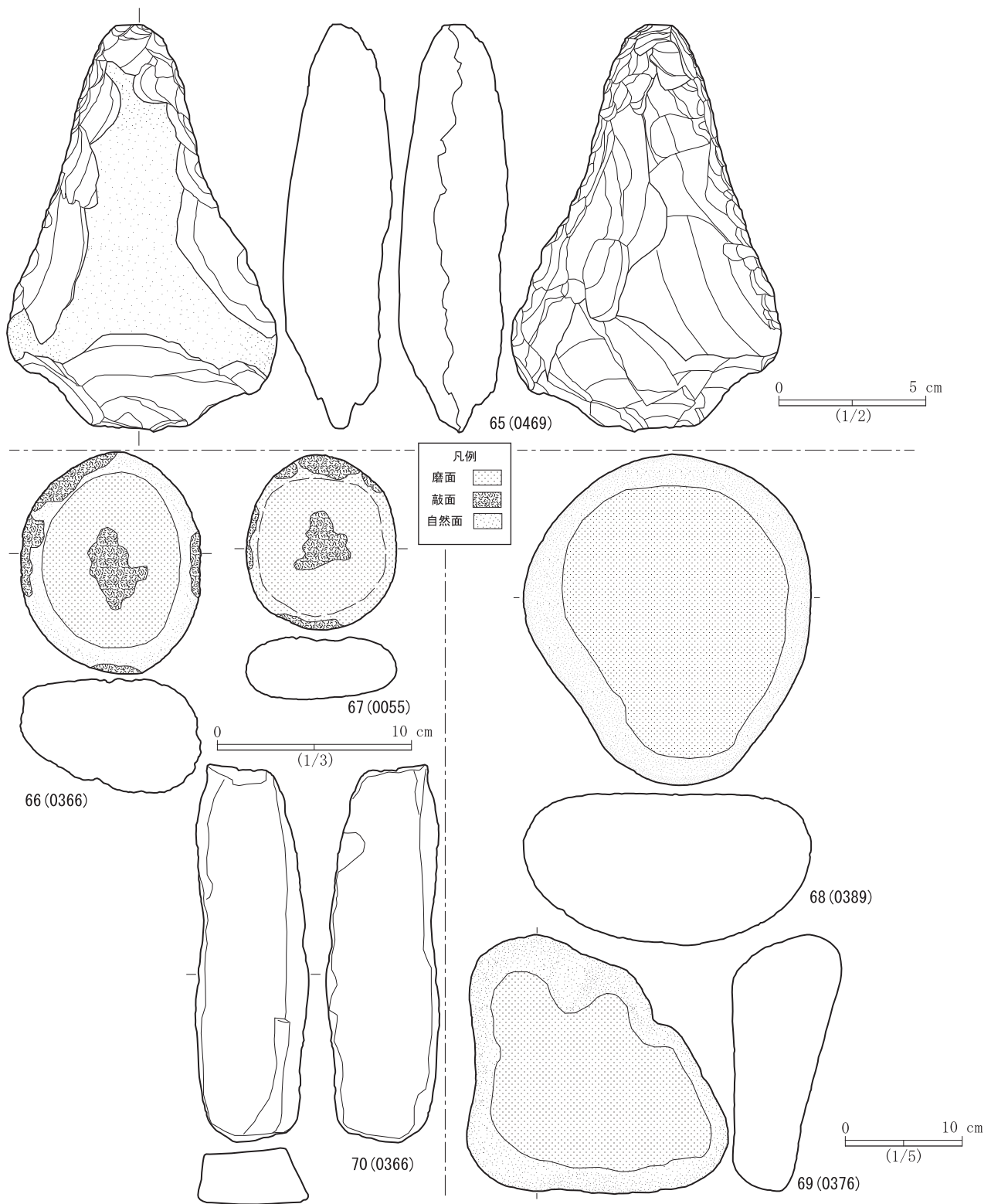


図 63 包含層 出土遺物拓影・実測図③

石器 (図 62・63)

58(0656-1)・59(0785)は黒曜石製の石鏃、60(0087)は輝石安山岩製の石錘、61(0043)はホルンフェルス製の石匙、62(0272)はホルンフェルス製のスクレイパー、63(0332)は頁岩製、64(0858)・65(0469)は安山岩製の打製石斧、66(0366)は泥岩製・67(0055)は安山岩製の磨・敲・凹石、68(0389)・69(0376)は安山岩製の石皿である。

70(0366)は時期が不明の砂岩製の砥石である。

(小金澤 彩可)

報告書 番号	遺物 番号	出土 地点	時代	器種	部位	残存 状況	焼成	量 量 (cm) は推定値			色 調	調 整	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径				
図 36-1	0370	SB01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	外面ナデ、内面ナデ	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒を含む	
図 36-2	0337	SB01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	小型深 鉢	底部	破片	良	-	-	(11.0)	橙色 2.5YR6/8	外面ナデ、内面ナデ、底面網代痕	砂・石英・長石・雲母・赤色粒・白 色粒を含む	
図 37-1	0341	SB02	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	橙色 2.5YR6/8	波状口縁、口唇部と外面口縁部に竹管状工具によ る横位の沈線、内面ナデ	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒を含む	
図 37-2	0343	SB02	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面縄文、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	
図 38-1	0455-2	SB03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	外面半截竹管状工具による縦位の集合沈線文、内 面ナデ	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 38-2	0454	SB03	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面半截竹管状工具による横位の集合沈線と斜位 の集合沈線・ナデ、内面ナデ	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒を含む	諸磯
図 38-3	0453-2	SB03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 5YR5/3	外面斜縄文の地に縦位の縦状張付文、内面ナデ	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒を含む	
図 38-4	0457	SB03	縄文時代前期後半	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/8	外面斜縄文後細い半截竹管状工具による横位の平 行沈線文、内面ケズリ後ナデ	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒を含む	諸磯
図 39-1	0619	SB04	縄文時代前期後半	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面波状口縁、口唇部ナデ・口縁部斜縄文・結 節浮線文・上部に沈線をもつ横位の隆線文、内面 口縁部に稜・ナデ	砂・0.5mm 大の石英・0.5mm 大の長 石・雲母・金雲母・赤色粒を含む	
図 40-1	0534・ 0718	SB05	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	口縁部	破片	良	(24.0)	-	-	明褐色 7.5YR5/6	口唇部面取り後斜縄文、外面斜縄文、内面口縁部 から2.5cm 幅で斜縄文・ナデ	砂・石英・長石・雲母・赤色粒・白 色粒を含む	
図 40-2	0537	SB05	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 5YR5/4	外面ナデ・縦位の縄目による押圧沈線、内面粗い ナデ・輪積痕	砂・石英・長石・雲母・赤色粒・白 色粒を含む	五領ヶ台
図 40-3	0719-1	SB05	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面ナデ・半截竹管状工具による縦位・楕円径の 押引文、内面ナデ	砂・石英・長石・金雲母・赤色粒・ 白色粒を含む	五領ヶ台
図 40-4	0624	SB05	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	斜縄文・結節浮線文、内面丁寧なナデ	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 40-5	0625-4	SB05	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/4	外面斜縄文、内面ナデ	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 40-6	0625-1	SB05	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面斜縄文、内面ナデ	砂・石英・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	
図 41-1	0571	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	外面指頭による横位の沈線・竹管状工具による縦 位の波状沈線、内面ナデ・指頭痕	砂・1mm 大の石英・1mm 大の長石・ 雲母・金雲母・赤色粒を含む	
図 41-2	0566	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	外面斜縄文・輪積痕、内面ナデ・輪積痕	砂・石英・雲母・赤色粒・0.5mm 大 の白色粒を含む	
図 41-3	0569-1	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/4	外面浅い斜縄文、内面ナデ・指頭痕	金雲母を多く含む、砂・赤色粒・白 色粒を含む	
図 41-4	0569-2	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面斜縄文、内面ナデ・指頭痕・輪積痕	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒 を含む	
図 41-5	0573-1	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/6	外面ナデ・斜縄文、内面ナデ	雲母・白色粒を多く含む、砂・赤色 粒を含む	
図 41-6	0675-1	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面斜縄文、内面ナデ	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 41-7	0675-6	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面縄文、内面輪積痕	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 41-8	0730-4	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	黒褐色 7.5YR2/2	外面浅い結節縄文、内面ケズリ後ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・ 赤色粒・白色粒を含む	
図 41-9	0675-2	SB07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面斜縄文・輪積痕、内面ナデ・指頭痕・輪積 痕	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒 を含む	
図 41-10	0675-7	SB07	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面指頭痕・輪積痕、内面ナデ・指頭痕	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 41-11	0572	SB07	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/6	外面指頭痕・輪積痕、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 41-12	0570-2	SB07	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面指頭痕・輪積痕、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 42-1	0608	SB08	縄文時代中期初頭	深鉢	口縁部	破片	良	(17.4)	-	-	極暗赤褐色 5YR2/3	口唇部竹管状工具による D 字文を付す隆線文の先 を溝状に突起状に張付、口縁部竹管状工具による 横位の沈線の下位に連続逆 U 字文、頸部に竹管 状工具による横位の沈線、胴部竹管状工具による 横位の楕円形沈線の中に棒状工具による D 型文	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 42-2	0610-2	SB08	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	(17.0)	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部横位の沈線、頸部竹管状工具による横位の 押引文、肩部横位の交互刺突文・押引文による区 画沈線・押引文による曲線の沈線、内面ナデ・輪 積痕	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 42-3	0703-1	SB08	縄文時代中期初頭	-	把手	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面竹管状工具による格子状の平行沈線、内面ナ デ	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒 を含む	五領ヶ台
図 42-4	0610-3	SB08	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面竹管状工具による縦位の平行沈線文の間を横 位の平行沈線で充填、内面ナデ・輪積痕	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・ 赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 42-5	0703-5	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面ナデ後半截竹管状工具による横位の粗い平行 沈線、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	
図 42-6	0703-2	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/4	外面半截竹管状工具による横位の平行沈線・縦位 と斜位の平行沈線に一部 C 字文、内面指頭痕・輪 積痕	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を 含む	五領ヶ台
図 42-7	0688・ 0703-4	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	外面頸部直下に稜・ナデ・竹管状工具による縦位 の沈線2条、内面ナデ	砂・長石・雲母・金雲母・赤色粒・ 白色粒を含む	
図 42-8	0703-6	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面ナデ・横位の隆線文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・1mm 大の赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	
図 42-9	0612-3	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/8	外面ケズリ後ナデ・横位の隆線文、内面ナデ・輪 積痕・指頭痕	砂・長石・雲母・金雲母・赤色粒・ 白色粒を含む	
図 42-10	0610-1	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面斜縄文・縦位の棒状張付文、内面ナデ・輪積 痕・指頭痕	砂・石英・長石・雲母・金雲母・赤 色粒・白色粒を含む	
図 42-11	0610-5	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	波状口縁、口唇部折返ナデ、外面下部に折返 ナデの開口部、口縁と開口部に沿って弧状の結節 浮線文	砂・石英・金雲母・赤色粒・白色粒 を含む	外来系
図 42-12	0703-8	SB08	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/3	外面ヘラミガキ、内面ミガキ・ナデ・輪積痕	砂・1mm 大の長石・金雲母・赤色粒・ 白色粒を含む	
図 43-1	0581	SB09	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	波状口縁、口唇部丸めて頂部に棒状工具によるキ ザミ・ドーナツ状張付、外面口縁部斜縄文・頸部 竹管状工具による横位の沈線に縄文を充填	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 43-2	0709	SB09	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	黒褐色 10YR3/2	外面棒状工具による縦位の沈線、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・1mm 大の 白色粒を含む	五領ヶ台
図 43-3	0705	SB09	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面斜縄文・ナデ、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・ 白色粒を含む	
図 44-1	0655	SB10	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	暗褐色 7.5YR3/3	波状口縁、口唇部面取り後ナデ・縦位の垂直・直 角に曲がる隆帯に竹管状工具によるキザミ、外面口 縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・ 口縁部文様帯を段で区画・胴部ナデ、内面口縁部 を肥厚させ稜・ナデ	砂・長石・石英・金雲母・赤色粒・白 色粒を含む	五領ヶ台

表 4-1 土器観察表

報告書 番号	遺物 番号	出土 地点	時代	器種	部位	残存 状況	焼成	法量 cm () は推定値			色調	調整	胎土	備考
								口径	器高	底径				
図 44-2	0582	SB10	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	黒褐色 5YR2/2	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・口縁部文線帯を段で区画・胴部ナデ・隆線文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-3	0579-1	SB10	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	口唇部面取り後ナデ・隅丸長方形の突起、外面口縁部に沿って竹管状工具による横位の沈線、逆三角形の陰刻頂点から縦位の沈線が伸びて形作る逆U字文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-4	0773-1	SB10	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/8	口唇部丸めてナデ、外面ナデ・竹管状工具による横位の押引文3条、内面口縁部を肥厚し稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-5	0852-3	SB10	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	波状口縁の頂部、外面渦巻き状の粘土紐を張付・口唇部肥厚・竹管状工具による縦位の押引文、内面渦巻き状の粘土紐を張付・竹管状工具による縦位の押引文・稜を境にナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・石英・赤色粒白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-6	0657-5	SB10	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面口縁部縦位のゾーメン状張付文・口縁-頸部境に横位の結節浮線文・肩部格子状ゾーメン状張付文に竹管状工具による横位の沈線3条・胴部竹管状工具による綾杉文、内面ナデ・頸部と肩部稜	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 44-7	0773-5	SB10	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	口唇部丸めてナデ、外面斜縄文・指頭による沈線、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 44-8	0669-1	SB10	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/4	外面竹管状工具による斜位の沈線文に竹管状工具による横位の沈線、内面ミガキ	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-9	0712-2	SB10	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	橙色 7.5YR6/6	外面横位の渦巻き状浮線にC字文・縦位の浮線にC字文、竹管状工具による直角の沈線、内面ナデ	砂・1mm 大の石英・金雲母・1mm 大の赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-10	0852-2	SB10	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面ミガキ・縦位の隆線文、内面ナデ	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 44-11	0712-3	SB10	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	橙色 7.5YR7/6	外面斜縄文、内面ナデ・輪積痕	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 44-12	0668	SB10	縄文時代中期初頭	-	底部	破片	良	-	-	(17.0)	にぶい黄褐色 10YR6/4	外面斜縄文・沈線文、内面ナデ・指頭痕、底面ナデ	砂・長石・金雲母・赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	五領ヶ台
図 44-13	0663	SB10	縄文時代中期初頭	-	底部	破片	良	-	-	(12.0)	明赤褐色 5YR5/6	胴部は内傾して立ち上がる、外面斜縄文・縦位の浮線にC字文、内面ナデ・指頭痕、底面ナデ	雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 44-14	0662	SB10	縄文時代中期初頭	-	底部	破片	良	-	-	(16.0)	明赤褐色 5YR5/6	胴部は内傾して立ち上がる、外面ミガキ・ナデ、内面ナデ・指頭痕、底面ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 46-1	0681-2	SB11	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	口唇部面取り後ナデ・竹管状工具による縦位の沈線×5の両脇に渦巻き状の粘土紐を張付、外面口縁部横位の隆線文・縦位の棒状張付文・横位の隆線文直下に竹管状工具による横位の押引文・三角形の隆線文の内側に竹管状工具による横位の押引文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 46-2	0858-2	SB11	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/8	外面竹管状工具による横位の沈線文・竹管状工具による縦位の沈線文、内面ナデ・輪積痕	砂・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 46-3	0681-1	SB11	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/3	外面斜縄文、内面ケズリ後ナデ	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 46-4	0858-1	SB11	縄文時代中期初頭 前期後半～	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面斜縄文、内面ナデ・輪積痕	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 49-1	0846-11	SB14	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/4	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・棒状工具による横位の沈線区画・棒状工具による縦位の沈線・棒状工具による二重円形文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	五領ヶ台
図 49-2	0770-4	SB14	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/4	波状口縁、口縁端部折返し内側に面取り後ナデ、外面横位の結節浮線文・稜に隆線文・横位の結節浮線文×2間に斜縄文、内面指頭痕・輪積痕	砂・長石・雲母・赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	外来系
図 49-3	0846-5	SB14	縄文時代前期後半	-	頸部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/4	外面竹管状工具による斜位の沈線・頸部に竹管状工具による横位の沈線・胴部ナデ・竹管状工具による斜位の沈線文、内面ナデ・ミガキ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 49-4	0846-2	SB14	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/4	外面竹管状工具による沈線の間を地文は斜縄文、内面ナデ・輪積痕	砂・長石・金雲母・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 49-5	0770-8	SB14	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面ナデ・縦位の結節浮線文、内面ナデ・輪積痕	砂・1mm 大の長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 49-6	0846-3	SB14	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/3	外面斜縄文・横位の結節浮線文、内面ナデ・輪積痕	砂・石英・長石・金雲母・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 49-7	0846-12	SB14	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面横位の隆線文に指頭による連続ヤザミ・斜縄文に竹管状工具による横位の沈線文、内面指頭痕・輪積痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 49-8	0846-7	SB14	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	頸部	破片	良	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面口縁部斜縄文・頸部は鋭く屈曲・胴部斜縄文・結節浮線文、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 49-9	0846-6	SB14	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面斜縄文、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 49-10	0770-1	SB14	縄文時代前期後半	深鉢	底部	破片	良	-	-	(16.0)	赤褐色 5YR4/8	外面斜縄文・ナデ・縦位の結節浮線文、内面指頭痕・輪積痕、底面ナデ	砂・1mm 大の長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 50-1	0639	HA01	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/4	口唇部面取り後ナデ、外面三角形の粘土紐による張付文・竹管状工具による押引文・ナデ、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	砂・小石・雲母・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 50-2	0548	HA01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面T字形の断面三角形の隆線文・ケズリ後ナデ、内面ナデ・輪積痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 50-3	0551	HA01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面ナデ・縦位の隆線文、内面ナデ	砂・雲母・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 50-4	0550-1	HA01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/3	外面竹管状工具による斜位の集合沈線、内面ナデ・輪積痕・指頭痕	砂・3mm 大の石英・長石・赤色粒・白色粒を含む、雲母を少量含む	
図 50-5	0550-2	HA01	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	外面斜縄文・ナデ、内面ナデ・輪積痕・指頭痕	砂・雲母・石英・長石・赤色粒・3mm 大の白色粒を含む	
図 55-1	0145-2	SD02	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/8	口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による綾杉状の集合沈線・竹管状工具による横位の浮線2条、内面ナデ・指頭痕	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 55-2	0139	SD02	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	口唇部面取り後ナデ・渦巻き状隆線文を張付、外面口縁部竹管状工具による横位の沈線・棒状工具による逆U字文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 55-3	0144	SD02	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	波状口縁、口唇部面取り後ナデ・頂部に円柱形の突起、外面口縁部頂部を中心に波状口縁に沿って交互刺突文・頂部より垂下曲線状の隆線文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・1mm 大の白色粒を含む	五領ヶ台
図 55-4	0145-1・0146	SD02	縄文時代中期初頭	浅鉢	口縁～底部	底部一周	良	(16.2)	(15.2)	8.4～8.6	明褐色 7.5YR5/6	頸部鋭く屈曲、口唇部面取り後竹管状工具による横位の押引文、外面口縁部ナデ・頸部竹管状工具による横位の押引文・胴部ナデ・交互刺突文・竹管状工具による横位の押引文による4単位2連続のU字文・胴部ナデ・棒状工具による縦位の平行沈線、底部付近ヘラケズリ後ナデ、内面ヨコミガキ・ナデ・輪積痕・指頭痕、底部ナデ	雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 55-5	0137	SD02	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	頸部強く屈曲する、口唇部・内外面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	

表 4-2 土器観察表

報告書 番号	遺物 番号	出土 地点	時代	器種	部位	残存 状況	焼成	法量 cm () は推定値			色調	調整	胎土	備考
								口径	器高	底径				
図 56-1	0188・ 0427-1	SD03	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部面取り後ナデ、外面横位の隆線文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	雲母を多く含む、砂・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 56-2	0188-5	SD03	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/4	口唇部面取り後ナデ、外面横位の隆線文×2・竹管状工具による横位の沈線・竹管状工具による押引文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 56-3	0426	SD03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部面取り後ナデ・棒状工具による沈線で逆U字文を隔刻、外面ケズリ後ナデ、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 56-4	0189-3・ 0638-1	SD03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/6	頸部は屈曲、外面頸部～胴部に渦巻状の隆線文・竹管状工具による横位の沈線文・胴部縦位の隆線文・竹管状工具による曲線の沈線、内面頸部に稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 56-5	0556	SD03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	外面竹管状工具による斜位・横位の沈線、内面ナデ	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 56-6	0427-3	SD03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR6/3	外面斜縄文・横位の結節浮線文、内面ナデ	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	外来系
図 56-7	0189・ 0555・ 0556	SD03	縄文時代前期後半	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面斜縄文に竹管状工具による不規則な横位の沈線、内面ケズリ後ナデ	1mm 大の石英・1mm 大の長石・雲母を多く含む、砂・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 56-8	0189-2・ 0638	SD03	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面結節縄文、内面ケズリ後ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 57-1	0477	SD04	縄文時代前期後半 ～中期初頭	小型深鉢	口縁 ～底部	1/3	良	(11.2)	8.8	(7.6)	にぶい赤褐色 7.5YR4/4	口唇部面取り後ナデ・縦位の短い隆線文、外面横位の隆線文・縦位の隆線文・ケズリ後ナデ、内面頸部に稜・ナデ、底部ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 59-1	0434	SD06	縄文時代中期初頭	-	口縁～ 突起部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	口唇部面取り後ナデ・表裏面に渦巻状の突起、内面口縁部棒状工具による縦位の沈線、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	砂・長石・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 59-2	0436	SD06	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	(37.0)	-	-	赤褐色 5YR4/8	口唇部面取り後ナデ、外面交互斜突文・竹管状工具による横位の区画沈線内をナデ、竹管状工具による縦位の沈線、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 59-3	0722	SD06	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	(25.6)	-	-	にぶい褐色 5YR7/3	口唇部結節浮線文、外面斜縄文・横位の結節浮線文×2、内面口縁部結節浮線文・口縁部肥厚し斜縄文・稜・胴部ナデ	砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む、金雲母を僅かに含む	外来系
図 59-4	0433-3	SD06	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部面取り後ナデ、外面無文・ケズリ後ナデ、内面ナデ・頸部に稜	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 59-5	0437・ 0443-1・ 0723	SD06	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面ナデ・縦位の隆帯文、内面ナデ・輪積痕・煤付着	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 59-6	0435	SD06	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面頸部に竹管状工具による横位の沈線・胴部二重の逆U字文・地文は斜縄文・その下部を竹管状工具による横位の沈線で区画・上端が短いY字を呈する縦位の隆線文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 59-7	0428	SD06	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面竹管状工具による縦位の押引文・竹管状工具による垂下曲線状の押引文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 59-8	0437	SD06	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面斜縄文、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 59-9	0441	SD06	縄文時代中期初頭	深鉢	底部	破片	良	-	-	(18.0)	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面竹管状工具による縦位の沈線・地文は斜縄文・縦位の隆線文、内面ナデ、底面ナデ	金雲母・白色粒を多く含む、砂・1mm 大の長石・赤色粒を含む	五領ヶ台
図 60-1	0615	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/4	外面ナデ・縦位の隆線文にC字文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-2	0720-1	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面ミガキ・縦位の隆線文、内面ケズリ後ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-3	0720-4	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	外面縦位の隆線文の両脇に竹管状工具による縦位の沈線・斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-4	0720-7	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面竹管状工具による縦位・斜縄文、内面ナデ・輪積痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-5	0720-2	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 10YR4/4	外面竹管状工具による山形の沈線文・竹管状工具による斜位の集合沈線文	雲母を多く含む、砂・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-6	0720-3	SD07	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面斜縄文・竹管状工具による縦位の沈線、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 60-7	0720-5	SD07	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面竹管状工具による縦位・曲線の沈線・斜縄文、内面ナデ・輪積痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 60-8	0614・ 0720-6	SD07	縄文時代前期後半	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面斜縄文・竹管状工具による横位の沈線文、内面ケズリ後ナデ・輪積痕	砂・雲母・石英・長石・赤色粒・3mm 大の白色粒を含む	諸磯
図 61-1	0444-4	包含層	縄文時代早期	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	表面絡状体圧痕文	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 61-2	0291	包含層	縄文時代前期後半	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による綾杉状の集合沈線・横位の集合沈線・円形張付文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-3	0785	包含層	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/3	外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・斜縄文・粗いナデ、内面ケズリ・粗いナデ	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-4	0294・ 0296	包含層	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 5YR5/6	外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・斜縄文、内面ケズリ後ナデ	砂・石英・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-54	0293	包含層	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面粗いナデ・竹管状工具による不規則な横位の沈線、内面ケズリ後ナデ	金雲母・赤色粒・白色粒を多く含む、砂・長石を含む	諸磯
図 61-6	0498	包含層	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面粗いナデ・竹管状工具による不規則な横位の沈線、内面稜・粗いナデ	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-7	0349	包含層	縄文時代前期後半	深鉢	底部	底部一周	良	-	-	12.0	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・ケズリ後ナデ、内面ナデ・指頭痕・輪積痕、底面ナデ	雲母・白色粒を多く含む、砂・長石・赤色粒を含む	諸磯
図 61-8	0231	包含層	縄文時代前期後半	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	外面隆線文を竹管状工具による押引文で囲む区画文・ナデ、内面口縁部を肥厚し稜・ミガキ・ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-9	0103	包含層	縄文時代前期後半	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面斜縄文・縦位の結節浮線文、内面ナデ	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	諸磯
図 61-10	0466	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/8	波状口縁の頂部、突起の張付痕、口唇部丸めてナデ・竹管状工具によるC字文、外面口縁に沿い竹管状工具による区画内に三角形の刺突と縦位の細かい集合沈線で充填・突起の張付痕下部に三角形の連続刺突・口縁文様帯区画に竹管状工具による横位の沈線と並行するC字文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 61-11	0065	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部逆三角形の張付文・斜縄文・竹管状工具による横位の沈線・竹管状工具による渦巻状・長方形の沈線・地文は縄文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台
図 61-12	0473	包含層	縄文時代中期初頭	深鉢	口縁部	破片	良	(33.6)	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部斜縄文・屈曲部に曲線の隆線文・胴部竹管状工具による横位の沈線×3・竹管状工具による三叉状の沈線中央部に三角形の刺突・地文は斜縄文、内面口縁部を肥厚させ稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五領ヶ台

表 4-3 土器観察表

報告書 番号	遺物 番号	出土 地点	時代	器種	部位	残存 状況	焼成	法量 cm () は推定値			色調	調整	胎土	備考
								口径	器高	底径				
図 61-13	0050・ 0223・ 0224	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	(34.0)	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	口唇部面取り後ナデ・桶状突起の張付痕、外面口縁部に沿って交互刺突文・竹管状工具による角ばった逆 U 字文・縦位の沈線 指頭による浅く広い横位の沈線、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-14	0169	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部に沿って交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・竹管状工具による縦位の沈線・棒状工具による Y 字状沈線・横位の山形沈線、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母・白色粒を多く含む、砂・長石・赤色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-15	0269	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部に沿って交互刺突文・竹管状工具による横位の押引文、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-16	0307	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	暗赤褐色 5YR3/3	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部に沿って竹管状工具による横位沈線内に竹管状工具による連続刺突・竹管状工具による逆 U 字の沈線・長方形の沈線、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-17	0176	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/4	口唇部頂部を尖らせ面取り・外面側連続キザミ、外面押引文による区画内に下頂部から棒状工具による沈線が垂下する逆三角形の陰刻、内面口縁部を肥厚させゆるく様・ナデ	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-18	0056・ 0225・ 0227・ 0230・ 0234	包含層	縄文時代中期初頭	-	口縁部	破片	良	(26.0)	-	-	にぶい、橙色 7.5YR6/4	口唇部突起の上部に三叉状の陰刻・面取り後ナデ・棒状工具による沈線で逆 U 字文を陽刻、外面ケズリ後ナデ・口縁部に稜、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-19	0078	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による横位・隅丸長方形の沈線、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-20	0080	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/8	外面竹管状工具による横位・隅丸長方形・曲線の沈線、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-21	0116	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	外面竹管状工具による山形・縦位・横位の沈線、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-22	0325	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/3	外面竹管状工具による綾形・横位の集合沈線、内面稜・ケズリ後ナデ	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-23	0444-1	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面竹管状工具による横位・縦位・山形の集合沈線、内面ナデ	砂・長石・雲母・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-24	0785	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	外面棒状工具による縦位の沈線・稜・曲線の隆線、内面ナデ・稜	金雲母・赤色粒・白色粒を多く含む、砂・長石を含む	五頤ヶ台
図 61-25	0081	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面棒状工具による円形文を竹管状工具による三叉の押引で区画・竹管状工具による長方形の押引文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-26	0196	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面棒状工具による逆 U 字文を地文は斜縄文・竹管状工具による横位の沈線、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-27	0183	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による沈線の内部を地文は斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-28	0203	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による縦位・波状の沈線区画内を地文は斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-29	0211	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による逆 U 字の沈線区画内を地文は斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-30	0444-2	包含層	縄文時代中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/8	外面竹管状工具による逆 U 字・横位の沈線区画内を地文は斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-31	0501	包含層	縄文時代中期初頭	深鉢	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	外面縦位の隆線文・竹管状工具による縦位・U 字の区画沈線内を地文は斜縄文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-32	0287	包含層	縄文時代中期初頭	-	底部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/4	外面棒状工具による縦位の沈線・斜縄文、内面ナデ・指頭痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 61-33	0333	包含層	縄文時代中期初頭	-	突起部	破片	良	-	-	-	にぶい、橙色 7.5YR6/4	頂部二重の逆三角形、外面に竹管状工具による曲線の押引文	金雲母・白色粒を多く含む、砂・長石・赤色粒を含む	五頤ヶ台
図 62-34	0465-2	包含層	縄文時代中期初頭	-	張付文	破片	良	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	フジツボ形、端部に竹管状工具による横位の沈線、外面極細の竹管状工具による集合沈線・三角形の刺突、内面指頭痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	五頤ヶ台
図 62-35	0529-2	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	外面ナデ・横位の隆線文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-36	0233	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/4	外面ナデ・横位の隆線文、内面ナデ	砂・長石・赤色粒・白色粒を含む、雲母を僅かに含む	
図 62-37	0504-2	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面ナデ・曲線の隆線文、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-38	0095	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	外面竹管状工具による曲線集合沈線、内面ナデ・輪積痕・指頭痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-40	0108	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	外面竹管状工具による曲線の沈線・ケズリ後ナデ、内面ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-41	0204	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 7.5YR5/6	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部斜縄文・竹管状工具による横位の沈線、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-42	0228	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部斜縄文・竹管状工具による横位の沈線、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-43	0292	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/4	口縁部はくの字に内曲、口唇部面取り後粗いナデ、外面斜縄文、内面ケズリ後ナデ・指頭痕	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-44	0350	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	赤褐色 5YR4/6	口縁部はくの字に内曲、口唇部面取り後粗いナデ、外面斜縄文、内面ケズリ後ナデ・指頭痕	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-45	0352	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/4	波状口縁、口唇部面取り後ナデ、外面ケズリ後ナデ、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ、口縁下部に穿孔	金雲母を多く含む、砂・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-46	0237	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/4	口唇部面取り後ナデ、外面ケズリ後ナデ、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ、口縁下部に穿孔	金雲母を多く含む、砂・石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-47	0056	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部丸めてナデ、外面ケズリ後ナデ、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	金雲母・白色粒を多く含む、砂・長石・赤色粒を含む	
図 62-48	0351	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	深鉢	底部	底部一周	良	-	-	(18.6)	褐色 7.5YR6/6	外面ケズリ後ナデ、内面ナデ・輪積痕・指頭痕、底面ナデ	金雲母・白色粒を多く含む、砂・長石・赤色粒を含む	
図 62-49	0298	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR6/3	口唇部縄目と竹管状工具によるキザミ、外面縄文の地に緩い曲線の山形状隆線に C 字文、内面口縁部を肥厚させ斜縄文・稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・径 3mm の小石・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-50	0522	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	褐色 5YR6/6	口唇部尖らせてナデ、外面ナデ・横位の棒状張付文、内面ナデ・稜	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-51	0106	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	口唇部丸めてナデ、外面斜縄文・横位の棒状張付文×2、内面口縁部を肥厚させ様・ナデ	雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-52	0331	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	口縁部	破片	良	-	-	-	明赤褐色 5YR5/6	口唇部面取り後ナデ、外面口縁部爪型の連続キザミ、内面口縁部に稜・ナデ	金雲母を多く含む、砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-53	0507	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	暗褐色 7.5YR3/3	外面ナデ・横位の C 字文、内面ナデ・指頭痕	砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-54	0502	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	-	胴部	破片	良	-	-	-	褐色 7.5YR4/4	外面斜縄文・棒状工具による横位の沈線・縦位のキザミ・竹管状工具による横位の沈線・縦横の C 字文、内面ナデ	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	

表 4-4 土器観察表

報告書 番号	遺物 番号	出土 地点	時代	器種	部位	残存 状況	焼成	法量 cm () は推定値			色調	調整	胎土	備考
								口径	器高	底径				
図 62-55	0444-3	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	－	胴部	破片	良	－	－	－	にぶい褐色 7.5YR6/3	外面竹管状・棒状工具による横位・曲線の沈線・斜縄文、内面ナデ・指頭痕	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-56	0222	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	－	胴部	破片	良	－	－	－	にぶい褐色 7.5YR7/4	外面竹管状工具による横位・斜位の粗い集合沈線・横位の隆線文、内面ナデ	砂・径 3mm の小石・長石・赤色粒・白色粒を含む。雲母を僅かに含む	
図 62-57	0260-1	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	－	胴部	破片	良	－	－	－	にぶい褐色 7.5YR7/3	外面竹管状工具による横位・長方形の区画沈線内を棒状工具による縦位の沈線・竹管状工具による縦の沈線、縄文で充填、内面ナデ	砂・金雲母・赤色粒・白色粒を含む	
図 62-58	0318	包含層	縄文時代前期後半 ～中期初頭	土製円盤	－	完形	良	縦 3.0	横 3.0	－	にぶい褐色 7.5YR7/3	内外面ナデ	金雲母を多く含む。砂・長石・赤色粒・白色粒を含む	

表 4-5 土器観察表

報告書 番号	遺物番号	出土 地点	時代	器種	残存 状況	石材	法量 () は現況値			
							最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量
図 36-03	0372	SB01	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	8.8	6.0	2.7	186g
図 36-04	0374	SB01	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	14.2	7.6	4.7	822g
図 36-05	0375	SS03	縄文時代	磨・蔽石	完形	砂岩	5.0	5.8	3.7	107g
図 37-03	0345	SB02	縄文時代	スクレイパー	剥片	ホルンフェルス	7.1	4.4	0.8	(27g)
図 37-04	0445	SB02	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	7.6	5.5	2.7	139g
図 37-05	0446	SB02	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	7.9	10.6	4.5	525g
図 37-06	SB02-DS01/0448	SB02	縄文時代	台石	一部欠損	安山岩	37.5	45.8	18.5	29.6kg
図 38-05	SB03-DS01/0604	SB03	縄文時代	台石	完形	泥岩	30.5	26.1	13.1	15.2kg
図 39-02	SB04-DS01/0606	SB04	縄文時代	台石	一部欠損	安山岩	18.5	27.5	10.0	5.0kg
図 40-07	0599	SB05	縄文時代	打製石斧	完形	頁岩	9.5	5.5	2.3	110g
図 40-08	0652	SB05	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	6.5	4.8	3.3	143g
図 40-09	0539	SB05	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	6.6	5.9	3.4	179g
図 40-10	0601	SB05	縄文時代	磨・蔽石	完形	泥岩	9.3	7.5	2.7	282g
図 40-11	0476	SB05	縄文時代	石皿	完形	泥岩	24.1	30.2	6.8	6.6kg
図 40-12	0475	SB05	縄文時代	石皿	完形	安山岩	28.8	18.0	11.8	10.6kg
図 41-06	0729・0741	SB07	縄文時代	打製石斧	一部欠損	ホルンフェルス	9.8	(4.8)	2.7	(127g)
図 41-07	0603	SB05	縄文時代	磨・蔽石	完形	輝石安山岩	10.8	7.8	4.6	522g
図 41-08	0733	SB07	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	7.8	5.6	3.9	181g
図 41-09	SB07-DS01/0767	SB07	縄文時代	石皿	完形	安山岩	45.3	51.5	18.2	63.1kg
図 42-13	0683	SB08	縄文時代	打製石斧	1/2	珪質頁岩	(5.8)	5.8	1.3	(59g)
図 42-14	0690	SB08	縄文時代	打製石斧	一部欠損	泥岩	(9.0)	5.6	1.8	(80g)
図 42-15	0732	SB08	縄文時代	打製石斧	一部欠損	泥岩	(7.6)	4.7	1.2	(44g)
図 42-16	0574	SB08	縄文時代	石皿	完形	安山岩	17.8	15.5	7.0	8.3kg
図 43-04	0593	SB09	縄文時代	打製石斧	完形	安山岩	9.0	5.2	2.3	116g
図 43-05	0706	SB09	縄文時代	スタンプ形石器	完形	砂岩	6.7	6.1	2.9	148g
図 43-06	0591	SB09	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	15.7	8.2	6.7	1251g
図 43-07	0590	SB09	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	12.1	10.4	5.8	949g
図 44-15	0671	SB10	縄文時代	打製石斧	一部欠損	安山岩	(8.7)	6.1	1.5	(73g)
図 44-16	0766	SB10	縄文時代	打製石斧	一部欠損	頁岩	(11.2)	4.6	1.7	(116g)
図 44-17	0851-1	SB10	縄文時代	石篋	完形	ホルンフェルス	10.7	4.2	2.8	142g
図 44-18	0851-2	SB10	縄文時代	スクレイパー	一部欠損	ホルンフェルス	(6.9)	2.9	0.7	(14g)
図 44-19	0763	SB10	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	砂岩	8.2	6.4	4.2	273g
図 44-20	0762	SB10	縄文時代	磨・蔽石	完形	輝石安山岩	11.0	7.9	4.2	421g
図 44-21	0764	SB10	縄文時代	磨・蔽石	完形	泥岩	6.9	5.5	2.7	133g
図 45-22	0756	SB10	縄文時代	石皿	完形	泥岩	33.1	44.1	9.2	27.1kg
図 46-05	0632	SB11	縄文時代	石斧	一部欠損	ホルンフェルス	(6.5)	10.3	2.6	(210g)
図 46-06	0681-3	SB11	縄文時代	磨・蔽石	完形	泥岩	6.4	6.0	3.2	158g
図 47-01	0768	SB12	縄文時代	石皿	完形 (再利用)	安山岩	31.5	18.4	8.5	8.7kg
図 48-01	0746	SB13	縄文時代	石鏃	左脚欠損	黒曜石	1.6	1.4	0.3	(0.5g)
図 48-02	0754	SB13	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	7.8	7.0	4.0	319g
図 49-11	0807	SB14	縄文時代	石鏃	脚部欠損	黒曜石	(2.5)	(2.0)	0.35	0.91g
図 49-12	0827	SB14	縄文時代	石鏃	完形	泥岩	6.2	6.0	1.6	147g
図 49-13	0853-1	SB14	縄文時代	スクレイパー	欠損	安山岩	(2.5)	(3.3)	0.5	5.16g
図 49-14	0853-2	SB14	縄文時代	スクレイパー	欠損	チャート	(2.5)	(3.3)	0.5	5.16g
図 49-15	0930	SB14	縄文時代	スタンプ形石器	完形	安山岩	4.2	7.6	4.7	188g
図 49-16	0779	SB14	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	12.8	8.0	4.9	621g
図 49-17	0818	SB14	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	泥岩	12.0	9.3	5.8	852g
図 49-18	0817	SB14	縄文時代	磨・蔽石	完形	泥岩	11.9	9.2	7.5	600g
図 50-06	0547	HA01	縄文時代	石鏃	完形	安山岩	4.7	4.9	1.2	36g
図 50-07	0553	HA01	縄文時代	石匙	一部欠損	ホルンフェルス	(7.2)	3.1	1.0	(22.5g)
図 50-09	0679	HA01	縄文時代	スクレイパー	一部欠損	ホルンフェルス	(10.7)	4.1	1.5	(65g)
図 50-08	0678	HA01	縄文時代	打製石斧	一部欠損	安山岩	(11.9)	(7.5)	2.6	(241g)
図 50-10	0640	HA01	縄文時代	スタンプ形石器	完形	安山岩	5.8	9.3	3.3	295g
図 51-01	0644	HA03	縄文時代	打製石斧	一部欠損	安山岩	17.7	9.3	2.1	(450g)
図 51-02	0645	HA03	縄文時代	スクレイパー	一部欠損	安山岩	(4.5)	2.5	1.2	(13g)
図 51-03	0646	HA03	縄文時代	スクレイパー	一部欠損	安山岩	4.3	(2.8)	1.0	(12g)
図 51-04	0647	HA03	縄文時代	スクレイパー	一部欠損	安山岩	4.5	2.8	0.6	(9g)
図 51-05	0643	HA03	縄文時代	石皿	完形	泥岩	20.7	17.8	7.5	3.5kg
図 52-01	0378	SS01	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	泥岩	6.7	4.6	2.8	109g
図 52-02	0381	SS01	縄文時代	磨・蔽石	完形	安山岩	8.7	6.9	3.4	277g
図 53-01	0383	SS02	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	11.4	4.9	6.8	781g
図 54-01	0384	SS03	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	泥岩	9.5	7.5	5.6	554g
図 54-02	0388	SS03	縄文時代	磨・蔽石	完形 (再利用)	安山岩	11.5	9.5	4.4	632g
図 54-03	0387	SS03	縄文時代	磨・蔽石	完形	砂岩	10.4	7.7	5.1	570g
図 55-06	0152	SD02	縄文時代	打製石斧	一部欠損	頁岩	(10.0)	(6.9)	2.4	(153g)
図 56-09	0190	SD03	縄文時代	打製石斧	一部欠損	安山岩	(7.4)	(8.3)	1.9	(187g)
図 56-10	188-3	SD03	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	7.9	5.2	5.8	(278g)
図 57-02	0480	SD04	縄文時代	打製石斧	完形 (風化)	ホルンフェルス	8.4	3.7	1.9	52g
図 57-03	0481	SD04	縄文時代	打製石斧	一部欠損	ホルンフェルス	(9.4)	(3.6)	1.6	(55g)
図 58-01	0750	SD05	縄文時代	スクレイパー	完形	ホルンフェルス	5.8	5.6	1.5	50g
図 59-10	0676-2	SD06	縄文時代	石匙	完形	黒曜石	4.6	4.5	1.35	2.22g
図 59-11	0431	SD06	縄文時代	磨・蔽・凹石	完形	安山岩	6.0	4.9	3.4	101g

表 5-1 石器観察表

報告書 番号	遺物番号	出土 地点	時代	器種	残存 状況	石材	法量 () は現況値			
							最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量
図 59-12	0439	SD06	縄文時代	磨・敲石	完形	安山岩	11.5	9.5	5.2	688g
図 59-13	0726	SD06	縄文時代	磨・敲石	完形	安山岩	11.1	9.1	6.3	812g
図 59-14	0430	SD06	縄文時代	磨・敲石	完形	安山岩	6.4	4.6	3.6	160g
図 60-09	0677	SD07	縄文時代	磨・敲石	完形	安山岩	15.0	(8.3)	5.0	890g
図 62-58	0656-1	包含層	縄文時代	石鏃	一部欠損	黒曜石	(1.4)	(1.2)	0.3	(0.38g)
図 62-59	0785	包含層	縄文時代	石鏃	一部欠損	黒曜石	(2.4)	(2.0)	0.7	(2.66g)
図 62-60	0087	包含層	縄文時代	石鏃	完形	輝石安山岩	5.4	4.8	1.1	40g
図 62-61	0043	包含層	縄文時代	石匙	一部欠損	ホルンフェルス	(5.3)	(8.2)	1.4	(34g)
図 62-62	0272	包含層	縄文時代	スクレイパー	完形	ホルンフェルス	4.3	3.6	0.9	13g
図 62-63	0332	包含層	縄文時代	打製石斧	一部欠損	頁岩	12.5	6.8	2.3	178g
図 62-64	0858	包含層	縄文時代	打製石斧	完形	安山岩	8.5	4.1	0.9	39g
図 63-65	0469	包含層	縄文時代	打製石斧	完形	安山岩	14.0	9.2	3.8	440g
図 63-66	0366	包含層	縄文時代	磨・敲・凹石	完形	安山岩	11.4	9.3	5.8	648g
図 63-67	0055	包含層	縄文時代	磨・敲・凹石	完形	泥岩	9.0	7.7	3.2	280g
図 63-68	0376	包含層	縄文時代	石皿	完形	安山岩	22.2	22.4	9.4	5.0kg
図 63-69	0389	包含層	縄文時代	石皿	完形	安山岩	28.3	24.6	13.0	11.2kg
図 63-70	0366	包含層	不明	砥石	完形	砂岩	19.4	5.7	2.9	560g

表 5-2 石器観察表

VI 自然科学分析編

蛍光X線による胎土分析

はじめに

検出された1～11・14号住居跡から出土した縄文土器試料計65点について、蛍光X線分析装置による胎土を分析し、その分析から得られた各元素の強度（cps）値によって散布図を作成し、胎土の分類と周辺を含む他の遺跡から出土した土器試料の元素の強度（cps）値によって、胎土の類似比較を行った。

分析手法

分析装置

島津製作所エネルギー分散型 EDX700

オリンパスエネルギー分散型 pXFR DP2000

方法

分析対象の遺物は水洗い後に乾燥させ、さらに分析時には刷毛ブラシ等で汚れ・付着物等を丁寧に落とした。

分析面を削る等の無い完全非破壊で大気中で行った。計測時間はEDX700は300秒、DP2000は120秒で行っている。

分析結果

蛍光X線分析によって得られた各元素の強度（cps）値のうち、K・Ca・Rb・Sr・Fe・Zrの6種類の元素の強度（cps）値を分析対象値として用いた。

そしてK/Ca元素の強度（cps）値による散布図、Rb/Sr元素の強度（cps）値による散布図、Fe/Zr元素の強度（cps）値による3枚の散布図を作業仮説として作成した。

その散布図による散布の特徴から、分類とさらにその細分類を試みた。

蛍光X線分析による胎土分類の特徴（図 64 ～ 66）

Ca/Kの値から見る分析

全ての土器試料は、まずCa元素の強度（cps）値の高い値から、暫定的に有効とみなされる作業仮説として、以下の分類を試みた。

A群：Ca元素の強度（cps）値 約300～450（cps）

B群：Ca元素の強度（cps）値 約250～350（cps）

C群：Ca元素の強度（cps）値 約160～250（cps）

D群：Ca元素の強度（cps）値 約70～160（cps）

E群：Ca元素の強度（cps）値 約70～80（cps）

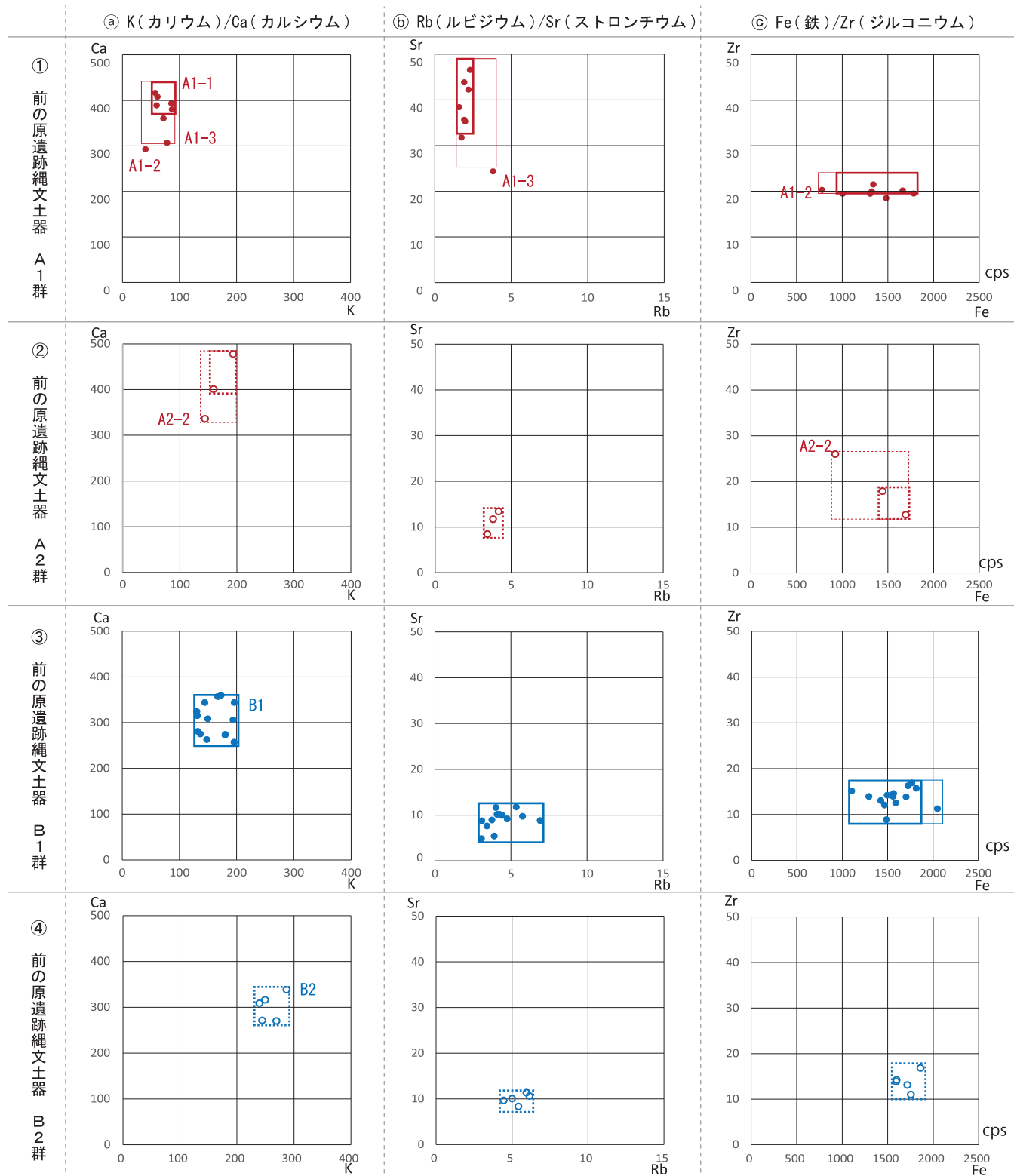


図 64 前の原遺跡出土遺物 胎土分類①

さらに、各群を K 元素の強度 (cps) 値によって以下に細分類を試みた。

A群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 64)

A1群 約 40 ~ 100 (cps) 8点 A2群 約 140 ~ 200 (cps) 3点

B群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 64)

B1群 約 130 ~ 200 (cps) 14点 B2群 約 230 ~ 300 (cps) 5点

C群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 65)

C1群 約 100 ~ 200 (cps) 9点 C2群 約 220 ~ 320 (cps) 4点 C3群 約 50 ~ 100 (cps) 2点

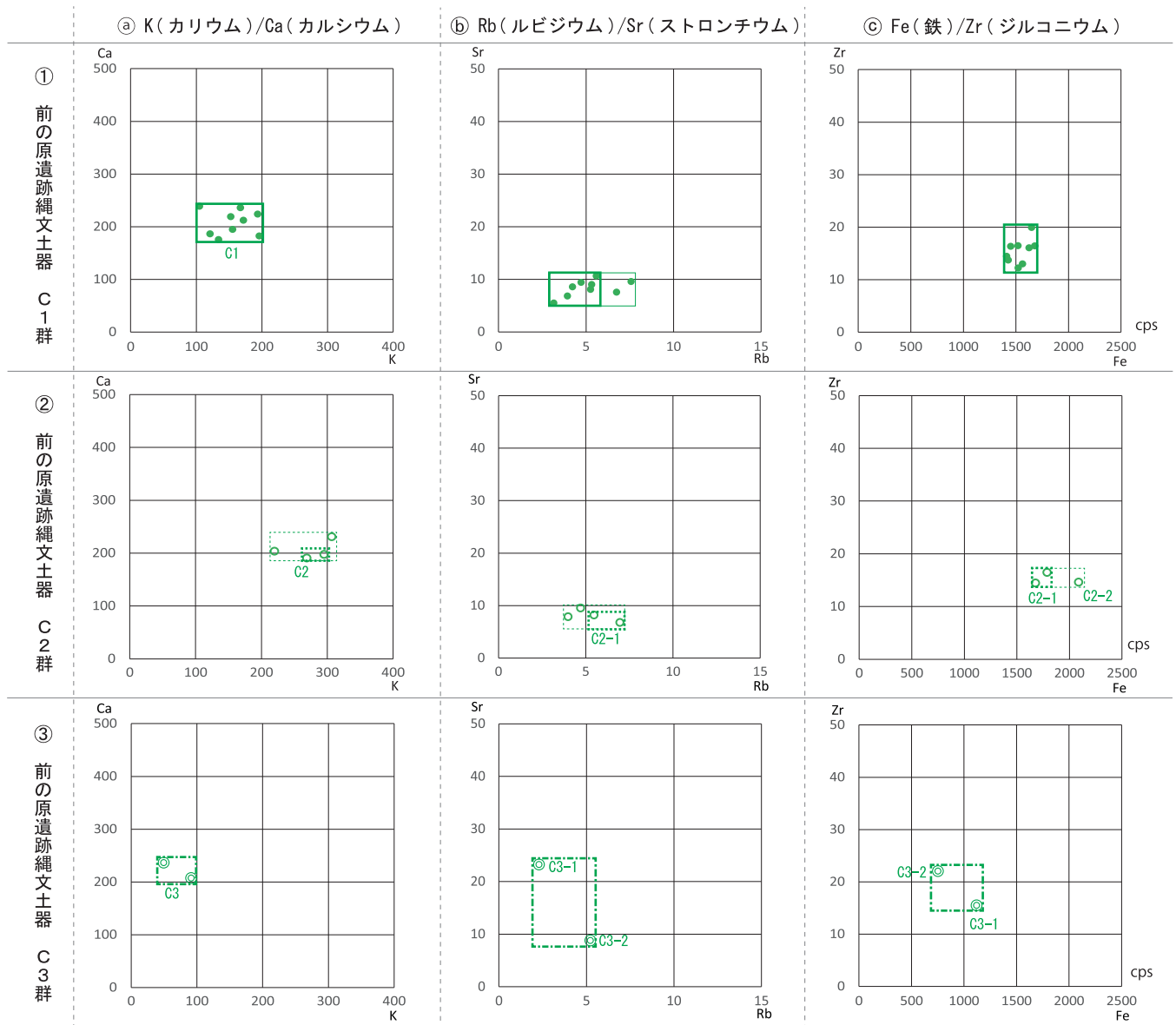


図 65 前の原遺跡出土遺物 胎土分類②

D群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 66)

D1群 約 110 ~ 170 (cps) 10 点 D2群 約 160 ~ 230 (cps) 4 点 D3群 約 150 ~ 270 (cps) 4 点

E群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 66)

E1群 約 120 ~ 150 (cps) 2 点

この分類で、Ca 元素の強度 (cps) 値を分類の基礎値として第一に使用した理由を以下に述べる。

自然界では、第四紀火山周辺の火山灰に含まれる炭酸カルシウム (CaCO_3) が堆積する土壌が流れ込む河川で、Ca 元素の強度 (cps) 値が高いことが知られている。日本列島の中央部に位置する大地溝帯であるフォッサマグナ地域の活火山群では、草津白根山、八ヶ岳火山群、富士山などの火山 (尙アーバンクボタ編集室 1994) が並んでいることから、その周辺地域では Ca 元素の強度 (cps) 値が高い。そのため静岡県東部から神奈川県西部と、山梨県から長野県南部に流れる河川には、特に Ca 元素の強度 (cps) 値が高い地点がある。例えば、富士山東側山麓の御殿場市を水源とする酒匂川中流域では、特に Ca 元素の強度 (cps) 値が高いことから、神奈川県足柄上郡松田町松田庶子に所在する「からさわ古窯」周辺の胎土 (粘土) を使用して焼成したと推測される瓦・弥生土器・かわらけでは、Ca 元素の強度 (cps) 値が 400 ~ 600 (cps) と高い値を示す。

次に K 元素であるが、K 元素は自然界では Ca 元素とは正反対の分布を示しており、フォッサマグナ地域の第四紀火山周辺の火山灰が堆積する土壌が流れ込む河川では K 元素の強度 (cps) 値が低いことが知られている。そのため静岡県東部から神奈川県西部と山梨県から長野県南部に流れる河川では、特に K 元素の強度 (cps) 値が低い。その中で神奈川県と東京都の境に流れる多摩川流域では、K 元素の強度 (cps) 値がやや高い分布地域がスポット的にみられる。さらに静岡県静岡市域を境 (フォッサマグナ)

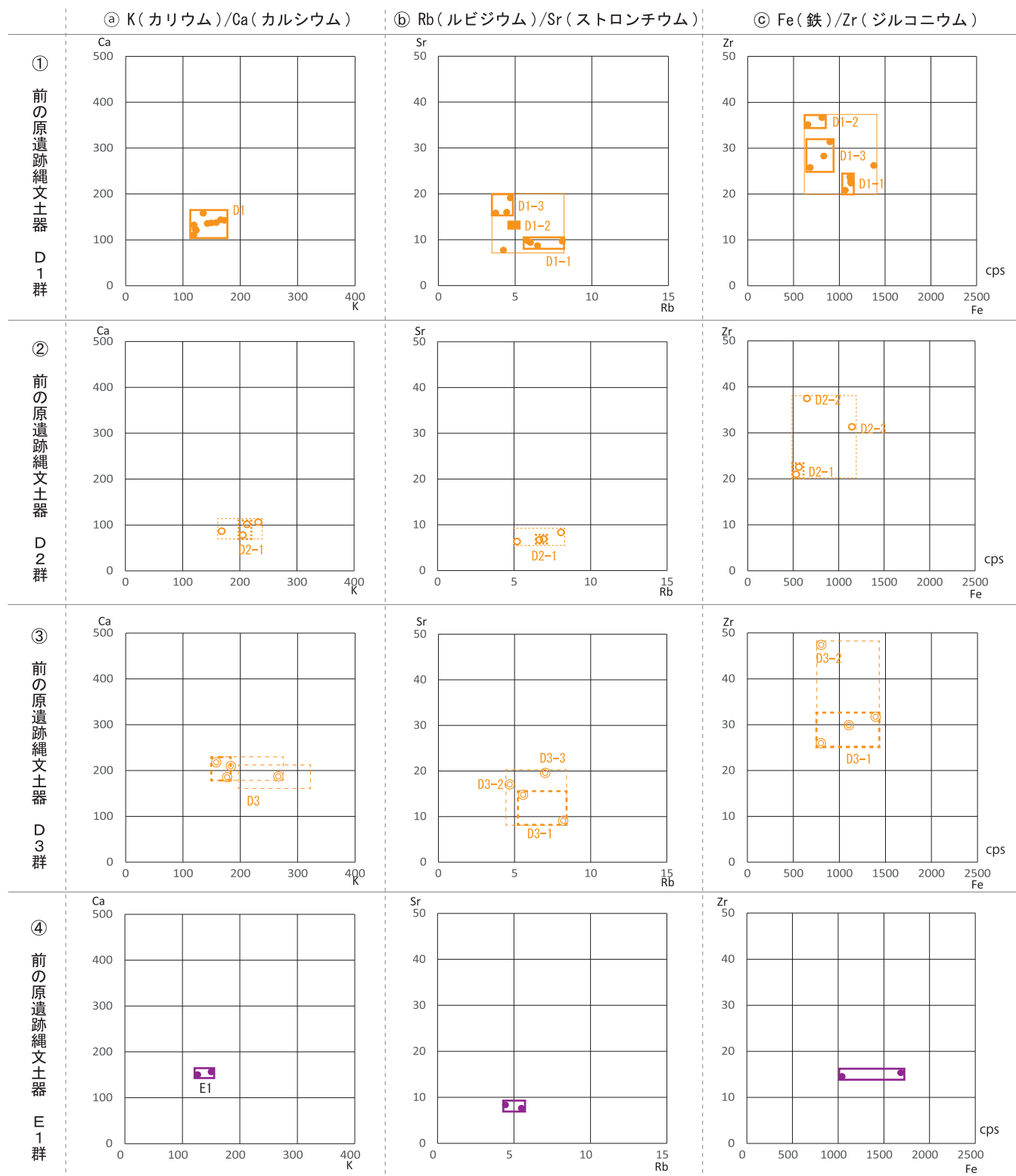


図 66 前の原遺跡出土遺物 胎土分類③

に、その西側から愛知県・岐阜県にかけては、連続して K 元素の強度 (cps) 値がやや高い分布地域が続いてみられる。

Rb/Sr の値から見る分類

Rb 元素の強度 (cps) 値 / Sr 元素の強度 (cps) 値の散布図からは、Sr 元素の強度 (cps) 値が、A1群のみが約 25 (主に 33) ~ 50 (cps) と極めて高い散布を示す。D1群が約 7 ~ 20 (cps)、D3群が約 8 ~ 20 (cps) とやや高い散布を示し、他にC3群の 1 点が約 23 (cps) とやや高い散布を示す以外は、約 5 ~ 15 (cps) の範囲に散布している。

Rb 元素の強度 (cps) 値は、Sr 元素の強度 (cps) 値と同様に、A1群のみが約 2 ~ 5 (cps) とやや低い散布を示す以外は約 3 ~ 7 (cps) の範囲に散布している。

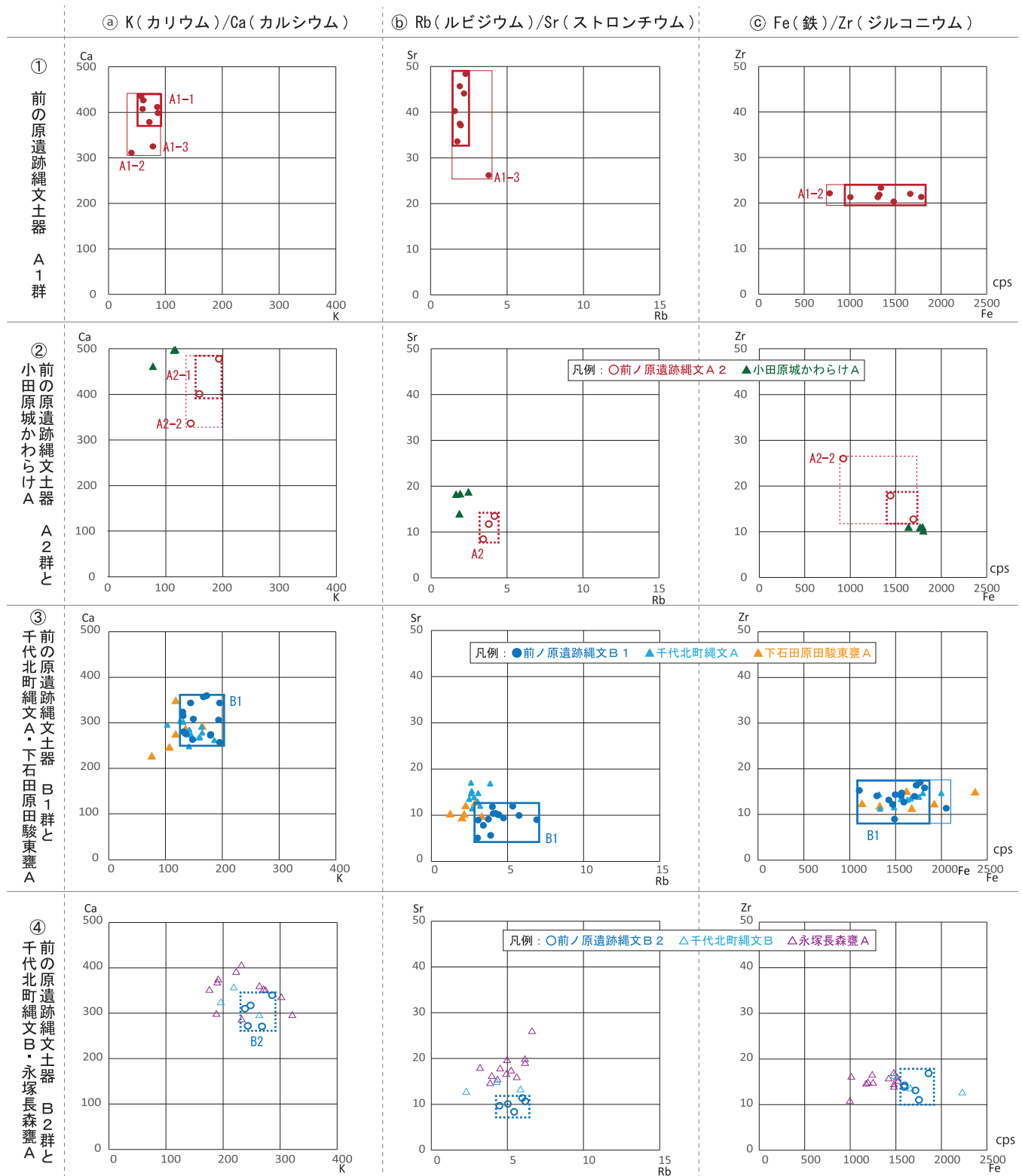


図 67 前の原遺跡出土遺物 胎土比較①

自然界では、Sr 元素は、周期表により Ca 元素と同じアルカリ土類金属に分類され、化学的性質が非常に似ていることもあり、Ca 元素と分布範囲が重複していることが多くある。フォッサマグナ地域の Ca 元素の強度 (cps) 値が高い地域と同じ範囲の、静岡県東部から神奈川県西部、特に山梨県北部から長野県南部に流れる河川には、同様に特に Sr 元素の強度 (cps) 値が高い地点が分布する。

Fe/Zr の値から見る分類

Fe 元素の強度 (cps) 値 / Zr 元素の強度 (cps) 値の散布図から、Zr 元素の強度 (cps) 値は、A 群 : Zr 元素の強度 (cps) 値 約 12 ~ 23 (cps)、B 群 : Zr 元素の強度 (cps) 値 約 18 ~ 27 (cps)、C 群 : Zr 元素の強度 (cps) 値 約 12 ~ 22 (cps)、D 群 :

たかわらけ（小田原城から出土したかわらけは以下小田原かわらけ）A群は、K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr のどの値も隣接して散布した（図 67 ②）。小田原かわらけA群は小田原北条時代の 16 世紀中葉に作製された「小田原かわらけ」と称される小田原北条時代のかわらけを示す独自のかわらけで、小田原北条氏の滅亡と同時に作製されなくなったもので、酒匂川中流域の松田町内のからさわ古窯周辺の胎土（粘土）で作製されたと推定される。

縄文土器試料B群（図 67）

縄文土器試料B群は Ca 元素の強度（cps）値がやや高いことを特徴とする群である。K 元素の強度（cps）値の低いB1群と、高いB2群に分かれた。

B1群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、まず小田原市千代に所在する千代北町遺跡から出土した縄文時代後期初頭の磨消縄文土器（主に称名寺式）、次に沼津市大岡に所在する下石田原田遺跡から出土した奈良・平安時代の甕（駿東甕）形土器である（図 67 ③）。

称名寺式土器が出土する遺跡の分布は、静岡県東部にややまとまった分布がみられる以外は、関東地方が分布の中心である。静岡県東部の愛鷹山麓周辺と伊豆半島の中伊豆や東伊豆は、縄文時代中期末葉から後期にかけての敷石住居が検出される遺跡が集中する分布の中心の一つである（山本輝久 2002・2010）。

B2群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、まず小田原市千代に所在する千代北町遺跡から出土した縄文時代後期初頭の磨消縄文土器（主に称名寺式）B2群、また小田原市永塚に所在する永塚長森遺跡土師器甕A群である（図 67 ④）。

神奈川県西部の酒匂川中・下流域の山北町・松田町・大井町・南足柄市・小田原市においても敷石住居が検出される遺跡が集中して分布している（山本輝久 2002・2010）。

縄文土器試料C群（図 68）

縄文土器試料C群は、Ca 元素の強度（cps）値が約 200（cps）の中央値であることを特徴とする群である。K 元素の強度（cps）値の中央をC1群、より高い散布をC2群、最も低い散布をC3群と分けた。

C1群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、相模川左（東）岸の下流域に位置する、高座郡寒川町宮山所在の宮山台畑東遺跡から出土した、古墳時代後期の相武の甕A（ヘラケズリ整形甕）である（図 68 ①）。

C2群は、宮山台畑東遺跡から出土した古墳時代後期の相武の甕B（ヘラケズリ整形甕）、また小田原かわらけ C 群 K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータである。

相武の甕 A・B（ヘラケズリ整形甕）は「7世紀頃の相模地方で生産・流通している土師器甕…平塚砂丘―伊勢原台地のあたりから東側に分布」（田尾誠敏 2007）すること、また多摩丘陵東側の、横浜市青葉区新石川一丁目に所在する弥生後期の新石川釈迦堂遺跡出土の土器と相武の甕 A は重複することから、多摩丘陵の胎土（粘土）とする土器試料であつたと推定され、C1・2 群と相武の甕 A・B の元素の強度（cps）値の散布図から近い地点の胎土の群であると推測された。また、小田原かわらけ C 群は通称「江戸かわらけ」と呼ばれる近世のかわらけの一群である。

C3群は Ca 元素の強度（cps）値が約 200～250（cps）とやや低く、K 元素の強度（cps）値が約 50～100（cps）と最も低いことを特徴とする群である。このC3群は、小田原市千代に所在する千代東町遺跡出土の縄文時代中期の土器試料の散布図にほぼ重複する。

C群はC1・2群がともに神奈川県から東京都（旧相模国から武蔵国）にかけての胎土（粘土）に由来すると推定される土器試料であつた。C3群も Ca・Fe 元素の強度（cps）値がともにやや低い地域が埼玉県西部（旧武蔵国）しにみられることから、この地域の胎土（粘土）に由来すると推定する。

縄文土器試料D群（図 69）

土器試料D1・2群は Ca 元素の強度（cps）値が約 160（cps）以下、Zr 元素の強度（cps）値が約 20（cps）以上であること大きな特徴とする。D1・2群は Zr 元素の強度（cps）値の幅が広いことからD1群はD1-1・D1-2・D1-3 群、D2群もD2-1・D2-2・D2-3 群に細分類した。

先述したように Zr 元素は、自然界では東海地方西部の特に名古屋市東側一帯の低丘陵地帯の段丘面に広がる河川において強度（cps）値が高い分布を示しており、この地域には古代の「東海湖」に由来する良質な粘土層が広がっている。この地帯に所在する猿投窯で生産されたと推定される須恵器が出土した相模国足下郡衙周辺遺跡である小田原市永塚長森遺跡と、駿河国駿河郡衙周辺遺跡である沼津市下石田原田遺跡出土の須恵器と比較した結果、Zr 元素の強度（cps）値の幅が広いが重複がみられ、そ

のたの散布図においても重複・隣接を示した。縄文土器試料では沼津市内の愛鷹山麓の愛鷹スマートインターチェンジ北側に所在する西大曲第Ⅱ・西大曲東遺跡から出土した縄文土器試料の、Ca 元素の強度（cps）値が約 160（cps）以下の試料がほぼすべての散布図で重複・隣接を示した（図 69 ①・②）。

D3群は、Ca 元素の強度（cps）値が約 200（cps）前後とD1・2 群に比較してやや高い散布を示すことを特徴とする。静岡県富士宮市泉に所在する泉遺跡の 31 号住居跡から出土した、古墳時代前期のS字状口縁台付甕形土器（以下、S字甕）の白色系のS字甕土器試料と、すべての散布図で重複・隣接を示した（図 69 ③）。この白色系のS字甕は愛知県の中央部を中心として出土し、東日本に急速に移動拡散した、古墳時代初頭から前期の代表的な土器である。

縄文土器試料 E 群（図 69）

E1群は Ca/K 元素の強度（cps）値の散布が C 群と重複するが、Zr/Fe 元素の強度（cps）値の散布では Zr 元素の強度（cps）値が低いことを特徴とする。

E1群はC1群と同様に、相模川左（東）岸の下流域に位置する寒川町宮山台畑東遺跡から出土した、古墳時代後期の相武の甕 A（ヘラケズリ整形甕）が散布図に重複・隣接するデータである（図 69 ④）。

小結

蛍光X線分析による胎土分類の特徴と胎土分類の比較から、他地域のデータとの重複・隣接が確認されたもの、またそれによる胎土（粘土）の推測・推定地域を以下に記し、小結とする。

A1群	重複なし	地域	長野県南部から山梨県北部
A2群	重複あり	地域	神奈川県西部
B1群	重複あり	地域	神奈川県西部から静岡県東部
B2群	重複あり	地域	神奈川県西部
C1群	重複あり	地域	神奈川県東部から東京都
C2群	重複あり	地域	埼玉県西部
C3群	重複あり	地域	埼玉県西部
D1群	重複あり	地域	愛知県中央部
D2群	重複あり	地域	愛知県中央部
D3群	重複あり	地域	愛知県中央部
E1群	重複あり	地域	神奈川県東部から東京都

引用・参考文献

田尾誠敏 2007 「律令制下の土師器」小林達夫・安藤広道・田尾誠敏・後藤建一・手塚直樹『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社

山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房

山本暉久 2010 『柄鏡形（敷石）住居と縄文社会』六一書房

南アールバンクボタ編集室 1994 『特集＝ハケ岳』

参考資料

産総研ホームページ（https://www.aist.go.jp/aist_j/information/a_B_out_aist.html）

産総研 研究情報公開データベース一覧「地球化学データベース」

Ⅶ まとめ

胎土分類の比較による縄文土器

蛍光X線分析による胎土分類の比較から得られた、胎土（粘土）の推測地域をもとにした土器の記述をまとめる。

前の原遺跡出土遺物 A群（図 70）

A1群は地域として長野県南部から山梨県北部が推測される。

図 44-2（0582 SB10）・図 44- 1（0665 SB10）・図 42- 2（0610-02 SB08）は口縁部に「コ」の字文（鋸歯状文）を横位に施文、図 40- 3（0719-01 SB08）はヘラ状工具による逆U字形文を施文、図 42- 2（0610-02 SB08）は棒状具による押引文を施文

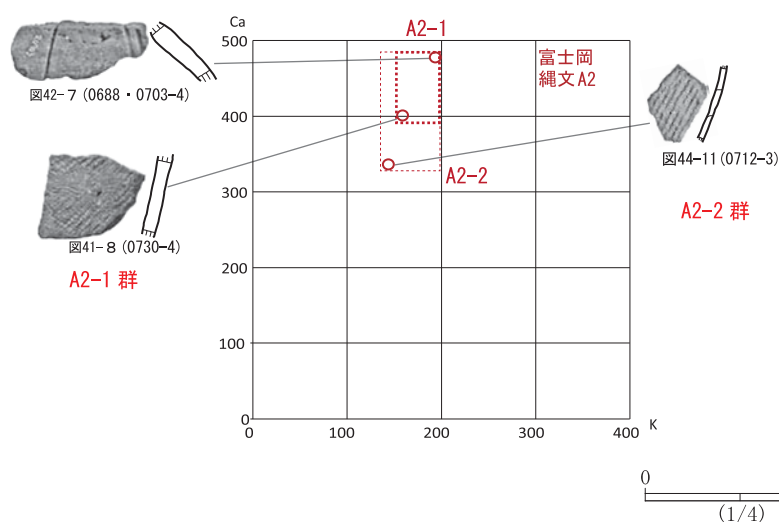
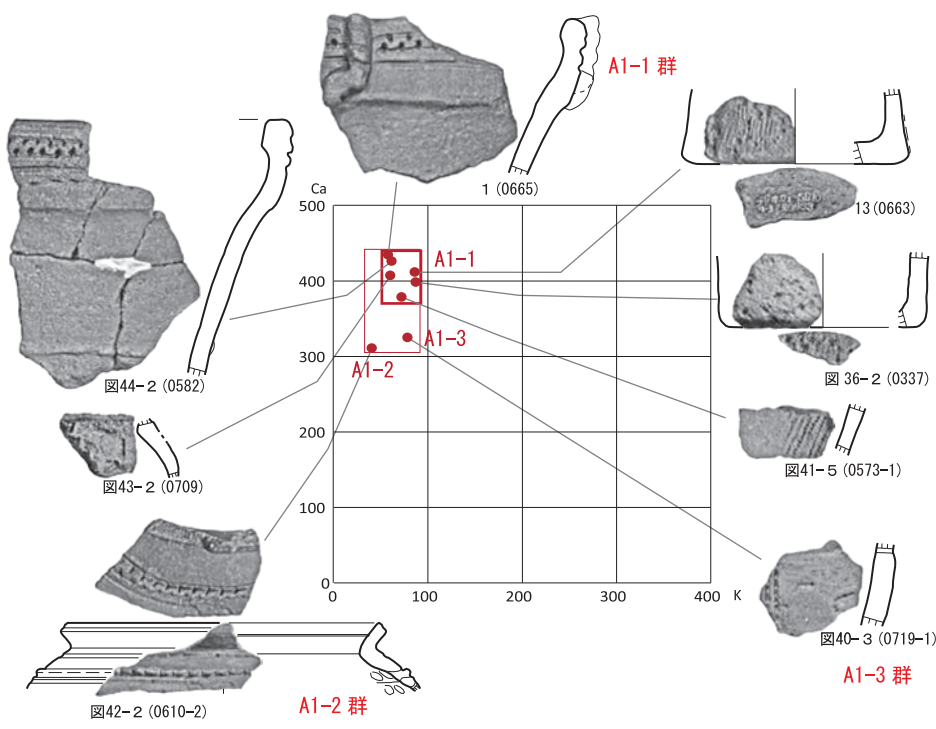


図 70 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 A群

SB08) は斜位の沈線文を施文、図 42-9 (0612-03 SB08) は横位の隆線を施文、図 36-1 (0370 SB01) は隆線に爪形文を施文する。図 46-2 (0858-02 SB11) は横位と縦位の半裁竹管状工具による集合沈線文を施文することから縄文時代中期後半にみられる施文である。図 41-6 (0675-01 SB07)・図 44-7 (0773-0 SB10) は細い原体の縄文を施文、図 46-4 (0858-01 SB11) は密に縄文を施文、図 41-2 (0566 SB07)・図 41-3 (0569-01 SB06) は撚糸文を施文する。

B2群は地域として神奈川県西部が推測される。

図 40-2 (0537 SB05) は垂下する隆線と結節状の刺突文を施文、図 49-5 (0770-08 SB14) は垂下する隆線に連続して押圧、図 40-6 (0625-01 SB05) は密に縄文を施文、図 49-4 (0846-02 SB14) は縄文地に斜位の沈線文と半隆起線文を施文、図 44-11 (0662 SB10) は底部脇の無文部である。

前の原遺跡出土遺物 C群 (図 72)

C1群は地域として神奈川県東部から東京都が推測される。

図 49-1 (0846-11 SB14) は鋸歯状文とへら状工具による沈線区画を施文、図 42-3 (0846-05 SB14)・図 44-8 (0669-01 SB10) は斜行沈線文を施文、図 42-8 (0703-06 SB08) は隆線が斜行に施文する土器で縄文時代中期前半に所属する。図 38-1 (0455-02 SB03) は縦位に集合沈線文と半隆起線文を施文する。縄文が施文される土器としては、図 43-3 (0705 SB09) は縄文のみを施文、図 43-1 (0581 SB09) は縄文を磨消に沈線文内に縄文を充填施文、図 38-4 (0457 SB03) は縄文地に横位の

する土器群の「コ」の字文 (鋸歯状文) を含む施文は縄文時代中期前半の五領ヶ台式から勝坂式にかけてみられる施文である (寺内隆夫)。図 41-5 (0573-01 SB06) は縦位の沈線文を施文する。図 44-13 (0663 SB10)・図 36-2 (0337 SB01) は底部脇の無文部である。

A2群は地域として神奈川県西部が推測されている。

図 41-8 (0730-04 SB07)・図 44-1 (R0712-03 SB10) は密に縄文が施文、前者にはさらに結節文を施文する。図 42-7 (0703-04 0688 SB08) は縦位に沈線文を施文する。

前の原遺跡出土遺物 B群 (図 71)

B1群は地域として神奈川県西部から静岡県東部が推測される。

図 46-1 (0681-02 SB11) は口縁端部にキザミと隆線による楕円形区画文と三角形区画文を施文、図 44-3 (0579-01 SB10) はへら状工具による逆U字形文を施文、図 44-10 (0852-03 SB10) は隆線による渦巻文と押引文を施文、図 44-4 (0773-01 SB10) は横位の連続押引文が施文、縄文時代中期前半にみられる施文である。図 38-2 (0757 SB03) は横位と斜位の沈線文を施文、図 42-5 (0703-05

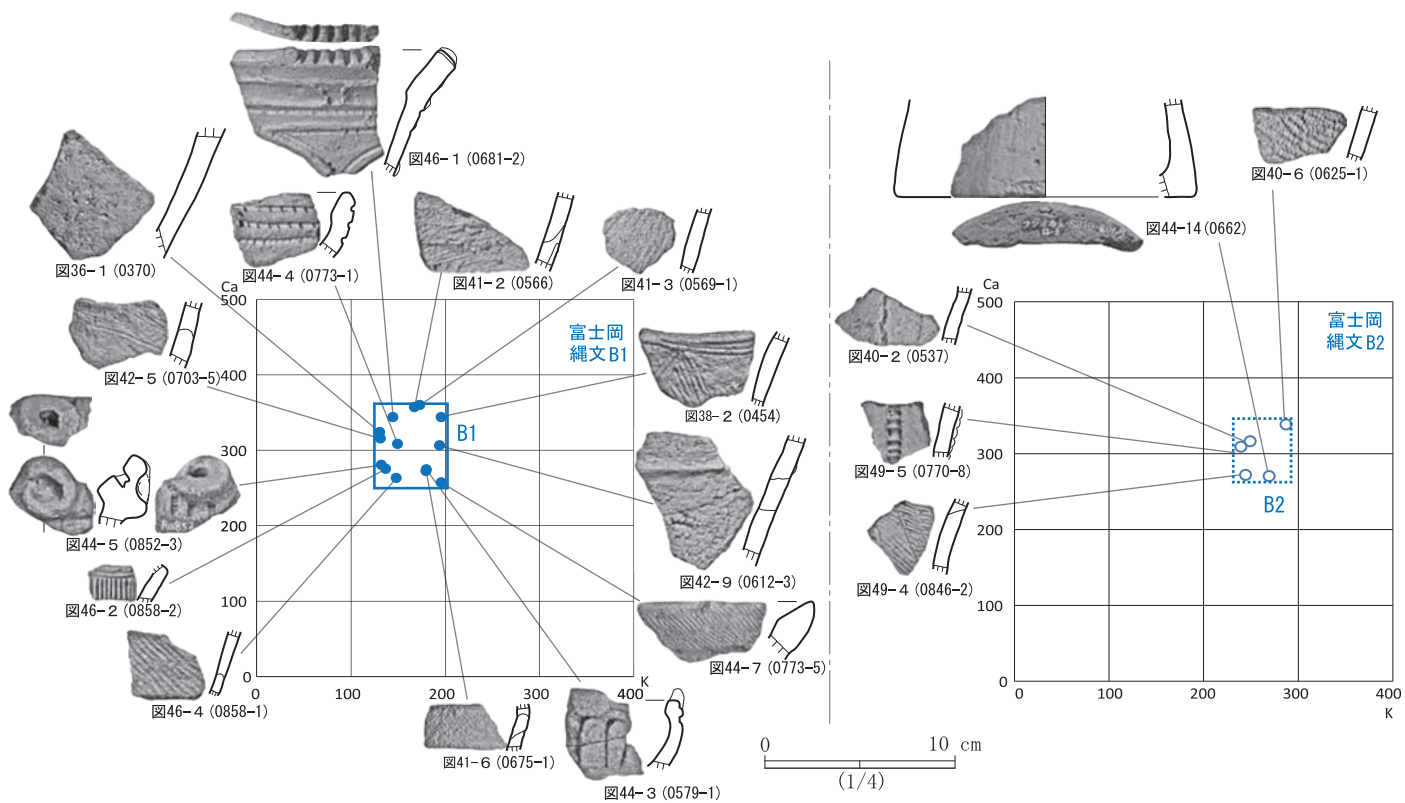


図 71 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 B群

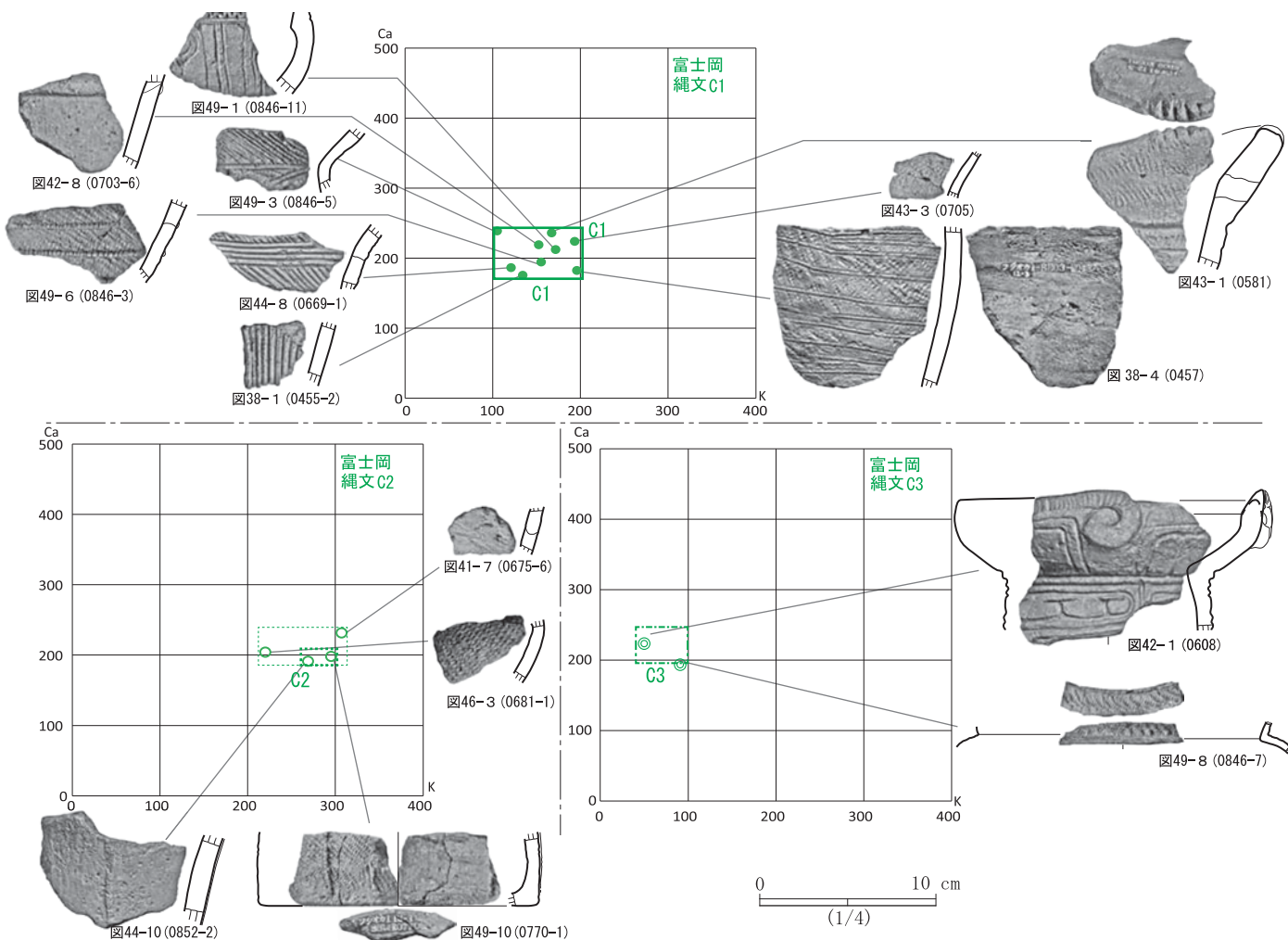
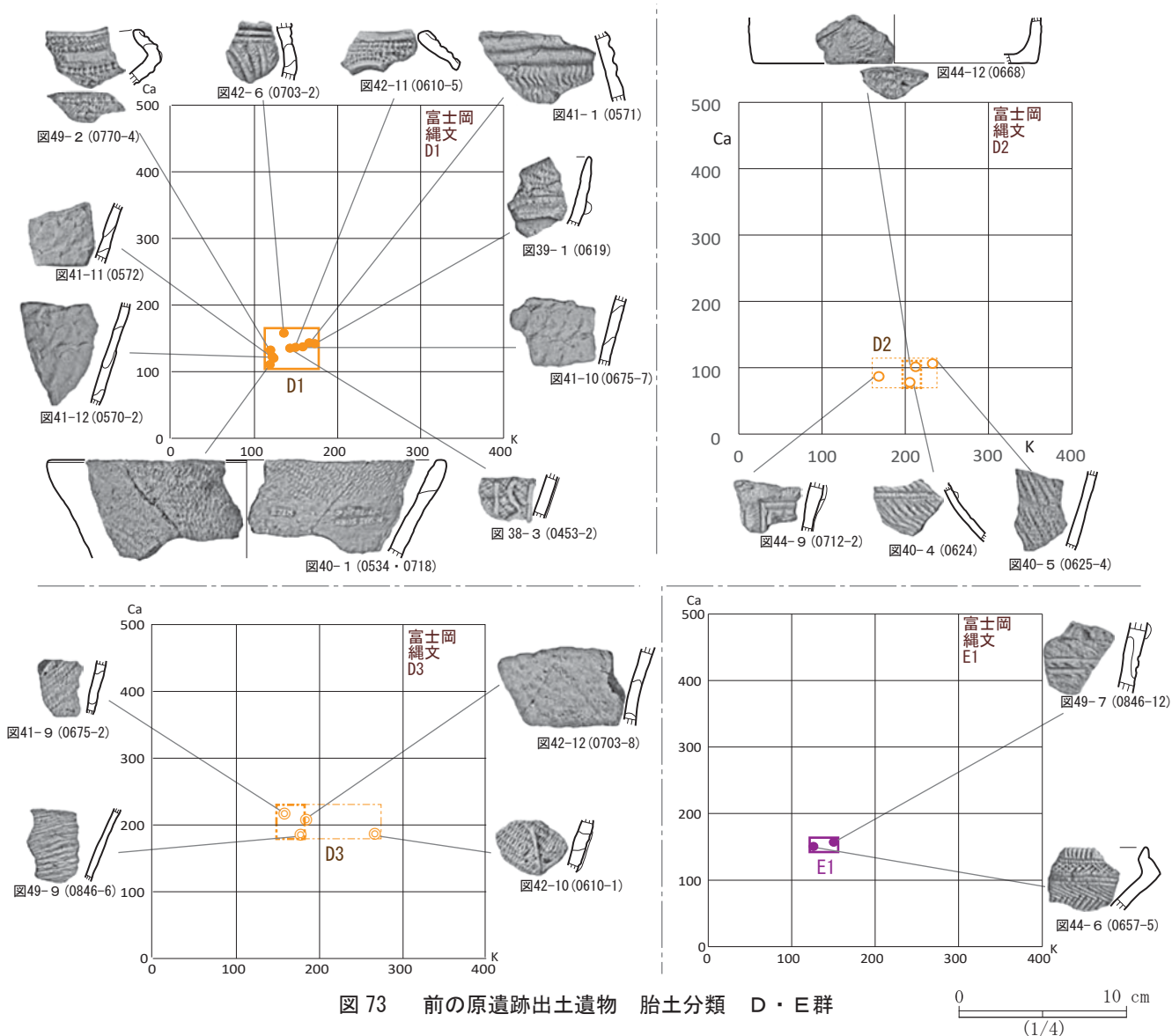


図 72 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 C群



平行沈線文を施文、図 49-6 (0846-03 SB14) は縄文地に斜位に紐状の細い貼付に連続押圧を施文する。

C2群は地域として埼玉県西部が推測される。

図 44-10 (0852-02 SB10) は隆線の懸垂文を施文、図 49-10 (0770-01 SB14) は縄文に細い紐状の貼付文を施文する縄文時代中期前半の土器である。図 46-3 (0681-01 SB11) は縄文を施文する。図 41-7 (0675-06 SB07) は極めて浅い棒状具による沈線文を施文する。

C3群は地域として埼玉県西部が推測される。

図 42-2 (0608 SB08) はキャリパー形の口縁部に渦巻文・沈線文による楕円形区画文を施文する縄文時代中期前半の五領ヶ台式後葉から勝坂式にかけてである。図 49-8 (0846-07 SB14) は内傾する口縁部に丁寧な調整に密に縄文を施文する精製土器である。

前の原遺跡出土遺物 D群 (図 73)

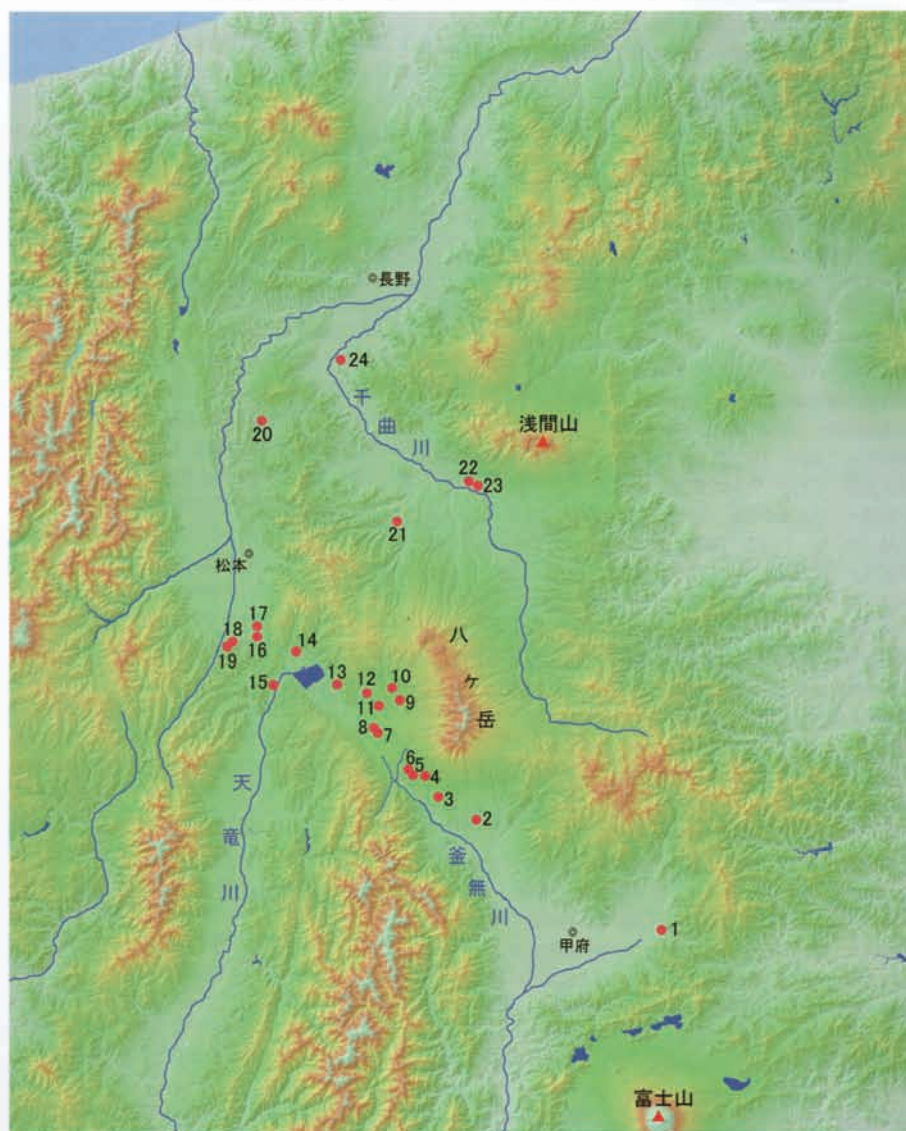
D1群は地域として愛知県中央部が推測される。

図 42-11 (0610-05 SB08)・図 49-2 (R0770-04 SB14) は多段に連続してC字文、図 39-1 (0619 SB04)・図 38-3 (R0453-02 SB03) は縄文地に隆線と細い粘土紐を波状に貼付ける。これらは縄文時代中期前半の東海地方西部土器群である。図 42-6 (0703-02 SB08) は横・縦位の集合沈線文を施文する。図 41-12 (0570-02 SB06)・図 41-11 (0572 SB06)・図 41-10 (0675-07 SB07) は指頭圧痕状文を施文する縄文時代中期前半の土器で、愛知県中央部や東関東地方から信州東部にかけて同様と思われる施文例がある。図 40-1 (0534・0718 SB05) は表裏縄文を施文する縄文時代早期前半の土器、東海地方西部では岐阜県での出土例がある (宮崎朝雄 2008・静岡県考古学会 1998・長野県立博物館 2014)。

約 5,700 年前	約 5,500 年前	約 5,400 年前	約 5,300 年前		
前期後葉 末	中期前葉 I	II	中期中葉 I	II	III
諸磯C式 十三菩提 龍畑	五領ヶ台Ⅰ式 九兵衛尾根Ⅰ式	五領ヶ台Ⅱ式 九兵衛尾根Ⅱ式	勝坂Ⅰ式 貉沢式	勝坂Ⅱ式 新道式	勝坂Ⅲ式 藤内Ⅰ・Ⅱ式
					
17 頁 No.2 中原	19 頁 No.3 鴨田	21 頁 No.4 屋代	33 頁 No.13 大石	37 頁 No.17 長峯	86 頁 藤内 (図録のみ)

(長野県立博物館 2014 転載)

展示資料の出土した遺跡の位置



1 宮之上遺跡(甲州市) 2 寺所第2遺跡(北杜市) 3 井戸尻遺跡(富士見町) 4 新道遺跡(富士見町) 5 九兵衛尾根遺跡(富士見町) 6 貉沢遺跡(富士見町) 7 大石遺跡(原村) 8 比丘尼原遺跡(原村) 9 鴨田遺跡(茅野市) 10 長峯遺跡(茅野市) 11 梨ノ木遺跡(茅野市) 12 柳畑遺跡(茅野市) 13 大ダッショ遺跡(岡谷市) 14 梨久保遺跡(岡谷市) 15 後田原遺跡(岡谷市) 16 堂の前遺跡(塩尻市) 17 畑原遺跡(塩尻市) 18 平出遺跡(塩尻市) 19 床尾中央遺跡(塩尻市) 20 東畑遺跡(筑北村) 21 後沖遺跡(佐久市) 22 中原遺跡群(東御市) 23 久保在家遺跡(東御市) 24 屋代遺跡群(千曲市)

(長野県立博物館 2014 転載)

図 74 縄文時代中期の五領ヶ台式土器を中心とした年代と遺跡の分布

D2群は地域として愛知県中央部が推測される。

縄文が施文されるのは、図 40-5 (0625-04 SB04) は斜位に密に縄文を施文、図 40-4 (0624 SB05) は斜位に密な縄文地に貝殻による沈線文を施文、図 44-12 (0668 SB10) は底部脇に斜位に密に縄文を押圧による沈線文を施文する土器である。図 44-9 (0712-02 SB10) は隆線に連続してC字文と半隆起線文を施文する土器である。縄文時代中期前半の東海地方西部土器群である。

D3群は地域として愛知県中央部が推測される。

縄文施文土器には図 41-9 (0675-02 SB07) は縄文が絡状体状に施文、図 49-9 (0846-06 SB14) は縄文を密に施文、図 42-10 (0610-01 SB08) は縄文地に細い紐状を貼付後に押引を施文する。図 42-12 (0703-08 SB08) は無文であるが僅かに指頭痕による凹がみられる土器である。

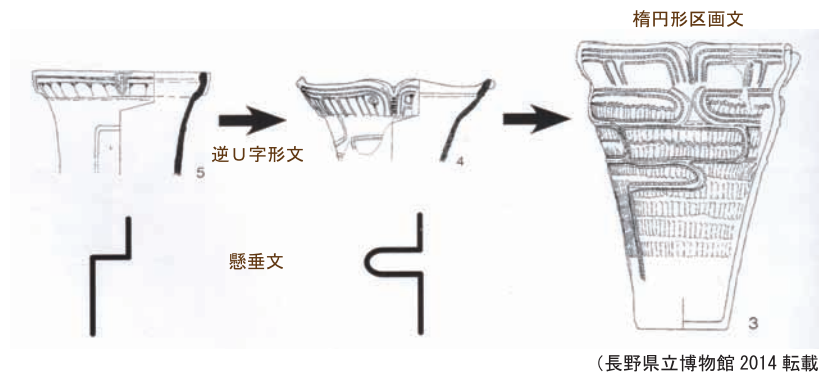
前の原遺跡出土遺物 E 群 (図 73)

E1群は地域として神奈川県東部から東京都が推測される。

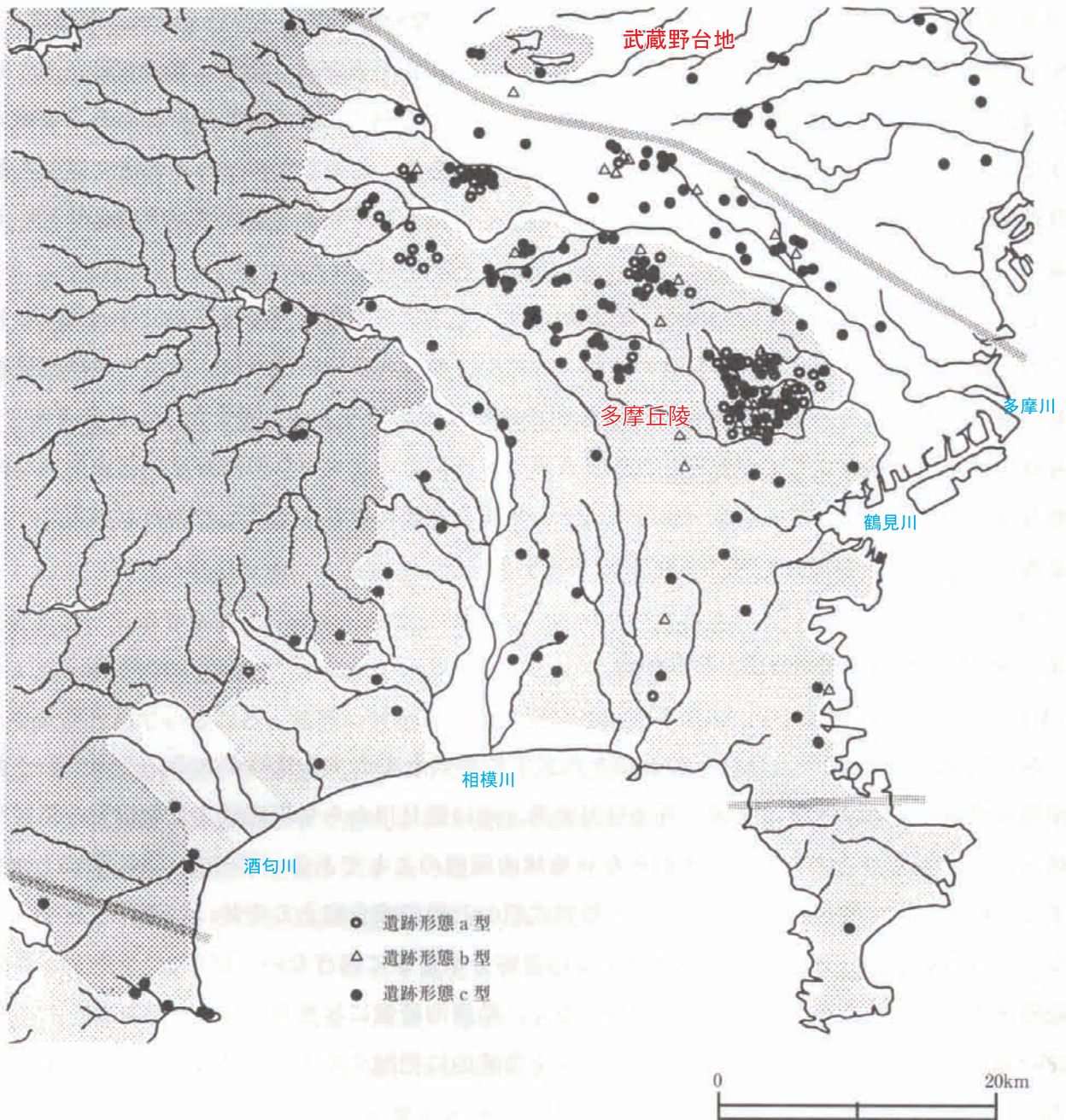
図 44-6 (0657-05 SB10) は端部に連続ギザミ状C字文・羽状の集合沈線文・横位の隆線を施文、図 49-7 (0846-12 SB14) は撚糸文に縦位の沈線文と短い隆帯状の貼付文を施文する。

住居跡以外から出土した縄文土器の主な施文方法によるまとめ

粘土紐貼付の隆線を施文する1号配石遺構の図 50-1・50-2・50-3、2号溝状遺構の図 55-2・55-3・55-4、3号溝状遺構の図 56-1・56-3 はU字形・56-4 は渦巻文、4号溝状遺構の渦巻文の図 57-1 は



縄文時代中期の五領ヶ台式直後式土器から勝坂式Ⅰ式の文様の変遷



(山本典幸 2000 から転載・加筆)

図 75 縄文時代中期の五領ヶ台式土器の西南関東地方の遺跡の分布

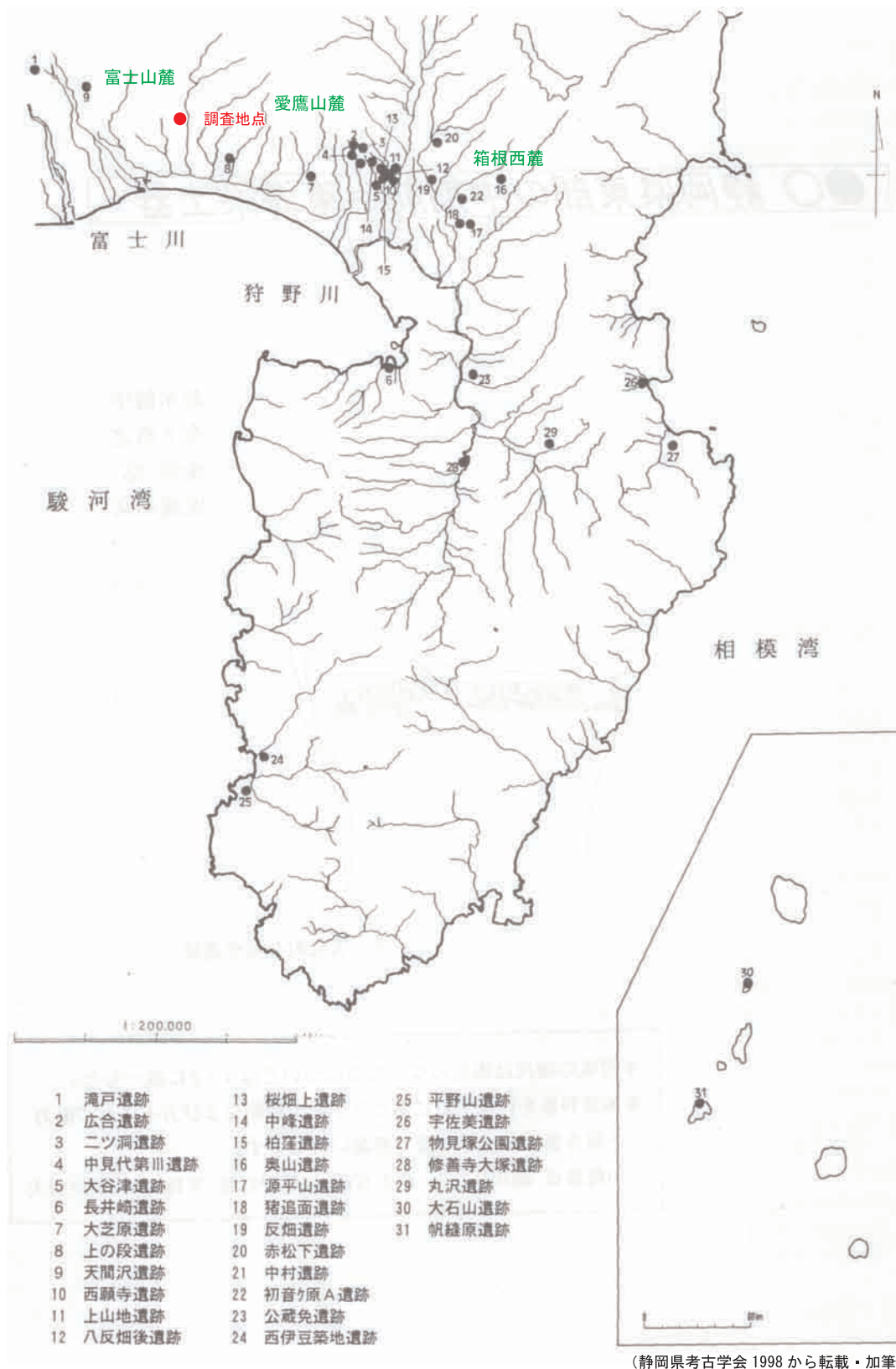


図 76 静岡県東部の縄文時代中期前半の東海系土器出土遺跡の分布

下である。

縄文時代早期前半 表裏縄文土器

縄文時代中期前葉 五領ヶ台式Ⅱ式以降

縄文時代中期中葉 勝坂式Ⅰ・Ⅱ式

渦巻文から懸垂文の小型深鉢で極めて珍しい、6号溝状遺構の図 59-1 は渦巻文・59-5 は懸垂文、7号溝状遺構の図 60-1・60-2・60-2・60-3・60-4、包含層①の図 61-11・61-12・61-18 は橋状把手・61-24・61-31・61-33 は突起部を具象化(へび状)、包含層②の図 62-35・62-36・62-37。

逆U字形文を施文する6号溝状遺構の図 59-5、包含層①の図 61-26～61-30。

鋸歯状文を施文する6号溝状遺構の図 59-2、包含層①の図 61-13～61-15。

沈線文を施文する6号溝状遺構の図 59-7 は勝坂Ⅰ式、包含層①の図 61-19・61-25。

連続するC字文・押引文・キザミを施文6号溝状遺構の図 59-3、包含層①の図 61-17、包含層②の図 62-51・62-52・62-54・62-55。

いずれも縄文時代中期前葉～中葉の土器群である。

小結

蛍光X線分析による胎土分析結果と土器の施文等の肉眼観察による所属時期を求めた結果、主な時期と主な土器型式名は以

土器は縄文時代中期前葉～中葉が主体であったが、胎土分析から推測された胎土の由来する主な地域は関東地方西部・中部地高地・東海地方東部・東海地方西部と広範囲となった。このことからこの調査地点は各地域から運ばれた土器が集合する縄文時代中期前葉～中葉の重要な要衝・結節地点であったことが推測される。そこは東に流れる赤渕川によって段丘化し、富士山の南麓地形と愛鷹山の西麓地形が接し、南には縄文時代前期の温暖化から徐々に寒冷化することによって海面が後退し、また砂礫の流入による浅瀬化・浜堤の形成による陸地化・潟湖化が進む浮島沼が広がる、地形的に変化に富んだユニークな場所でもある。

最後に蛍光X線分析による胎土分析は、縄文土器の分析点数と種類が少ないことから、データベースからの推測・推定は現状では十分でない。今後さらなる分析事例の増加による比較精度の改善が必要であることを課題とした。（小金澤 保雄）

引用・参考文献

個人論文

阿部芳郎編	2021	「土器研究が拓く新たな縄文社会」『季刊考古学 155 号』雄山閣
井上 公夫	2007	「富士山宝永噴火（1707）後の長期間に及んだ土砂災害」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
今福利恵	1999	「勝坂式土器とその社会組織」『縄文土器の編年と社会』小林達雄編 季刊考古学 普及版 雄山閣
今村啓爾	1985	「五領ヶ台式土器の編年 ―その細分と東北地方との関係を中心に―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 4 号
甲本 眞之	2008	「気候変動と考古学」『文学部論叢 97』所収
河西学	2011	「第9章 異系統土器が共存する遺跡 ―土器胎土分析で製作地が区別できるか―」『異系統土器の出会い』今村啓爾編 同成社
小金澤 保雄	2015	「第三章 第2節 大進舎遺跡の立地環境―ジオアーケオロジーからみた遺跡とその周辺―」『大進舎遺跡（第2地点）』三島市教育委員会 所収
小林 謙一	2008	「縄文土器の年代（東日本）」『総覧 縄文土器』所収
小松原 純子・宍倉 正展・岡村 行信	2007	「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」
田尾誠敏	2007	「律令制化の土師器」『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社
谷口康浩	1999	「勝坂式土器の地域性 ―土器型式の広域型・漸移型・極地型―」『縄文土器の編年と社会』小林達雄編 季刊考古学 普及版 雄山閣
寺内隆夫	1987	「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ ―型式変遷における一規点―」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
土 隆一	2007	「富士山の地下水・湧水」『富士火山』所収
新津 健	1994	「縄文集落と道」『山梨県考古学論集Ⅲ 山梨県考古学協会一五周年記念論文集』所収
野内秀	2005	「事例報告1 早期 早期東海系土器群の流入と石器・石材」『公開セミナー 南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
藤尾 慎一郎	1993	「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告 第 48 集』所収
町田 洋	2007	「第四紀テフラからみた富士山の成り立ち：研究のあゆみ」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
松田光太郎	2005	「事例報告2 前・中期 前・中期の遠隔地交流と注記文化の成立 ―神奈川県を中心に―」『公開セミナー 南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
松田 時彦	2007	「富士山の基盤の地質と地史」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
松本 一男	1998	「静岡県内検出の縄文時代住居の時代的変遷と地域的特性について ―住居を構成する属性から時代的変遷と地域性を探る―」『静岡県考古学研究 30』所収
三上徹也	1987	「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
宮崎朝雄	2008	「尖底回転縄文系（室谷上層系・表裏縄文系土器）」小林達雄編『総覧 縄文土器 ―小林達雄先生古稀記念企画―』アム・プロモーション
宮地 直道	2007	「過去1万 1000 年間の富士火山の噴火史と噴出率、噴火規模の推移」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
武藤 康弘	1999	「縄文時代の堅穴住居の居住施設としての安定性」『帝京大学山梨文化財研究所 1999 年度研究会資料集』所収
山本典幸	2000	『縄文時代の地域生活史』小林 達雄（監修） 未完成考古学叢書（1） アム・プロモーション

発掘調査報告書等

静岡県	1990	『静岡県史 資料編1 考古1』
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	1985	『茶木畑遺跡 田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第8集
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	2009	『矢川上C遺跡 第二東名No. 39- II 地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市- 1（第1分冊・第2分冊）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 200 集
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	2010	『天ヶ沢東遺跡 古木戸 A 遺跡 古木戸 B 遺跡 第二東名No. 44 地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市- 2』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 228 集
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	2010	『富士山・愛鷹山麓の遺跡 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市- 3 総論（富士工区富士地区）富士岡中尾遺跡（第二東名No. 48 地点）平椎遺跡（第二東名 CR20 地点）平椎第2号墳（第二東名 CR20 地点）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 230 集
財静岡県埋蔵文化財調査研究所	2010	『富士山・愛鷹山麓の古墳群 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市- 4 船津 L- 第 171 号墳（第二東名No. 39 地点）須津古墳群（第二東名No. 45 地点）間門松沢第1号墳（第二東名No. 52 地点）鶴無ヶ淵・間門 E- 第6号墳（第二東名No. 52 地点）不動棚遺跡（第二東名No. 52 地点）松坂遺跡（第二東名No. 53 地点）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 231 集
静岡県埋蔵文化財センター	2013	『富士岡1古墳群他 富士市 平成 21・22・24 年度地域活性化基幹農道愛鷹2期地区農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第 37 集
榊珠流河国文化財調査研究所	2017	『日向・日影遺跡 第2次調査 南足柄市塚原字日向における宅地造成工事に係る発掘調査報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2018	『日向・日影遺跡 第3次調査 南足柄市塚原字日向における分譲住宅建設に係る発掘調査報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2018b	『小田原市No. 92 遺跡（小田原城三の丸大久保弥六郎邸跡）第IX地点 集合住宅建設工事に係る発掘調査概要報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2020a	『小田原市No. 92 遺跡 小田原城三の丸 大久保弥六郎邸跡第 X I 地点 共同住宅兼個人住宅新築工事に伴う発掘調査業務 概要報告書』

榊珠流河国文化財調査研究所	2020b	『小田原市 No.33 遺跡 永塚長森遺跡 第IX地点 建売住宅新築工事に伴う発掘調査業務概要報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2022a	『千代北町遺跡第XVI地点 神奈川県小田原市千代字北町における建売住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2022b	『千代東町遺跡第XII地点 神奈川県小田原市千代字東町における建売住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2022c	『成田諏訪脇遺跡第V地点 神奈川県小田原市成田字諏訪脇における店舗建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
榊珠流河国文化財調査研究所	2022d	『別堀十二天遺跡第XVIII地点 神奈川県小田原市別堀字十二天における集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会	1986	『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会	1988	『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会	2003	『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書—平成14年度 県営社会環境基盤重点農道整備事業（愛鷹地区）埋蔵文化財発掘調査—』
富士市教育委員会	2013	『富士市内遺跡発掘調査報告書 —平成22・23年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告 第54集
富士市教育委員会	2016	『天間沢遺跡 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市埋蔵文化財調査報告 第58集
富士宮市教育委員会	1997	『滝戸遺跡 —市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 富士宮市文化財調査報告書 第23集
南足柄市教育委員会	2017	『北耕地遺跡 第2次調査 南足柄市関本字北耕地地先における個人住宅工事に係る発掘調査報告書』 南足柄市文化財調査報告書 第26集
山梨県	1999	『山梨県史資料編1 原始・古代1』
山梨県	1999	『山梨県史資料編2 原始・古代2』

書籍他

- (有)アーバンポタ編集室 1994 『特集＝ハヶ岳』
- 新井 宏一 2007 『理系の視点から見た「考古学」の論争点』大和書院
- 荒巻 重雄・藤井 敏嗣・宮地 直道 編2007 『富士火山』山梨県環境科学研究所
- 池谷信之 2005 『黒潮を渡った黒曜石・見高段間遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」14 新泉社
- 池谷信之 2009 『黒曜石考古学 —原産地推定が明らかにする社会構造とその変化—』新泉社
- 池谷信之・佐藤宏之 2020 『愛鷹山麓の旧石器文化』敬文舎
- 井戸尻考古館 2023 『井戸尻の縄文土器8 総集編』ハヶ岳西南麓出土縄文土器85点 テクネ
- 今福利恵 2011 『縄文土器の文様生成構造の研究』小林達雄（監修）未完成考古学叢書8 アム・プロモーション
- 今村 峯雄 2004 『縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築』国立歴史民俗博物館
- 海津 正倫 編 2012 『沖積低地の地形環境学』古今書院
- 大村裕 2011 『縄紋土器の型式と層位 その批判的検討』六一書房岡村 道雄 編1998 『特集 解明すすむ縄文文化の実像』『季刊考古学 第64号』
- 貝塚 爽平 1979 『東京の自然史 増補第二版』紀伊国屋書店
- かながわ考古学財団法人 2005 『公開セミナー 南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
- 日下 雅義 2012 『地形からみた歴史 古代景観を復原する』講談社学術文庫（原本1991『古代景観の復原』中央公論社）
- 日下 雅義 編 2004 『地形環境と歴史景観 自然と人間の地理学』古今書院
- 工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社
- 小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編 2008 『土器を読み取る —縄文土器の情報—』縄文時代の考古学7 同成社
- 小林謙一 2012 『縄紋社会研究の新視点 —炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林 達夫 編 2008 『総覧 縄文土器』総覧 縄文土器 刊行委員会
- 縄文中期集落研究グループ／宇津木台地区考古学研究会 1995 『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平〔発表要旨・資料〕』
- 小林達雄編 1999 『縄文土器の編年と社会』季刊考古学 普及版 雄山閣
- 小林達夫・安藤広道・田尾誠敏・後藤建一・手塚直樹 2007 『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社
- 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開 予稿集』静岡県考古学会シンポジウム・97・第5回東海考古学フォーラム
- 鈴木 道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
- 大学合同考古学シンポジウム実行委員会 2003 『縄文社会を探る』学生社
- 辰巳 和弘 1982 『日本の古代遺跡1 静岡』保育社
- 土 隆一 編著 2010 『新版 地学のガイド』コロナ社
- 建石 徹 2007 『日本の美術9 No.496 縄文土器 前期』至文堂
- 勅使河原 彰 2013 『ビジュアル版 縄文時代ガイドブック シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊03』新泉社
- 土肥 崇 2007 『日本の美術10 No.497 縄文土器 中期』至文堂
- 常木 晃・西秋 良宏・山内 和也 編 1995 「特集 縄文時代における自然の社会化」『季刊考古学 別冊6』
- 長野県立博物館（寺内隆夫）2014 『縄文土器展 デコボコかざりのはじまり』平成26年度長野県立歴史館冬季展 信毎書籍出版センター
- 長野県立博物館2017 『進化する縄文土器 ～流れるもようと区画もよう～』平成29年度秋季企画展「縄文土器展2」信毎書籍出版センター
- ニュー・サイエンス社 1997 「特集縄文時代の墓地」『月間考古学ジャーナルNo.422』
- マイケルR.ウォータース 2012 『ジオアーケオロジー 地学にもとづく考古学』松田順一郎・高倉純・出徳雅実・別所秀高・中沢祐一訳 朝倉書店
- 三辻 利一 2013 『新しい土器の考古学』同成社
- 宮島 了誠 編 1999 「特集 縄文時代の東西南北」『季刊考古学 第69号』
- 安田 喜憲 1980 『環境考古学事始 —日本列島2万年—』日本放送出版協会
- 安田 喜憲 1996 『森の日本文化 縄文から未来へ』新思索社
- 山口 恵一郎 1974 『日本図誌大系 中部I』朝倉書店
- 山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房
- 山本暉久 2010 『柄鏡形（敷石）住居と縄文社会』六一書房
- 山本 典幸 2000 『縄文時代の地域生活史』小林達夫監修 未完成考古学業所①
- 吉越 昭久 編 2004 『人間活動と環境変化』古今書院
- 渡辺 誠 編 2000 「特集 縄文文化研究の新動向」『季刊考古学 第73号』



写真図版 3 花川戸第4号墳 周溝 検出状況 南西から



写真図版 4
花川戸第4号墳
周溝 完掘 南
西から



写真図版 5 花川戸第4号墳 周溝 完掘 北東から



写真図版 6 1号住居跡 検出状況 北から



写真図版 7 2号住居跡 検出状況 西から



写真図版 8 3号住居跡 検出状況 西から



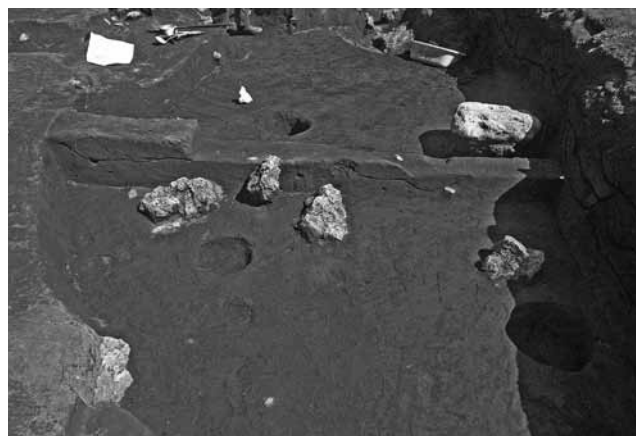
写真図版 9 4号住居跡 検出状況 南から



写真図版 10 5号住居跡 検出状況 南東から



写真図版 11 6号住居跡 完掘 南から



写真図版 12 7号住居跡 検出状況 西から



写真図版 13 8号住居跡 検出状況 南から



写真図版 14 10号住居跡 遺物出土状況 南から



写真図版 15 11号住居跡 完掘 南東から



写真図版 16 12号住居跡 検出状況 南東から



写真図版 17 13号住居跡 土層 南から



写真図版 18 14号住居跡 検出状況 北から



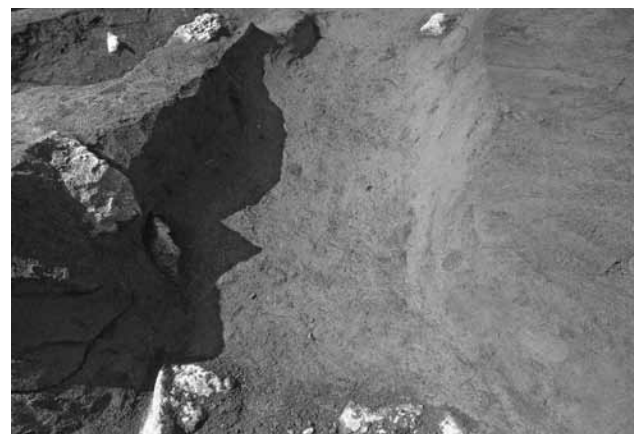
写真図版 19 3号溝状遺構 検出作業 北から



写真図版 20 4号溝状遺構 遺物出土状況 北から



写真図版 21 8号溝状遺構 検出状況 東から



写真図版 22 5号溝状遺構 完掘 北から



写真図版 23 標準土層 北から



写真図版 24 調査区西側 南から



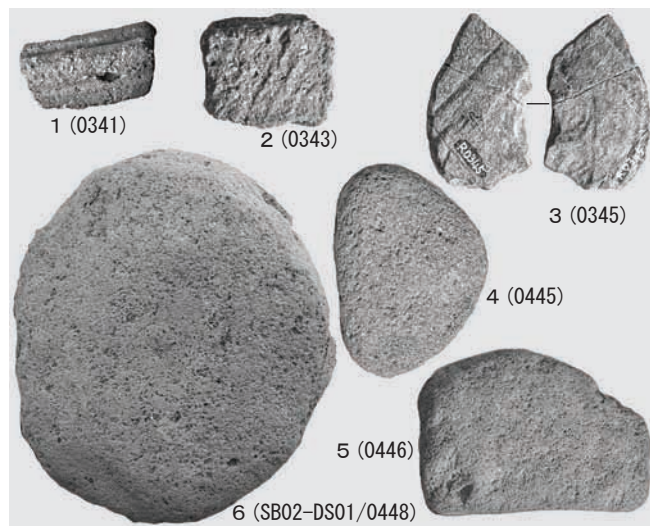
写真図版 25 調査区東側 南から



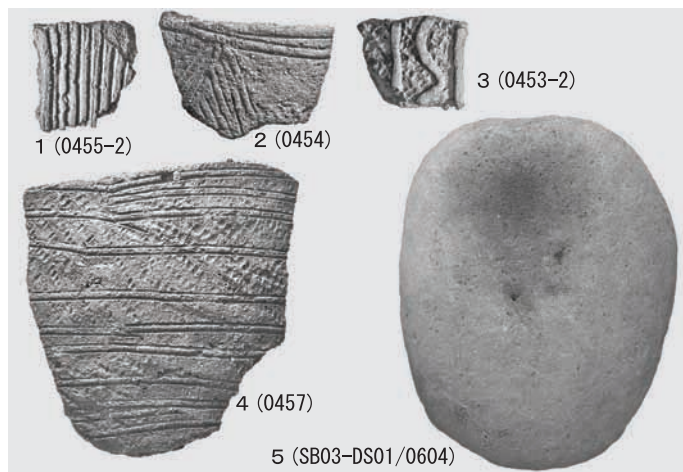
写真図版 26 調査区北東側 北東から



写真図版 27 1号住居跡 出土遺物



写真図版 28 2号住居跡 出土遺物

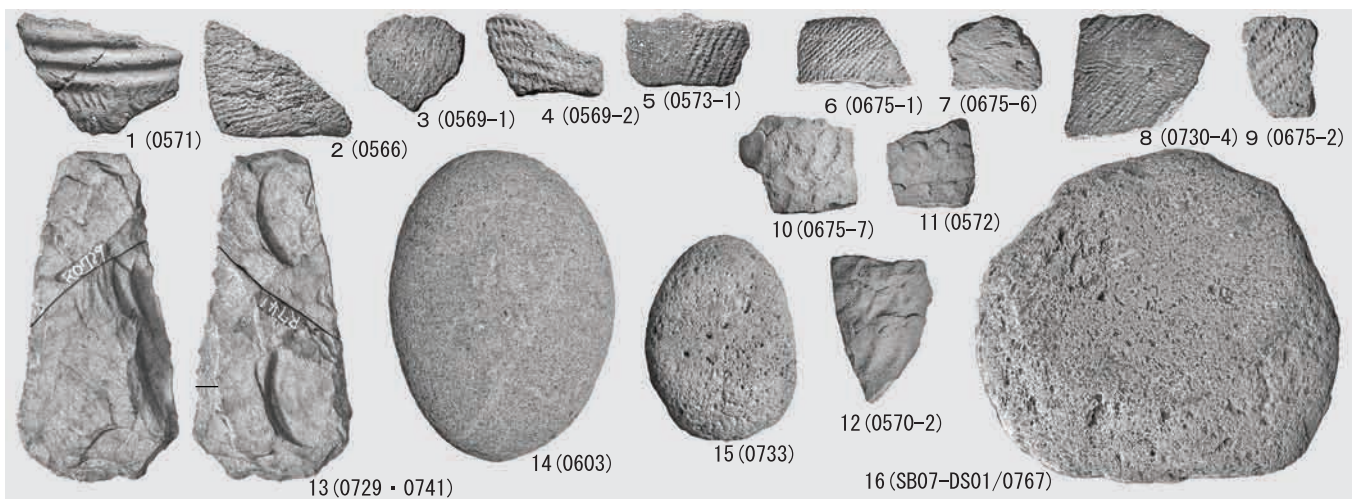
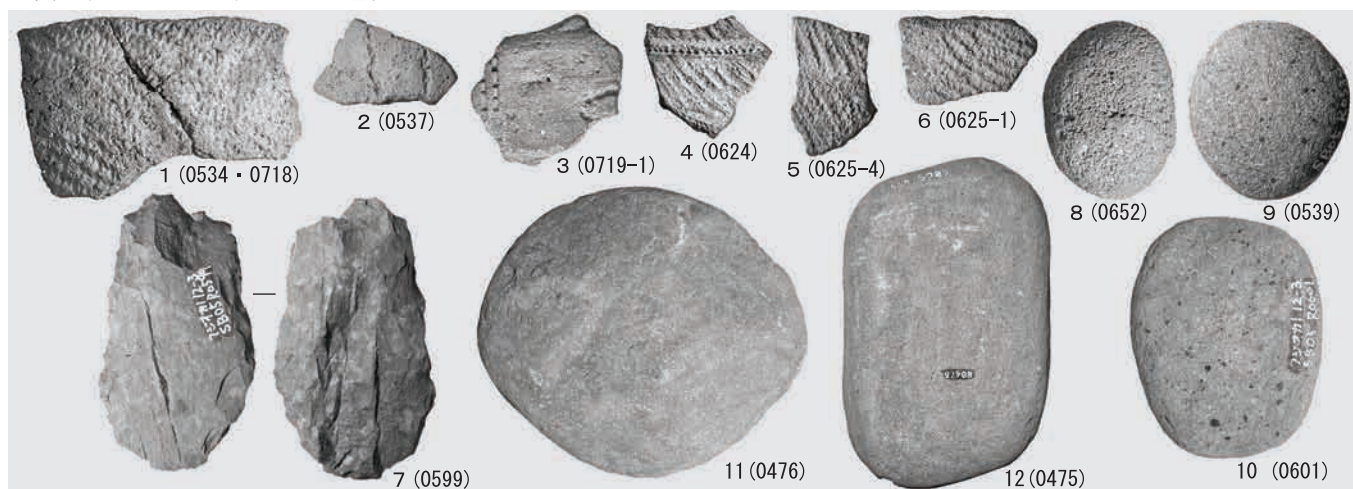


写真図版 29 3号住居跡 出土遺物

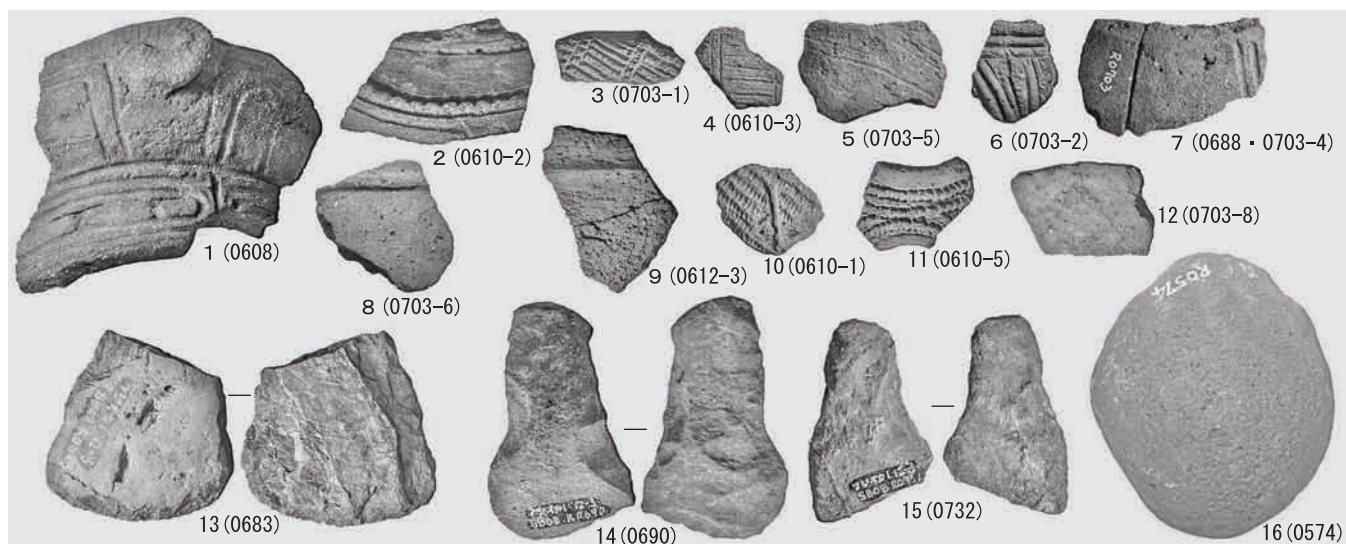


写真図版 30 4号住居跡 出土遺物

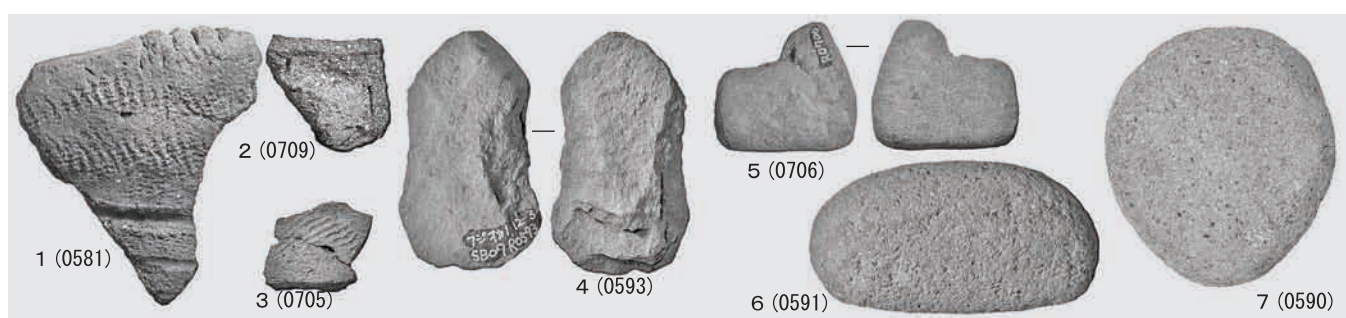
写真図版 31 5号住居跡 出土遺物 ↓



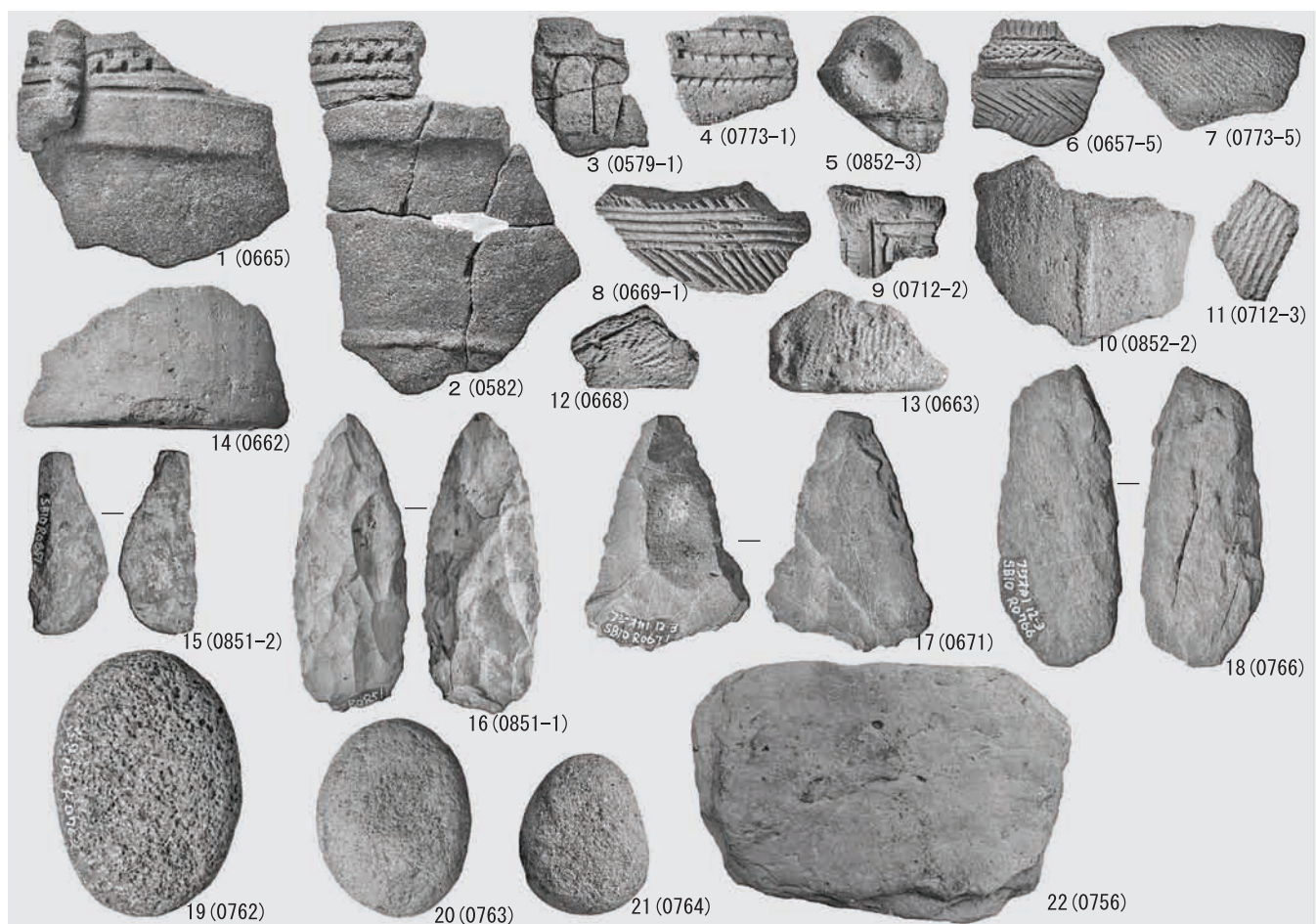
写真図版 32 7号住居跡 出土遺物



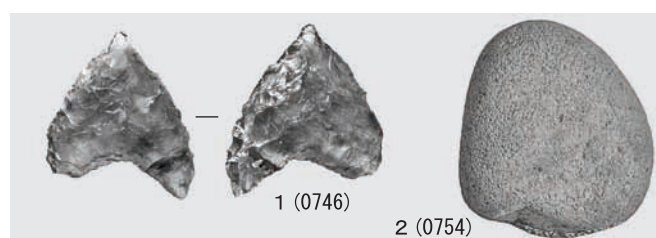
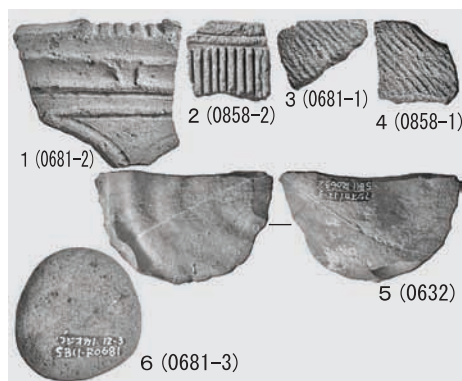
写真図版 33 8号住居跡 出土遺物



写真図版 34 9号住居跡 出土遺物



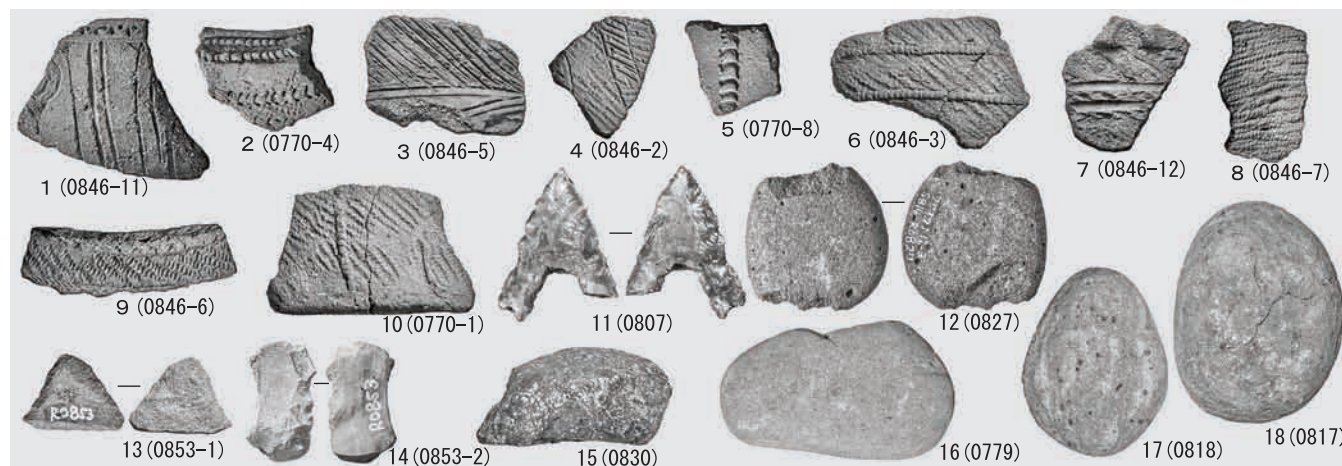
写真図版 35 10号住居跡 出土遺物



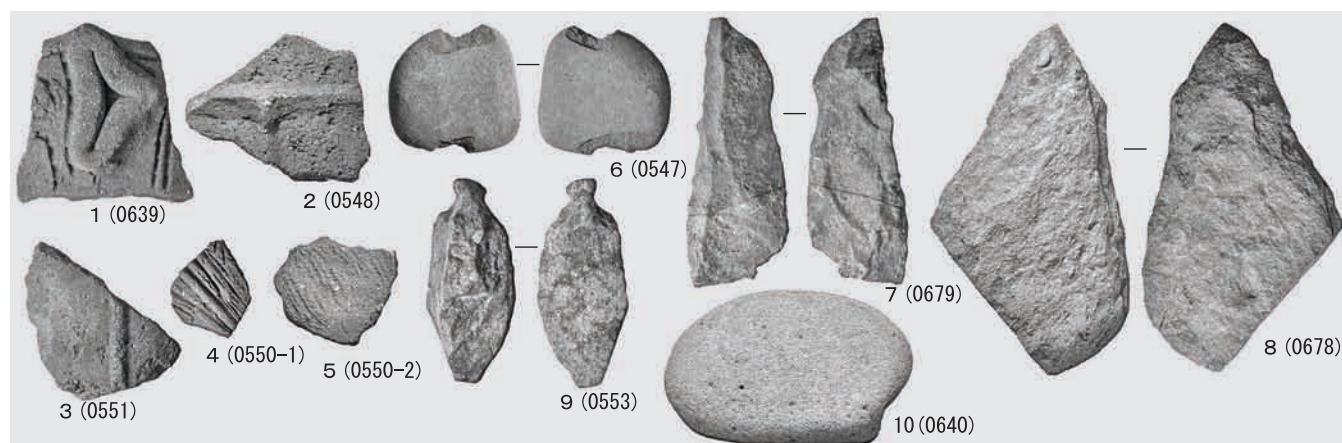
写真図版 38 13号住居跡 出土遺物

1 (0768) ← 写真図版 37 12号住居跡 出土遺物

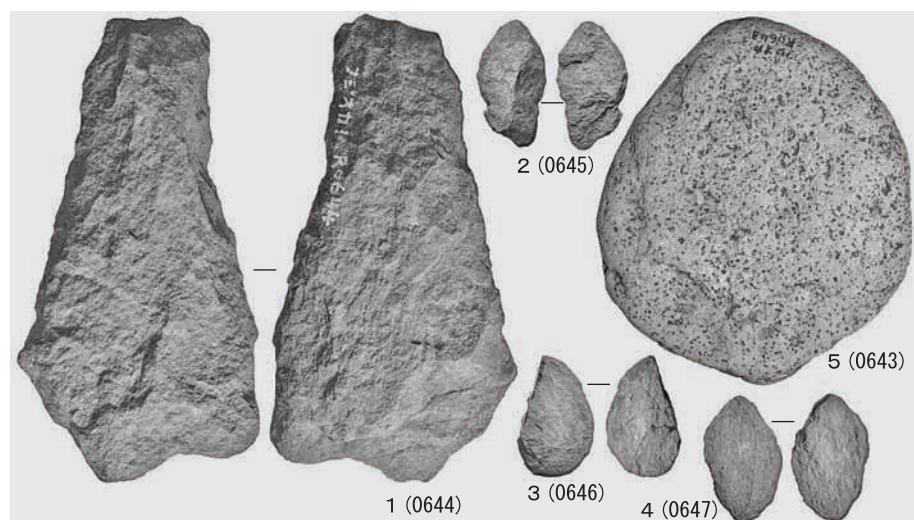
← 写真図版 36 11号住居跡 出土遺物



写真図版 39 14号住居跡 出土遺物



写真図版 40 1号配石遺構 出土遺物



写真図版 41 3号配石遺構 出土遺物

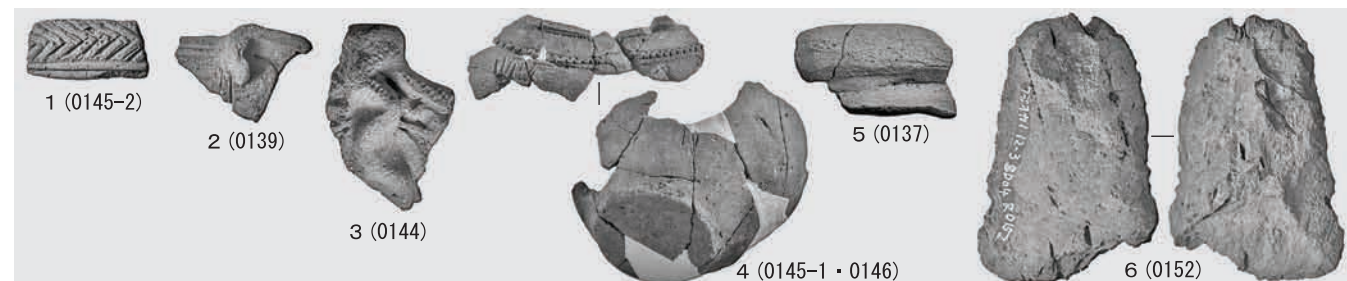


写真図版 42 1号集石遺構 出土遺物

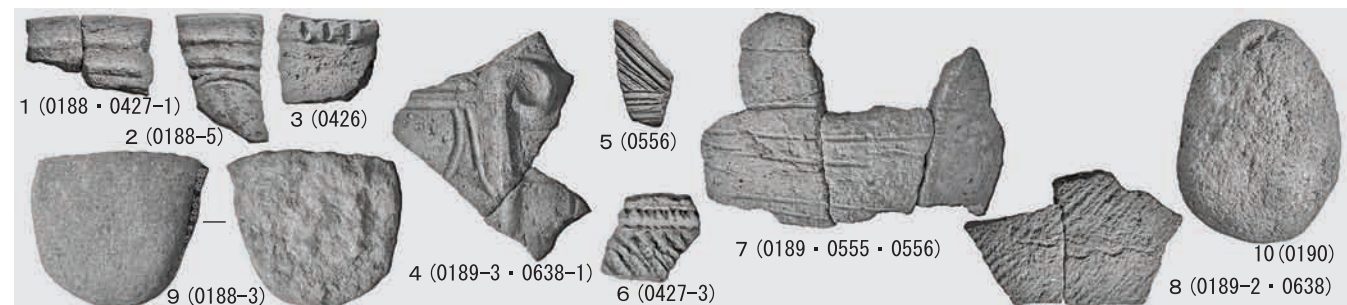


← 写真図版 43 2号集石遺構
出土遺物

写真図版 44 3号集石遺構
出土遺物 →



写真図版 45 2号溝状遺構 出土遺物

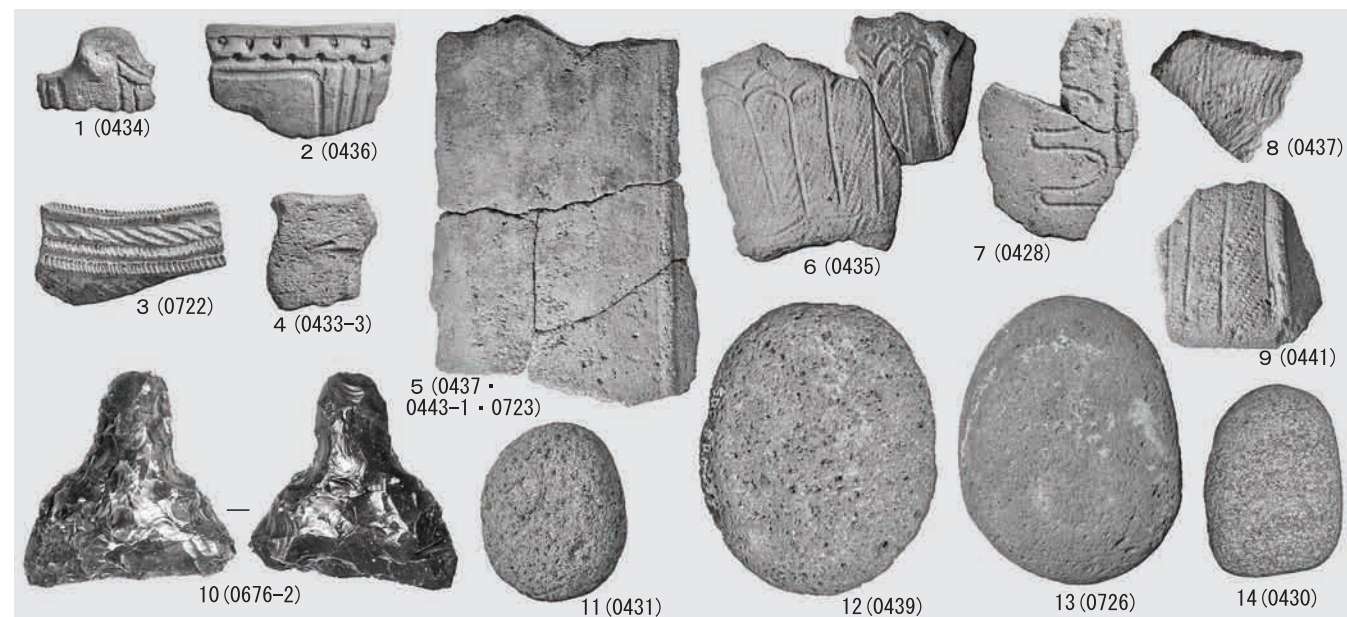


写真図版 46 3号溝状遺構 出土遺物

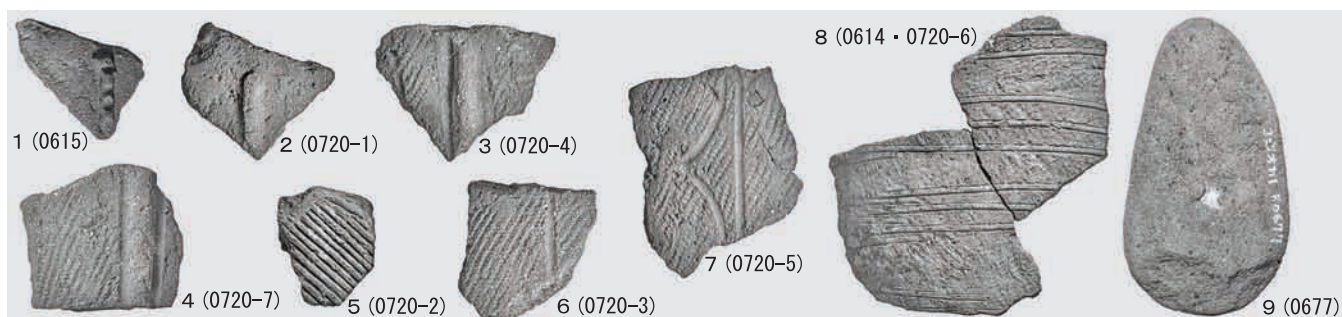


写真図版 47 4号溝状遺構
出土遺物

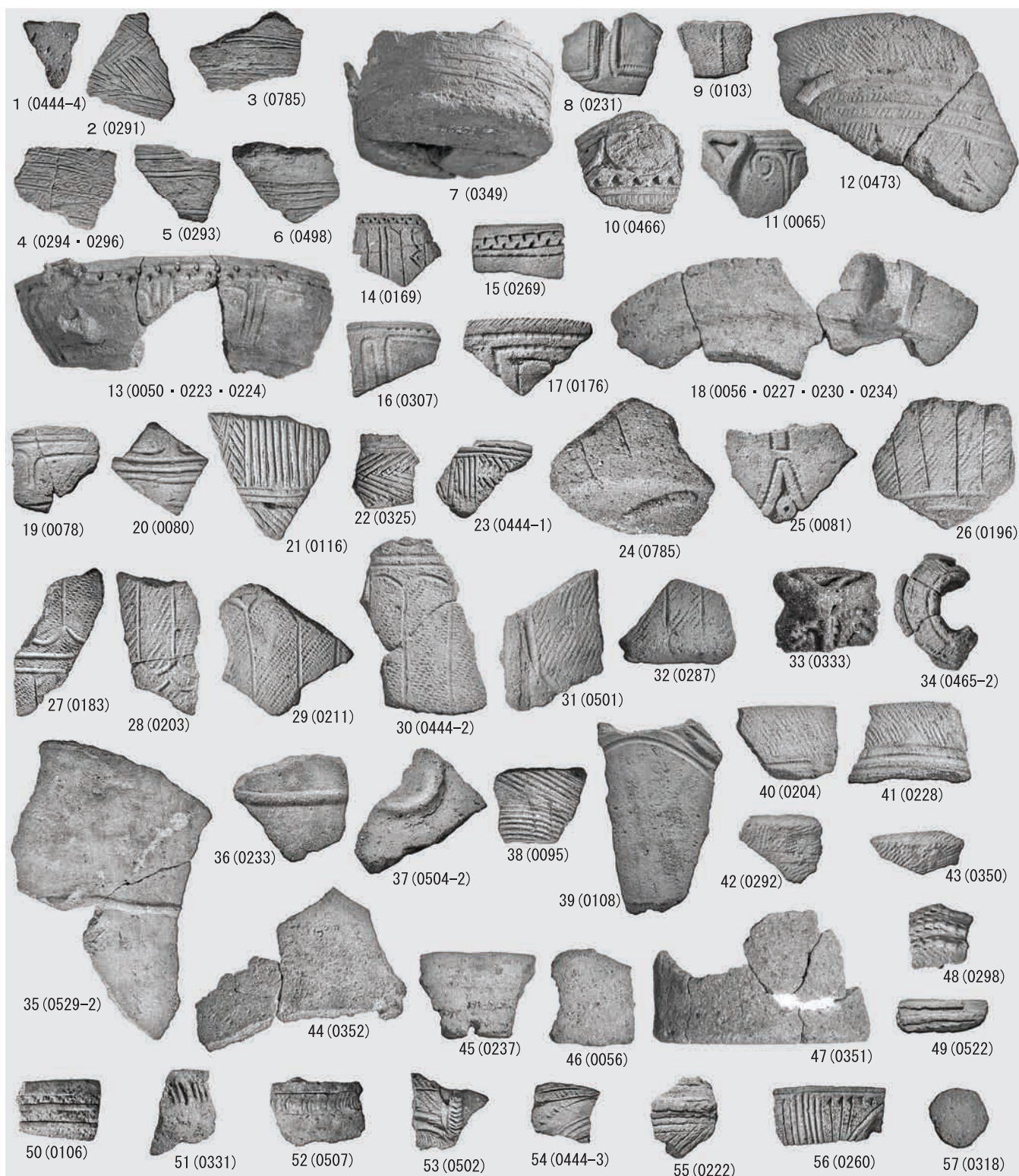
写真図版 48 5号溝状遺構
出土遺物



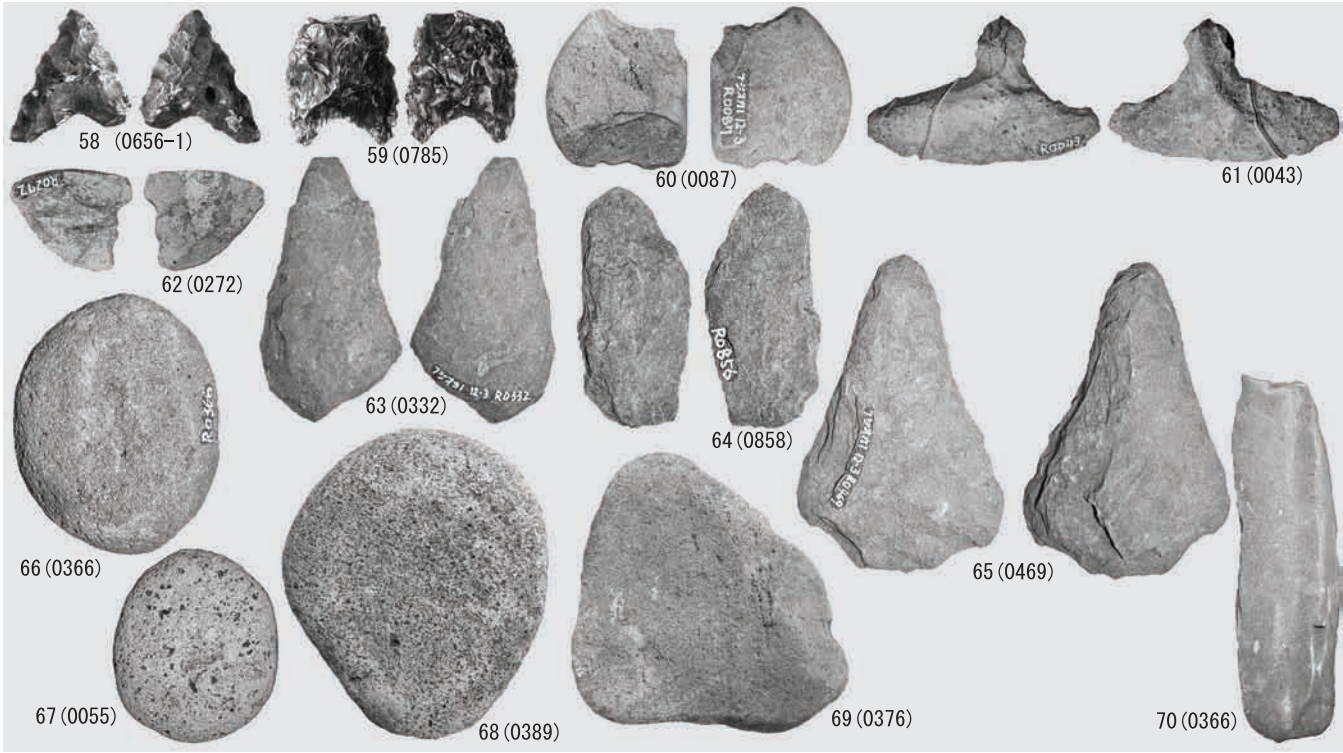
写真図版 49 6号溝状遺構 出土遺物



写真図版 50 7号溝状遺構 出土遺物



写真図版 51 包含層出土遺物①



写真図版 52 包含層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	まえのはらいせき ふじおかいちこふんぐん							
書名	前の原遺跡・富士岡1古墳群							
副書名	集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 81 集							
編著者名	佐藤 祐樹・小金澤 保雄・小金澤 彩可							
編集機関	富士市教育委員会							
所在地	〒 417-8601 静岡県富士市永田町1丁目 100 番地				電話 (0545) 55-2875			
発行機関	同 上							
所在地	同 上							
発行年月日	2024 年9月 30 日							
遺 跡 名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえのはらいせき 前の原遺跡	しずおかけん 静岡県	22210	58	35 度	138 度	2012.02.16 ～ 2012.03.31	302	集合住宅建設による
ふじおかいちこふんぐん 富士岡1古墳群	ふじし 富士市 ふじおか 富士岡 1614 番地		192	10 分 19 秒	43 分 40 秒			
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前の原遺跡	集落跡 散布地	縄文時代 前期後半～ 中期初頭	住居跡 台石 土坑 配石遺構 集石遺構 溝状遺構 ビット	縄文土器（諸磯式・五領ヶ台式等）、石器（石鏃、スクレイパー、石匙、石筥、打製石斧、磨・敲石、凹石、石皿）		縄文時代前期後半～中期初頭の住居跡が 14 軒検出された。縄文時代前期後半～中期初頭の遺物が出土した。		
		中世以降	土坑 溝状遺構 ビット	陶磁器				
富士岡1古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳周溝 溝状遺構 ビット	土師器		花川戸第4号墳の周溝が検出された。		
要約	富士山と愛鷹山の境となる赤淵川の河岸段丘上に縄文時代前期後半から中期初頭の集落が検出された。また古墳時代後期の古墳の周溝が検出された。土器は縄文時代中期前葉～中葉が主体であったが、胎土分析から推測された胎土の由来する主な地域は関東地方西部・中部地高地・東海地方東部・東海地方西部と広範囲となった。このことからこの調査地点は各地域から運ばれた土器が集合する縄文時代中期前葉～中葉の重要な要衝・結節地点であったことが推測される。そこは東に流れる赤淵川によって段丘化し、富士山の南麓地形と愛鷹山の西麓地形が接し、南には縄文時代前期の温暖化から徐々に寒冷化することによって海面が後退し陸地化が進む浮島沼が広がる地形的に変化に富んだユニークな場所でもある。							

本書は長期保存を考慮してすべて中性紙を使用しています。			
紙質	表紙	レザック	215kg
	見返し	色上質紙厚口	
	本文・写真図版	コート	90kg
印刷	オフセット印刷 モノクロ写真図版はダブルトーン印刷（黒色＋灰色＋スクリーン線 175 線以上）		
<p>文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できます。なお利用にあたっては、出典を明記してください。</p> <p>この報告書に関する記録図面類（写真類・画像データを含む）は、富士市教育委員会で保管していますので、利用する場合には連絡し、必要な手続きをお取りください。</p>			

富士市埋蔵文化財調査報告 第 81 集

前の原遺跡・富士岡1古墳群

集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 令和 6（2024）年 9 月 30 日

発行 富士市教育委員会

静岡県富士市永田町1丁目 100

電話（0545）30－7850 FAX（0545）30－6210

E-mail: ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本

松本印刷株式会社 沼津営業所

静岡県沼津市原 401-12

電話（055）967－6155

（富士市行政資料登録番号 R6-35）

